地域連携　学生フォーラム

in 大阪　2015

地域と共に学ぶ　連携の道標（みちしるべ）

報告集

主催：特定非営利活動法人　大学コンソーシアム大阪

目　　次

◎巻頭言 …… 1

◎次第 …… 2

◎各大学の発表

発表① すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト
摂南大学　外国語学部　【担当教員：浅野　英一 教授】…… 4

発表② 地域の自然と地元住民との繋がり
大阪産業大学　人間環境学部　【担当教員：前迫　ゆり 教授】…… 7

発表③ 熊野本宮子どもエコ☆ツアー
楽しぃんやさかい大和川水辺の楽校
関西大学　人間健康学部　【担当教員：安田　忠典 准教授】…… 13

発表④ 見山の郷　商品開発プロジェクト
追手門学院大学　経営学部　【担当教員：村上　喜郁 准教授】…… 24

発表⑤ 奈良県川上村の観光資源 PR 用 ICT インフラ構築
大阪工業大学　情報科学部　【担当教員：山内　雪路 教授】…… 30

発表⑥ 地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を間伐材と地場木材を
活用した木の塀「スーパーフェンス」で代替するプロジェクト
関西大学　社会安全学部　【担当教員：亀井　克之 教授】…… 33

発表⑦ 地域と子ども・大学生の繋がりを生身で感じる道草寺子屋
近畿大学　大学院総合理工学研究科　【担当教員：久　隆浩 教授】…… 39

発表⑧ e-yan プロジェクト　～産学連携による大阪のまち活性化活動～
近畿大学　総合社会学部　【担当教員：大野　司郎 講師】…… 48

発表⑨ 地元食材を観光客向けの名物料理に仕立てることによるブランド化への挑戦
「料理を作り、料理で創る立山ブランド」
近畿大学　経営学部　【担当教員：高橋　一夫 教授】…… 54

発表⑩ 大阪おみやげ「かるた」のデザイン、パッケージデザイン
大阪成蹊大学　芸術学部　【担当教員：門脇　英純 教授】…… 67

発表⑪ 官学連携次世代環境教育教材開発プロジェクト
大阪成蹊大学　芸術学部　【担当教員：門脇　英純 教授】…… 73

発表⑫ 河内木綿プロジェクト
大阪経済法科大学　教養部　【担当教員：呉　志賢 教授】…… 79

発表⑬ 実践のなかで組織行動・人的資源管理を学修する
大阪経済法科大学　経済学部　【担当教員：山路　崇正 講師】…… 87

◎当日の風景 …… 94

◎広報用チラシ（参考）…… 95

◎参加者アンケート集計結果 …… 97

巻頭言

特定非営利活動法人　大学コンソーシアム大阪
地域連携部会

本フォーラムは、会員大学の学生が地域と関わりながら取り組む研究活動やフィールドワーク、ボランティア活動等の内容について発表し、相互交流を行うことを目的に年に一度開催おり、学生による発表交流会を通じて、学生の地域連携に取り組む意識の高揚や自己点検を促進するとともに、地域との連携を行ううえでの配慮ポイントやノウハウを会員大学や自治体関係者等で共有し、会員大学の地域連携活動の活発化を目指す機会としています。

２回目を迎える今回は、会員43大学に公募し、エントリーのあった８大学13事業全てを発表いただきました。当日は学生による司会進行のもと、多方面におよぶ研究活動やフィールドワーク等について発表があり、学生同士による活発な意見交換と委員による講評が行われました。発表を通じて、大学の特性や地域固有の事情を踏まえたユニークな「地域連携」が実現されていることを互いに理解し、それを自らの活動に応用、工夫することにより、より有効な地域連携活動への発展に繋げる契機となりました。

本事業は次年度以降も継続的に開催することとしています。そして、発表された内容を大学コンソーシアム大阪のホームページ等で公開するなどして学生が取り組む地域連携活動を集約したデータベースを構築し、広く共有、活用するとともに、情報発信に繋げたいと考えます。

この報告集は、フォーラムでの13事業の発表を取りまとめたものであり、会員大学や関係各位の地域連携活動にお役立ていただければ幸いです。なお、発表交流会開催に際しまして、ご協力いただいた関係各位におかれましては、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

平成27（2015）年12月

地域連携　学生フォーラム　in 大阪　2015
次　第

◆日　時：2015（平成27）年10月18日（日）10：00～16：30
（交流茶話会：16：30～17：30）
◆場　所：難波御堂筋ホール９階　ルーム９Ａ

≪第１部≫

時間	テーマ・発表大学	内容
10：00～ 10：10	開会挨拶・趣旨説明・推進委員　紹介	
10：10～ 10：30	**すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト** 担当教員：浅野　英一 （摂南大学 外国語学部　教授）	少子高齢化と過疎化について、学生自身が過疎地域で活動し課題を発見し、大学生らしい発想と行動力で取り組んでいる。農業・ふるさと創生・観光の３つを柱にし「よそ者、若者、大学生」という立場でプロジェクトを展開している。
10：30～ 10：50	**地域の自然と地元住民との繋がり** 担当教員：前迫　ゆり （大阪産業大学 人間環境学部 教授）	私たちのプロジェクトでは、川や山での生態系調査や田畑の維持・保全を目的として、人と自然の共生をキーワードとして、活動している。また、地域のイベントにも参加し、地元住民との交流や情報発信を行っている。
10：50～ 11：10	**・熊野本宮子どもエコ☆ツアー** **・楽しぃんやさかい大和川水辺の楽校** 担当教員：安田　忠典 （関西大学 人間健康学部　准教授）	2010年、堺市に人間健康学部を設置する際、環境モデル都市堺が誇る市民向け環境教育機関である堺エコロジー大学に若者向けのコンテンツが少ないという課題があったのに対して、体験学習法を専攻する安田ゼミの学生が堺市の小学生を世界遺産の地熊野本宮へ３泊４日のエコツアーへ誘うというプログラムを開発した。
11：10～ 11：30	**見山の郷　商品開発プロジェクト** 担当教員：村上　喜郁 （追手門学院大学 経営学部　准教授）	「見山の郷 商品開発プロジェクト」は、追手門学院大学生が地域に興味を持ち、マネジメントのPBL活動を通じて、その人々・自治体・企業などをつなぐ「懸け橋」となり、地域の問題の解決を試みるものである。
11：30～ 11：40	休　　憩	
11：40～ 12：00	**奈良県川上村の観光資源PR用ICTインフラ構築** 担当教員：山内　雪路 （大阪工業大学 情報科学部　教授）	奈良県川上村の観光資源PRを担うシステム制作を行っている。村内の桜の名所にライブ中継カメラを設置しているほか、セミナーハウス等へのフリーWiFiスポット設営、山奥にある氷瀑の観測ネットワーク設営などに挑戦中である。
12：00～ 12：20	**地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を間伐材と地場木材を活用した木の塀「スーパーフェンス」で代替するプロジェクト** 担当教員：亀井　克之 （関西大学　社会安全学部　教授）	防災と地球環境問題の両方に役立つプロジェクトに、マーケティングという観点から、参画、協力し、その試みについてプレゼンする。
12：20～ 13：20	お昼休憩	

≪第２部≫

時間	タイトル・発表大学	内容
13：20〜 13：40	**地域と子ども・大学生の繋がりを生身で感じる道草寺子屋** 担当教員：久　隆浩 （近畿大学　大学院総合理工学研究科　教授）	本研究事業は地元で運営している道草寺子屋の事業を基にしている。それは学校放課後事業や学習塾事業または地域活動への参加が主である。それらの実践から子ども教育・地域との繋がりの在り方を分析した内容を発表する。
13：40〜 14：00	**e-yan プロジェクト 〜産学連携による大阪のまち活性化活動〜** 担当教員：大野　司郎 （近畿大学　総合社会学部　講師）	本プロジェクトは、大阪の「いーやん」な企業・人・イベントをラジオや記事などの情報配信を通じて、産業の交流を育み、まちの活性化につなげることを目的としている。これまでに実施してきた活動について発表する。
14：00〜 14：20	**地元食材を観光客向けの名物料理に仕立てることによるブランド化への挑戦 「料理を作り、料理で創る立山ブランド」** 担当教員：高橋　一夫 （近畿大学　経営学部　教授）	富山県立山町主催の地域活性化策を提案するコンペティションに参加し、町の特産物を使った名物料理を町民が創りだすことによって、町の新ブランドを展開する企画を、立山町町長をはじめとする審査員にプレゼンテーションを行った。
14：20〜 14：40	**大阪おみやげ「かるた」のデザイン、パッケージデザイン** 担当教員：門脇　英純 （大阪成蹊大学　芸術学部　教授）	株式会社カワキタと株式会社せのやとコラボし、新たな“大阪お土産モン”の誕生に向けたプロジェクトを発足。製品コンセプト、ターゲット層等の分析からよみ札、カルタイラスト・デザイン、商品パッケージの製作を行った。
14：40〜 14：50	休　　憩	

≪第３部≫

14：50〜 15：10	**官学連携次世代環境教育教材開発プロジェクト** 担当教員：門脇　英純 （大阪成蹊大学　芸術学部　教授）	長岡京市（京都府）と連携し、全国で使える子ども向けの環境学習教材「デジタル紙芝居」５作品を制作。また、クラウドファンディングを活用し、デジタル紙芝居をもとにした絵本を製作するプロジェクトを進行している。平成28年度には、京都府を中心に学校、図書館等に配布する計画。
15：10〜 15：30	**河内木綿プロジェクト** 担当教員：呉　志賢 （大阪経済法科大学　教養部　教授）	大阪経済法科大学 BLP 呉ゼミ「河内木綿プロジェクト」が、地元八尾市の伝統文化である河内木綿文化を学生の新しい発想で現代に復活させ、世界に発信することで、地域に貢献していく活動をしている。
15：30〜 15：50	**実践のなかで組織行動・人的資源管理を学修する** 担当教員：山路　崇正 （大阪経済法科大学　経済学部　講師）	山路ゼミナールでは、擬似的に会社組織を設立し社長（学生リーダー）が中心となり「天王寺　真田幸村博」でのイベント企画、「玉造 幸村ロード」の商店街活性化プロジェクトを通じて実践のなかで組織行動・人的資源管理を学修している。
15：50〜 16：00	休　　憩	
16：00〜 16：30	講評・閉会挨拶	

【大学コンソーシアム大阪　地域連携部会　推進委員】
委員長　久　　隆浩（近畿大学　総合社会学部　教授）
委　員　鎌苅　宏司（大阪学院大学　経済学部　教授）
委　員　廣藤千代子（大阪学院大学短期大学部　経営実務科　教授）

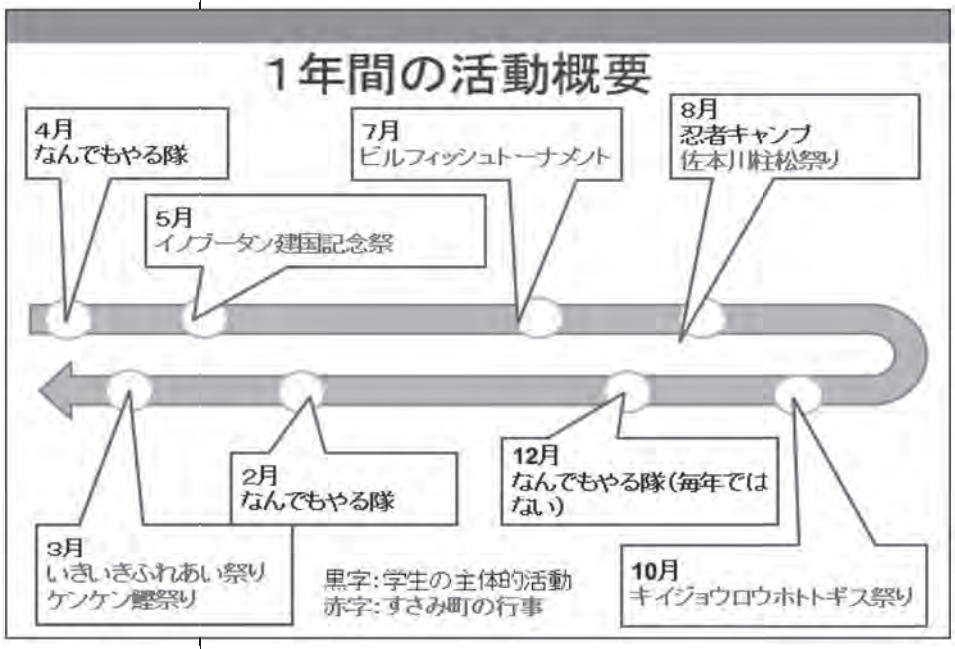
【大学コンソーシアム大阪　事務局】
地域連携コーディネーター　中川　邦彦

主催：特定非営利活動法人　大学コンソーシアム大阪

各大学の発表

発表①

研究テーマ名	すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト
大　学　名	摂南大学
担 当 教 員	外国語学部　教授　浅野　英一
連　携　先	和歌山県西牟婁郡すさみ町
活動の概要	本プロジェクトは、日本が持つ課題の１つである少子高齢化と過疎化について、学生自身が過疎地域で活動し課題を自ら発見し、大学生らしい発想と行動力で、未知へ答えを追求していく取り組みである。農業・ふるさと創生・観光の３つを柱にしている。すさみ町が開催する大きなイベントや伝統的な祭りの継続的な開催や、廃校となった小学校での青少年育成キャンプを企画し、「よそ者、若者、大学生」という立場でプロジェクトを展開している。ふるさと創生・観光分野においては、イノブータン建国記念祭・ビルフィシュトーナメント、バリアフリー大会、佐本川柱松祭り、キイジョウロホトトギス祭り、ケンケン鰹祭り、いきいきふれ愛祭りのサポートの他に、学生独自のイベントとして「忍者キャンプ」の企画・運営や「なんでもやる隊」を実施している。キャンプで使う大量の食材を地元で購入することで、地域農家の営農意欲の喚起も図っている。学生が、すさみ町役場、地元住民、NPO などの活動グループと直接関わることで、学生の社会人力、プロジェクトの推進・運営などの人間力の向上を図り、プロジェクトを推進しながら、活動的に行動する経験を就職力の向上につなげている。その一つが「段取り」といわれるもので、中長期的な計画について、締め切りを設定し、そこから逆算して、いつ何をやるべきか、仕事の道筋を立てる知識と技術や、仕事全体をひとつひとつの細かいタスクに分割し、そこで必要な時間をゴール（締切日）から逆算することなど、現場で得た成功体験、失敗経験を蓄積している。頭で理解していても行動できないことが多くチーム力への意識を変革させるため学生たちは常に「考え抜くこと」「チームで活動すること」「積極的に行動すること」が求められている。情報共有をしながらチームメンバーの合意を形成して、計画的かつ持続的にプロジェクトを遂行させている。
これまでの活動実績	２月　なんでもやる隊：野良仕事、道路清掃、川清掃など、地域のから要望に基づいて実施。 ３月　いきいきふれ愛祭り（すさみ町独自のイベント）ケンケン鰹祭り（すさみ町独自のイベント） ４・５月　イノブータン建国記念祭（すさみ町のイベント） ７月　なんでもやる隊：独居老人宅訪問、バリアフリー大会（すさみ町のイベント）　台風接近のため中止 ８月　忍者キャンプ：大学生30人と、大阪の小学生約50人が廃校となった小学校に４日間合宿。忍者修行をイメージさせる各種自然体験型学習を実施。竹ランタンづくりなどの「忍者工作教室」を通じてものづくりの楽しさ、「忍者ゲーム」（人間関係構築ゲーム）などを通じて自主性や協調性、コミュニケーション能力を育んだ。 ８月　佐本川柱松祭り：江戸時代から220年以上続いた伝統的なお祭り。地元保存会は高齢化で2011年を最後に解散。大学生の力で継続できないかと交渉し、元保存会会員から指導を受けて2012年復活させ現在に至っている。

	時　期	内　　容
年間活動計画		 本プロジェクトは、総合大学として学年が違う複数の学部生による活動で、キーワードは、「チャレンジ・成功体験・達成感」であり「小さな成功体験」の積み重ねを最も重要な基礎としている。乗り越えなければならないハードルを少しずつ高くし、年間７～８回の活動が、成功体験となり、そして、その成功体験を達成感として実感することで自分の成長過程を確認し、それが次へのステップアップ（ワクワク感）につながる仕掛け（システム）作りを構築した。学生たちは、地域活性化については、まったくの素人である。すさみ町民にとっては「よそもの」である都会で育った学生の文化と、いなかの文化には大きな違いがあり、それを克服させるコミュニケーション力を学生自身が身に着けなければならない。学生たちが活動拠点としている佐本地域は高齢化率60パーセント以上の地域で、和歌山県すさみ町の中心から更に山奥にあり、大学から寝屋川市から佐本地域まで、貸切大型バスで片道５時間という距離がある。この距離がPDCAを行うために重要なキーポイントになっている。漁業に例えると遠洋漁業のイメージで大学を出港（出発）して、遠洋（すさみ町）で漁業（活動）するためには、誰が、いつ、何を、どこで、どのような方法で行うかを綿密に計画し、実施するかなど多くの課題とそれを乗り越える手段を現実に体験している。活動地域が大学のお膝元の地域であれば、近くなので、「なんとかなる」という気の緩みがでるが、片道５時間という距離は、その「なんとかなる」という気の緩みを無くす効果があった。

紀伊民報
発行所 紀伊民報社
和歌山県田辺市秋津町100番地 〒646-8660
電話・0739(22)7171(代)
営業FAX・0739(26)0077
編集FAX・0739(25)3094
振替口座・00930-2-21977

摂南大学の学生が実施
若い力で伝統継承
すさみの佐本川柱松

すさみ町佐本地区で13日夜、220年以上の歴史がある盆の伝統行事「佐本川柱松」が営まれた。主催してきた地元保存会は高齢化などのため昨年を最後に解散。途絶えてしまうと心配されたが、佐本地区の活性化に取り組む摂南大学（大阪府寝屋川市）が元保存会会員らの指導を受け、実施した。地元からは「若い力のおかげで続けることができた」と喜ぶ声が聞かれた。

△柱松に次々と投げ入れられるたいまつの火が弧を描く（13日、すさみ町佐本中で）

摂南大学は毎年、大阪府の子どもを対象に、佐本地区を拠点にしたキャンプをしている。今年も学生や教職員ら約40人が12～15日の日程で小学生約50人を引率した。13日は旧佐本小学校で、地元の人と交流を深めようと夜店やゲーム、音楽ライブなどを盛り込んだ「夏まつり」を開催。柱松をその催しの一つに組み入れた。

柱松は、丸太の先に松の枝や稲わらで作った「巣」をくくりつけて立てたもの。巣に火が付くまで、下から次々とたいまつを投げ入れる。

今年は本来の半分ほどの高さ7㍍と8㍍の2本を立てた。会場が河原ではなく、旧佐本小学校運動場になったが、子どもや学生、地元住民、盆で帰省した家族ら多くの人が参加した。雨が降る中、苦戦したが、2本とも何とか着火。中に仕込んでいた花火が上がり、大きな拍手が起こった。

寝屋川市桜小学校4年の山本華帆さん（10）は「たいまつはあまり飛ばなかったけど楽しかった。220年と聞いて長いことしているのでびっくりした」。周参見小4年の中山田匠君（10）は「投げるとき、火が当たりそうで怖かった。大阪の子らと来年もしたい」と話した。

佐本川柱松は江戸時代に始まった。1787（天明7）年と88年の夏に疫病が流行。犠牲になった村人の供養と無

Bellco

産經新聞
平成26年（2014）日刊25029号
4｜23［水］
夕刊
THE SANKEI SHIMBUN
販売・配達に関するお問い合わせ 06-6633-9357
購読のお申し込み 0120-34-3733
http://www.sankei.cn.jp/reader

好評開催中！
大阪南港ATC

和歌山・すさみ町　　ケニア

限界集落➡海外協力
鍛えた交流力で世界に
大学生ボランティア

@NOW

過疎と高齢化が進む和歌山県内の限界集落でお年寄りたちの生活支援をしている学生たちが、その経験を生かして青年海外協力隊員としてアフリカなどで活動している。草刈りや水路掃除、1人暮らしのお年寄り宅の訪問…。山村での活動を通じてグローバルな人材にたくましく成長していく姿は、"内向き志向"といわれる今の若者たちへの刺激ともなりそうだ。（秋山紀浩）

上 和歌山県すさみ町でお年寄りと談笑する学生たち
下 派遣先のケニアで教育指導にあたる岬柳さん（右端）。すさみ町での活動が原点になっているという

紀伊半島のほぼ南端に位置する和歌山県すさみ町。人口約4600人の町は過疎と高齢化が深刻で、39の集落のうち半分近い18ほどが、人口の50%以上が65歳を超える高齢者となった限界集落だ。その中でも、「佐本・大都河地区」は人口約350人、高齢化率は60%以上にのぼる。

この地で平成21年からボランティア活動をしているのが摂南大学（大阪府寝屋川市）の学生たちだ。住宅を一軒一軒回って住民が困っていることを把握し、草刈りや1人暮らしのお年寄りの見守り活動だけでなく、存続が危ぶまれていた220年以上前からの伝統行事「佐本川柱松祭り」も、住民らの指導を受けながら継承に力を尽くした。

大学から片道約5時間かかる遠隔地での活動は困難の連続だった。それでも最初は「面白そう」から入った学生たちが、課題の壁にぶつかって苦闘し、粘り強さや主体性、コミュニケーション能力などを身につけていった。指導にあたる同大学外国語学部の浅野英一教授は「アルバイトでは得ることができない活動です」と意義を強調する。

実は、このすさみ町での「ローカル」な活動が、海外で大いに役立っている。「住民とコミュニケーションを図り、周りの人を巻き込みながら課題を解決する達成感は、海外に行った際に貴重な経験になった」。そう話すのは、青年海外協力隊員として23年にケニアに赴いた同大学外国語学部4年の岬柳風花さん（22）。ケニアでは保護観察施設で教育指導にあたり、最初は警戒したが、すぐに生徒たちの笑顔に癒やされたという。「海外に出て視野や考え方が広がった。人の温かさも感じた」

活動の原点となったのは、大学1年のころから携わったすさみ町でのボランティアだ。経験はケニアでも役に立った。何よりすさみ町の人たちから「ありがとう」の言葉をたくさんもらったことが、協力隊に参加するきっかけになった。

同大学ではこれまで、約30人の現役学生が青年海外協力隊として派遣されている。この数は国内の大学でトップクラス。しかも大半がボランティア経験者だ。

「初めは興味本位でも、実践活動を経る中で自覚や責任感に目覚め、自主的に行動できるまで成長していく」（浅野教授）といい、そんな学生たちの就職内定率はかなり高いという。

近年の若者は"内向き志向"が強いといわれるが、すさみ町で活動する学生たちにとっては、身近な課題に取り組むことがグローバル化へのステップになっている。

発表②

研究テーマ名	地域の自然と地元住民との繋がり
大　学　名	大阪産業大学
担 当 教 員	人間環境学部　教授　前迫　ゆり
連　携　先	四條畷学園　大東市竜間地区　明日香の未来を守る会
活動の概要	私たち「森・川・田んぼプロジェクト」は大阪産業大学のプロジェクト共育の一つとして、自然環境の調査・保全にかかわる活動を行っており、2008年の立ち上げ以来、2015年度で７年目を迎える。 森林や河川から農地までを幅広く対象としており、生態系領域、畑領域、田んぼ領域の３領域で活動を行っている。 生態系領域では、大学横を流れている鍋田川や生駒山内にある室池園地に、生息している動植物の種類を定期的に調査記録分析することで、季節の移り変わりによる生物相の変化などを明らかにしようと努力している。 畑領域では、生駒山の畑で，地元の住民の指導を受けながら、ジャガイモ・サツマイモ・タマネギ・ダイコンなどを栽培している。収穫した野菜は、大学の食堂で料理を提供したり、大学のオープンキャンパスの際に調理して配布したりしている。2015年10月には、四条畷学園小学校の遠足の一環として、小学１・２年生にサツマイモの収穫を体験させながら自然の恵みを伝えるイベントを企画している。 田んぼ領域では、奈良県明日香村稲渕における棚田オーナー制度を利用して昔ながらの米作りを体験するとともに、原風景の保全、さらには田んぼにいる希少な水生昆虫の調査などを行っている。 生態系調査の結果やこれらの活動内容はパネルなどにまとめ、オープンキャンパス，大学祭，大東市の環境イベントなどで発表や展示を行い、来場した地元の方々や中高生にメンバーからの解説を交えて見てもらい、それをきっかけに自然環境に興味・関心を持ってもらうように心掛けている。 とくに2015年度は、生態系調査で得られたデータを解析し、2016年３月に大阪自然史博物館の自然史フェスティバルで発表することを大きな目標に掲げている。
これまでの活動実績	2008年にこのプロジェクトが発足して以来、2009年度から大東市龍間地区にて畑を借りて畑作活動、奈良県明日香村稲渕において稲作活動を継続的に実施し、生態系調査も継続的に行っている。また、前年度は大学横を流れている鍋田川において年間を通じ、生態系調査、定点写真撮影を行った。 今年度は鍋田川の調査を行いつつ、生駒山の室池にてコドラート法等で、植生の変遷を数年間に渡り観察していく予定である。 また、顧問の前迫教授の研究の一環である、吉野山や春日山の生態系調査も行っている。 そして、自分たちが行っている活動の詳細を、大東環境フェア、学園祭、オープンキャンパスなどで発表も継続的に行っている。

	時　期	内　　容
年間活動計画	4月	新入生勧誘 蓮華祭り（飛鳥）
	5月	年間計画立て（テーマ決定） 荒田お越し（田んぼ領域） 室池などでの生態系調査
	6月	オープンキャンパスへの参加（情報発信） 畦塗り、田植え、蛍の夕べ（田んぼ領域） ジャガイモ・タマネギ収穫、サツマイモ植えつけ（畑領域）
	7月	室池を対象とした生態系調査開始…7月から11月ごろまで（生態系領域） ジャンボ案山子たて（田んぼ領域）
	8月	オープンキャンパスへの参加（情報発信） 遠地への生態系調査 室池を対象とした生態系調査
	9月	彼岸花祭り（田んぼ領域） 室池を対象とした生態系調査
	10月	四条畷学園の小学生と共同でサツマイモ収穫（畑領域） 稲刈り・はざかけ（田んぼ領域） 大根種まき（畑領域）
	11月	大阪産業大学の学園祭での展示 四条畷学園での農作物の提供（畑領域） 脱穀・籾摺り（田んぼ領域） 収穫祭（田んぼ領域）
	12月	大阪自然史博物館での発表に向けての準備
	1月	綱掛神事 玉ねぎ植えつけ（畑領域）
	2月	大根収穫（畑領域） 大学での成果発表会
	3月	大阪自然史博物館での発表 幹部交代

参加学生

勝部　竜弥、大川　裕太、川崎　慶信、大月　芳朗、掛樋　菜美、小坂　浩一、濱田　拓海、村上　雅一、阿部　竜大、井村　将太郎、柏木　苑代、北田　幹裕、志知　裕介、田中　佑弥、藤村　直道、井上　和也、角石　龍、高阪　美咲、中村　政貴、西川　圭一、山尾　侑也、山口　隼平、吉田　悠希、鷲尾　寛豊

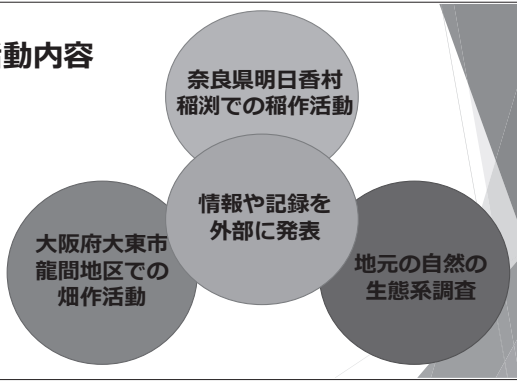
地域の自然と
地元住民との繋がり

大阪産業大学
森・川・田んぼプロジェクト
川崎　慶信

大阪産業大学のプロジェクト共育とは？

教員が提案した魅力あるテーマのもとに学部・学科といった専門分野の枠組みを越えて学生が集まり、学生が自主的にそのテーマに取り組むことにより自らの問題解決できる能力が養えるプログラムです。

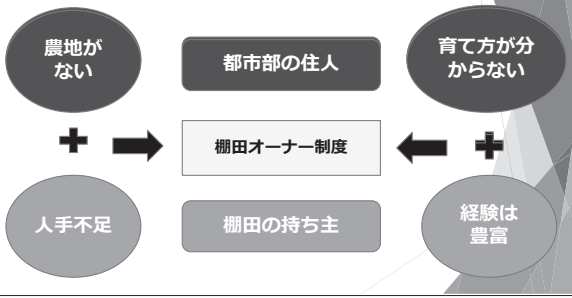
活動内容



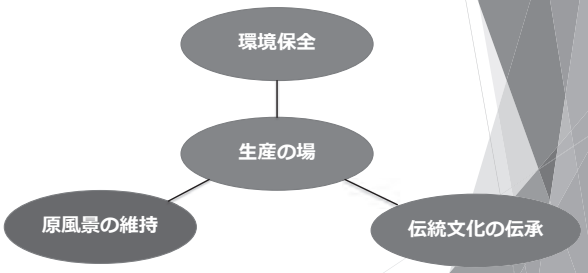
稲渕の棚田について

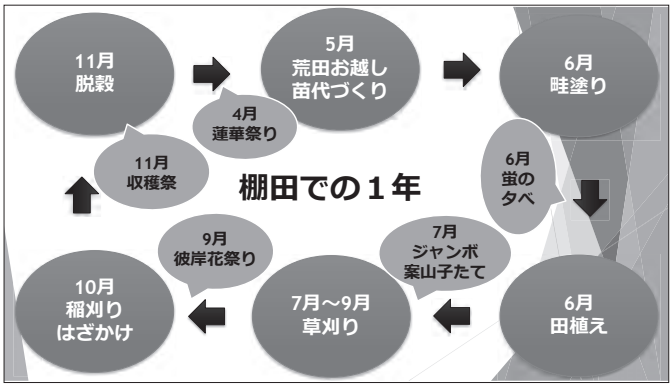
＊奈良県明日香村稲渕の棚田は「日本の棚田百選」に選ばれている。当プロジェクトは2009年から継続して棚田オーナ制度を利用し、稲作活動を行っている。

棚田オーナー制度について



棚田の役割





4月
蓮華祭り

5月
荒田起こし・苗代作り

6月
畔塗り

6月
ほたるの夕べ

6月
田植え

7月
ジャンボ案山子立て＆草刈り

9月
彼岸花祭り

10月
稲刈り・はざかけ

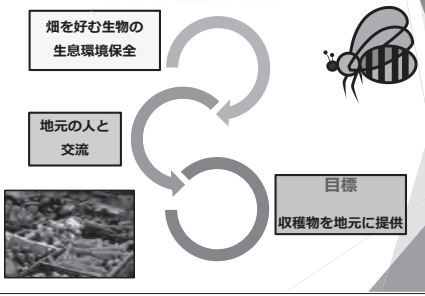
11月
脱穀

11月
収穫祭

龍間の畑について

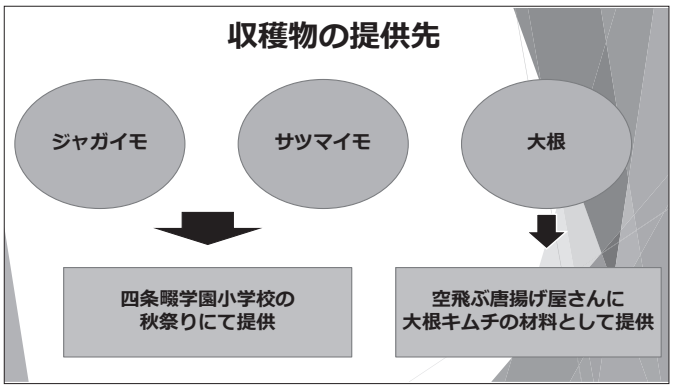
- 大阪産業大学の東部キャンパス付近にある貸農園で畑作活動を行っている。
- 作物を収穫するだけでなく、畑を通して地元の人と交流することも目的である。

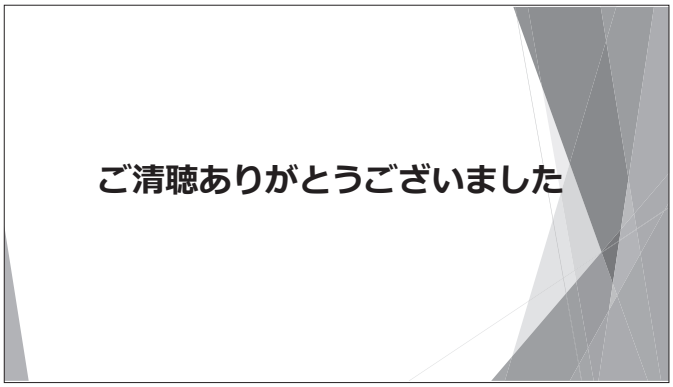
畑の活動概要



野菜について

四条畷学園小学校の遠足の様子


収穫物の提供先
ジャガイモ
サツマイモ
大根
四条畷学園小学校の
秋祭りにて提供
空飛ぶ唐揚げ屋さんに
大根キムチの材料として提供


ご清聴ありがとうございました

発表③

研究テーマ名	熊野本宮子どもエコ☆ツアー
大　学　名	関西大学
担 当 教 員	人間健康学部　准教授　安田　忠典
連　携　先	堺エコロジー大学、堺市環境共生課、田辺市観光課、田辺市本宮行政局、田辺市森林局、田辺市熊野ツーリズムビューロー、NPO法人熊野本宮
活動の概要	環境モデル都市に指定されている堺市では、市民向けの環境教育を推進するために「堺エコロジー大学」を開設している。2010年堺市に開設された関西大学人間健康学部も堺エコ大と連携して「熊野本宮子どもエコツアー」という市民公募型のキャンプツアーを開催している。 ツアーは８月下旬、和歌山県田辺市本宮地区の施設を会場に、公募に応じた堺市の小学校５，６年生30名と、ほぼ同数の学生とで３泊４日の自然体験キャンプを実施するというものである。ツアーのテーマは“健全な青少年の育成と環境保全”で、小学生たちに自然体験を通した環境学習として、川遊び、林業体験（杉檜の間伐等）、キャンプファイヤー、そして世界文化遺産として登録されている熊野古道中辺路ルートトレッキングなどを体験してもらう。 これらのプログラムは学生主体で立案し、堺市や田辺市の職員の方々と話し合いを重ねてつくりあげている。また学生は全員キャンプリーダーとして参画するために、プロジェクトアドベンチャーという体験学習法を体系的に習得している。学生にとっては、体験学習法の実習としての学びの場にもなっているのである。さらに、両市の職員や大学の教職員の交流の場としても極めて有益な機会となっている。 この活動は、昨年（2014年）５月に堺市と田辺市の間で締結された友好都市提携を象徴する事業の一つとしても高く評価されている。
これまでの活動実績	田辺市ゆかりの博物学者南方熊楠の研究に携わるゼミの指導教官安田准教授は、2008年から熊野本宮で間伐ボランティアを体験する授業を展開してきた。堺市に人間健康学部が開設され、最初のゼミ活動が始まった2012年度には、熊野本宮子どもエコツアーをゼミ生の学びの場として、そして堺市、田辺市との連携事業として両市のみなさんとの協力のもとで立ち上げた。以来、ツアーは今年で４回目となる。堺市民にも年々認知されてきていて、今年は30名の定員に対して51名の応募があった。 また、上述のとおり、田辺市と堺市との友好都市提携の架け橋としても機能しており、両市民ならびに職員がこのツアーを通して交流を深めている。また、田辺市と関西大学の連携強化にも一役買っており、ゼミ生６名が同市観光課との連携の下で、今年７月24、25日に開催された田辺祭の鉾の引手として参加した。

	時　期	内　　容
年間活動計画	4 /11-12	ゼミ合宿（田辺市）
	5 / 4 - 5	AP 講習（リーダー育成）
	6 /27-28	ゼミ合宿（大阪府岬町・リーダー育成）
	7 /31	救急安全法、水上安全法講習
	8 / 8	エコツアー事前説明会
	8 /18-19	エコツアー最終下見、会議
	8 /27-30	エコツアー本番
	10/ 3	振り返りの集い

都市デザイン　環境・アセットマネジメント　教育　文化・スポーツ振興

堺エコロジー大学連携 熊野本宮子どもエコツアー

図1　キャンプツアー（2013年第2回）の様子

◇活動の概要◇

目　的	『環境モデル都市』である堺市の子どもたちに、自然体験を通した環境学習の基盤を形成してもらう
連携メンバーおよび役割	大阪府堺市･･･企画、参加者への告知、受付、キャンプへの添乗、予算の管理 和歌山県田辺市･･･企画、活動場所の貸与、キャンプの運営補助 田辺市熊野ツーリズムビューロー･･･旅行に関する業務全般 関西大学人間健康学部准教授　安田忠典･･･ 企画、キャンプリーダー（学生）の養成、キャンプの運営全般、前後の学習指導
活動地域	和歌山県田辺市本宮地区／大阪府堺市堺区
活動期間	2013年4月～11月（キャンプ実施は8月29日～9月1日・3泊4日）
費　用	学内における各種資金および受益者負担

◇連携の経緯◇

2010年の人間健康学部開設の際に、堺市との地域連携を模索するなかで、安田が別頁の「水辺の楽校」の運営委員として参画。そこで「堺エコロジー大学」の事務局と協働したのが契機となって、安田が堺エコロジー大学運営委員に就任。人間健康学部の学生のパワーを生かした堺エコロジー大学のコンテンツとして、2008年度より全学共通科目「野外活動実習」のフィールドとして訪れていた田辺市本宮地区へ子どもたちを誘うツアーを企画・運営するに至った。

◇解決すべき課題◇

（1）若年者向け自然体験学習機会の不足
（2）都市と山村との地域連携・交流の活発化
（3）本宮地区の活性化
（4）熊野本宮の観光コンテンツの開発
（5）堺エコ大の環境学習プログラムの開発

図2　キャンプツアー（2013年第1回）の様子

◇大学の役割◇

「体験学習法」を専攻する人間健康学部のゼミ学生たちが、子どもたちの自然体験を支援するキャンプを企画。活動的な若年者向けの環境教育プログラムを模索していた堺エコロジー大学へ提供。実質的な企画と運営はほぼすべて学生が担当した。キャンプのフィールドとしては、市町村合併以前から堺市と旧本宮町の繋がりがあったことなどから、世界文化遺産として登録されている熊野本宮大社や熊野古道を擁する和歌山県田辺市の協力を得た。なお、この活動は両都市が2014年5月に友好都市提携を結ぶに至る起爆剤の一つとなった。

◇成果◇

（1）子どもたちの成長を支援できた。学生の学びも深い。
（2）堺市と田辺市との連携の強化（2014年5月、堺市・田辺市友好都市提携締結）
（3）教育旅行等、熊野の新たな観光コンテンツ開発に寄与できた
（4）堺エコロジー大学プログラムの活性化
（5）過疎地域の住民との交流

◇今後の展望◇

（1）堺市、田辺市、関大の連携事業として定着させること
（2）拠点として使用した施設（旧皆地小学校）の整備
（3）施設を基盤としたさらに多様なプログラムの展開
（4）学部、あるいは大学全体での関わり方の模索

◇現場の声◇

・参加者の保護者

弟も5年生になったら絶対参加するそうなのでまた再来年よろしくお願いします！
どうかこのプロジェクトが末永く続きますように！

・堺市役所担当者

参加者倍増、皆地の拠点の復活等、昨年以上にいろいろな要素が加わった難易度の高い事業にも関わらず大成功に終わったのも、皆さんのおかげです。

◇研究者の紹介◇

人間健康学部　准教授
安田　忠典
（やすだ　ただのり）

人間健康学部では、レクリエーション、ファシリテーション等のトレーニングをしている明るくユーモアあふれる学生たちが、実際の経験の場を求めています。そんな若い力を求めている現場とコラボできます！

研究テーマ名	楽しぃんやさかい大和川水辺の楽校
大　学　名	関西大学
担 当 教 員	人間健康学部　准教授　安田　忠典
連　携　先	国土交通省大和川河川事務所 堺出張所・堺市教育委員会学校教育部 学校企画課 大和川線沿線連絡協議会（三宝・錦西・錦綾・浅香山・東浅香山・新浅香山・五箇荘東の７校区）・大和川水辺の楽校協議会・堺市建設局土木部河川水路課（事務局）・雑魚寝館・関西大学・大阪府立大学・大阪動植物海洋専門学校・堺市立堺高等学校・株式会社総合水研究所・大井建設株式会社
活動の概要	「水辺の楽校」とは、身近な河川等を利用して子どもたちの自然体験の不足を補うことを目的に、2003年に立ち上げられた国土交通省のプロジェクトである。2013年３月末時点で全国に281の登録があり、「大和川水辺の楽校」もその１つ（大阪府下唯一）として活動している。 私たちが学ぶ関西大学人間健康学部は2010年堺市に開設された当初から「大和川水辺の楽校」（2009年開校）を運営する「子どもの水辺協議会」に協力してきた。当時、国交省からの補助金が満期を迎えようとしていた協議会ではその構成を、堺市自治連合会七校区（三宝・錦西・錦綾・浅香山・東浅香山・新浅香山・五箇荘東）、水辺の楽校協議会（市民）、教育委員会（堺市）、河川水路課（堺市）、大和川河川事務所（国交省）の５つに絞り、ボランティアを軸に低コストで運営する方途を模索していたのだった。 その後、このユニークな民官学三者連携事業は、著名な浅香山つつじまつりに合わせて開催する「水辺の楽校祭り」を軸に、近隣小学校の校外授業、市民公募型の「水辺の楽校」等を展開し、汚濁河川として有名であった大和川の水質回復と、学びや憩いの場として都市の水辺がもつ魅力を市民と共有するための活動を継続している。 私たち学生は、体験学習を専攻するゼミに所属しており、そこで学んだ知識や技術を活かして、主に参加者の案内や安全管理を担当している。なかでも一番のお楽しみは、子どもたちと一緒に川に入って魚とりをする活動である。
これまでの活動実績	今年度は、５月６日に浅香山つつじまつりに合わせて大和川水辺の楽校祭りを開催。私たちは「水質検査」「魚とり」のプログラムを支援、また「ヨーヨー釣り」の屋台を出店してイベントに花を添えた。大型連休の最終日であったが、地元の子どもたちや関係者の方々と触れ合うことができとてもよい経験となった。 ５月27日には錦陵小学校３年生30名が大和川を訪問、私たちは大阪動植物海洋専門学校の学生と協力して子どもたちの水質検査、魚とり等を支援した。 このときの活動がとても好評だったため、翌月29日、今度は同校の４年生42名が来訪、午前中いっぱい川で魚とり等を楽しんだ。この日は天気もよく、子どもたちの笑顔が多く見られた。たくさんの生き物を観察することができ、中には大きな亀を捕まえた子もいて楽しい時間を過ごすことができた。 また、毎月開催される子どもの水辺協議会は私たちのキャンパスを会場として提供しており、私たち学生もオブザーバーとして会議に出席している。

	時　期	内　　容
年間活動計画	4 /15	子どもの水辺協議会
	5 / 6	水辺祭り
	5 /27	水辺の楽校（錦陵小学校３年生対象）
	6 / 9	子どもの水辺協議会
	6 /29	水辺の楽校（錦陵小学校４年生対象）
	7 /15	子どもの水辺協議会
	8 /14-21	大和川フォトコンテスト写真展 （市役所高層館１Ｆロビー）
	8 /22	水辺の楽校（市民公募型）
	10/ 7 （予定）	子どもの水辺協議会
	秋　（予定）	堺市下水処理場、浄水場見学

環境・アセットマネジメント　教育

楽しいんやさかい 大和川水辺の楽校(がっこう)

遊び、自然体験、自然学習の場として水辺を利用することで、子どもたちの自然体験や生活体験の不足を補うことが目的です。国土交通省のプロジェクト

図1　水辺の楽校の様子

◇活動の概要◇

目　的	河川の水辺を利用して、子どもたちの自然体験や生活体験、環境学習の場をつくり、その成長を支援する
連携メンバーおよび役割	大和川水辺の楽校協議会･･･企画・運営 大和川線沿線連絡協議会（三宝／錦西／錦綾／浅香山／東浅香山／新浅香山／五箇荘東の７校区）･･･企画・運営 国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所堺出張所･･･企画・運営・施設貸与 堺市教育委員会学校教育部学校企画課･･･企画・運営・参加者募集 堺市建設局土木部河川水路課･･･事務局 関西大学人間健康学部　安田忠典ゼミ･･･企画・運営、学生ボランティア派遣　ほか
活動地域	大和川（大阪府堺市）
活動期間	通年（5月、8月、10月、11月に公開プログラム実施）
費　用	各種補助金／学内における各種資金

◇連携の経緯◇

国交省が推進するプログラムとして2007年にスタートした「大和川水辺の楽校」は、2010年に開設された関西大学堺キャンパスから至近の大和川河川公園を会場に展開していた。そこで本学は地域への貢献活動として、開設年度から運営委員、学生ボランティアを派遣し、会議場所の提供等も含めて全面的に参画。昨年からは浅香山浄水場近辺のつつじ祭りとジョイントして独自のプログラムを推進している。

◇解決すべき課題◇

（1）独自のプログラム作成
（2）運営基盤（事務局、物品、会議場所等）の整備
（3）プログラム参加者の発掘
（4）広報体制の強化
（5）地域との連携強化

◇大学の役割◇

水辺の楽校協議会の運営委員を務め、企画・運営に携わる。

堺キャンパスのボランティアネットワークに登録した学生がキャンパス至近の大和川公園にて開催される「水辺の楽校祭り」に参加。また、安田ゼミの学生が協議会にオブザーバー参加し、学生が企画・運営する講習会や「水辺の楽校祭り」のコンテンツを提供している。

◇成果◇

（1）「水辺の楽校」の継続、発展
（2）安定した運営の基盤形成
（3）地域住民の運営による関係機関間の連帯感醸成
（4）子どもたちやボランティア学生の学び
（5）大学が地域に受け入れられたこと

大和川水辺の楽校を開校します！

水質が大きく改善した大和川で、生き物観察、水質調査などを行う水辺の楽校を開校します。

日時：10月6日（日）午前10～12時
場所：大和川河川敷
（大和川河川事務所 川がわ：地図参照）
※駐車場はありませんので公共交通機関を利用して下さい。

◆内　容：生きもの観察、水質調査
◆参　加：無料
◆対　象：小学生とその保護者
◆服　装：動きやすい服装、川に入れる靴（サンダル不可）
ひざ程度まで水に入ります（強制はしません）
◆持 ち 物：タオル、水等、帽子
◆申し込み：9月2日から下記電子メール（水辺の楽校事務局宛て）へ氏名・住所・学年・参加人数を連絡してください。info@akai-mizube.org
※先着40人です
◆問合せ先：水辺の楽校事務局（TEL:070-5503-6261）
河川水路課（TEL:072-228-7418　FAX:228-1868）
※雨天中止です。堺市で晴れていても奈良県など（大和川上流域）で雨が降り増水した場合も中止となります。周辺の気象にご注意ください。

図2　水辺の楽校リーフレット

◇今後の展望◇

（1）プログラムをさらに洗練していく
（2）市民、とくに地域住民へのさらなる定着
（3）大学としての参加をさらにアピール
（4）学生の参加をさらに促進する
（5）成果も含めた広報の強化

◇現場の声◇

・参加学生

「水辺の楽校まつり」などの行事に参加するなかで、地域の方々の温かさや、子どもたちの元気や素直さなど、私たちはいつも素敵なご褒美をいただいています。まるで家族が集まったようなひと時を過ごせるのです。スタッフの会議にも出させていただいていますが、みなさん、この活動からさまざまな喜びや楽しさを見出しておられ、ボランティアの本来のかたちを学んでいるような気がしています。

◇研究者の紹介◇

人間健康学部　准教授
安田　忠典
（やすだ　ただのり）

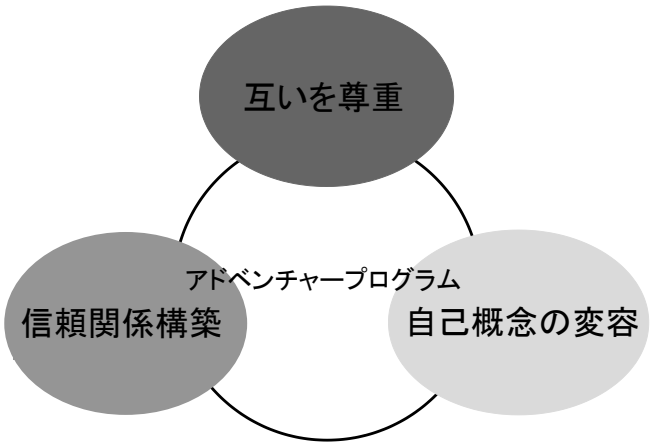
「人間健康学部では、レクリエーション、ファシリテーション等のトレーニングをしている明るくユーモアあふれる学生たちが、実際の経験の場を求めています。そんな若い力を求めている現場とコラボできます！

熊野本宮子どもエコ☆ツアー

楽しぃんやさかい大和川水辺の楽校

関西大学人間健康学部 体験学習研究室

アドベンチャーエリア

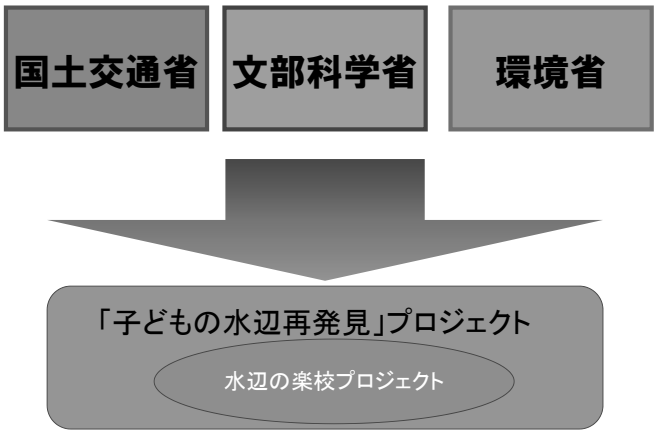


パンパープランク

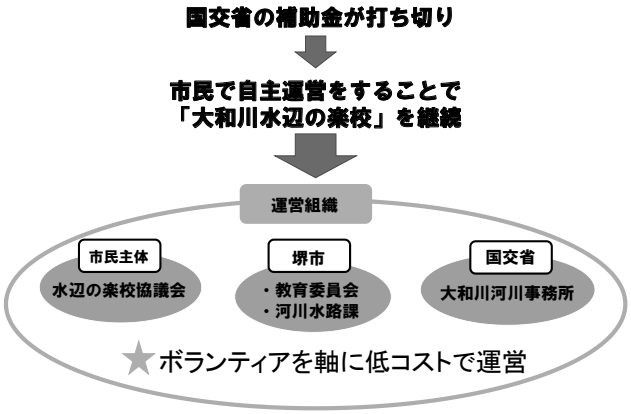
カッターチャレンジ

カッターチャレンジ

楽しいんやさかい　大和川水辺の楽校



大和川水辺の楽校協議会の様子



大和川水辺の楽校　組織図

大和川水辺の楽校祭り

大和川水辺の楽校祭り　屋台出店

大和川水辺の楽校 近隣の小学校受け入れ

やっさん ⟷ 環境総務課課長 米田氏

↓

環境総務課 堺エコロジー大学 事務局担当 辻尾氏・頓宮氏

↑ 堺エコロジー大学の運営委員に推薦

↓

堺エコロジー大学のプログラムとして「熊野本宮子どもエコツアー」を提案

堺市と田辺市のかかわり

1998年
東牟婁郡本宮町と堺市、友好都市提携

↓

2005年
田辺市と本宮町が合併、友好都市提携解消

↓

2008年頃
再び交流が活性化

↓

2012年
熊野本宮子どもエコツアー開催

第一回　熊野本宮子どもエコ☆ツアー

1期生の著書

熊野古道の縁より深く
堺市と友好都市提携
車上荒らしに注意
熊野川に筏用

2014年5月3日堺市・田辺市　友好都市提携

振り返り会

発表④

研究テーマ名	見山の郷　商品開発プロジェクト
大　学　名	追手門学院大学
担 当 教 員	経営学部　准教授　村上　喜郁
連　携　先	農事組合法人 見山の郷 交流施設組合、(株)タニチ
活動の概要	「見山の郷 商品開発プロジェクト」とは、追手門学院大学 地域文化創造機構の地域連携プログラムの中で、地域における課題に参加学生が興味を持ち、自から大学で学ぶ学問を用いながら、それらの問題解決を試みるものである。 具体的にはこれまで、2013年のプロジェクト開始以降、茨木市北部に位置する農事組合法人「見山の郷」交流施設組合と協力し、「組合員の高齢化による生産力低下問題」に対して、「追手門学院大学生による六次産業化促進としての商品開発」を主に進めてきた。 本プロジェクト特徴は、いわゆるPBL（Project-Based Learning：課題解決）型のマジメント学習であることに加え、追手門学院大学とその学生が、地域の人々・自治体・企業などをつなぐ、懸け橋となることを目標としているところにある。 参加の学生たちの多くは、同学 地域文化創造機構の提供科目である「地域学入門」の受講者、また茨木市北部に所在する大阪府中央卸売市場との提携事業の経験者であり、地域のコミュニティや「食」に対する興味を抱いて本プロジェクトに参加している。 （担当教員である経営学部 村上喜郁は、「食」を資源とする地域振興、特に「フードツーリズム（食を目的とした観光）」を専門としており、見山地域を含めた追手門学院大学の位置する茨木市において、様々な地域連携活動の指導にあたっている。）
これまでの活動実績	本プロジェクトは、2013年７月の開始以降、見山の郷 交流施設組合との連携を図りながら、学生のPBL型学習・研究（発表）、商品開発を進めている。 初年度は、基礎的な調査を中心におこない、大学主催の研究発表会や国土交通省近畿地方整備局主催の「はなやか関西 関西の食文化」シンポジウムにて学生発表をおこなった。続く、2014年度は収集・分析した情報をもとに、見山の特産品である米粉と赤しそを使用した「赤しそ塩あんぱん」を開発し（現在は当該組合の夏の季節商品となっている）、大学オープンキャンパスで発表をおこなった。 本年度は、担当教員である村上喜郁を中心に、「茨木市産学連携スタートアップ支援事業」補助金獲得し、新商品（見山産野菜を用いたジュレ）の開発をスタートしている。加えて、見山の郷の組合員の高齢化等の問題解決に向かい、当施設での収穫祭等イベントにて、学生によるステージイベントの企画・運営にも参加している。

	時　期	内　　容
年間活動計画	2013年７月	「見山の郷　商品開発プロジェクト」発足
	９月	見山の郷　現地訪問・勉強会
	11月	茨木市の地元密着型菓子店「プチプランス」にて、店長兼パティシエ誉田氏のレクチャーを受講
	12月	追手門学院大学 地域文化創造機構主催「北摂セミナー」にて学生発表を実施
	2014年３月	国土交通省 近畿地方整備局主催 はなやか関西「関西の食文化」シンポジウムにて学生発表を実施
	６月	第２期プロジェクト・メンバー募集
	７月	商品開発に向け、見山の郷での現地調査実施
	８月	追手門学院大学オープンキャンパスにて、開発商品「赤しそ塩あんぱん」を発表・配布
	10月	見山の郷「収穫祭」ステージイベント企画・運営
	2015年５月	大阪府 農の普及課の紹介で委託製造先として（株)タニチとの連携
		担当教員村上喜郁を中心に「茨木市産学連携スタートアップ支援事業」補助金獲得し、新商品（見山産野菜を用いたジュレ）の開発をスタート
	６月	第３期プロジェクト・メンバー募集
	７月	見山の郷　現地訪問・勉強会
		「赤しそ塩あんぱん」が見山の郷の７～８月の季節商品として採用され、現地にて販売される
	８月	学内での新商品に関するアンケート調査実施
		学生によるベンチマーキング調査・業界分析
		サイボウズ Live を用いた学習と意見交換実施
		追手門学院大学オープンキャンパスにて研究発表を実施
	（以下予定）	
	2015年８月	第１回 製品会議実施、提携先への商品企画プレゼン
	９月	第２回 製品会議実施、提携先との意見交換
	10月	学生によるマーケティング案作成
	11月	パイロット生産と大学祭におけるアンケート調査
		学生による販路開拓と販促案企画
	2016年	本格販売開始
		以上

大学コンソーシアム大阪
地域連携 学生フォーラムin大阪 2015

見山の郷商品開発プロジェクト

追手門学院大学（おうてもん）

自分史上、想像以上！

1

MSPの概要

・見山の郷商品開発プロジェクト

Miyamanosato Shouhinkaihatsu Projectの頭文字をとったMSPを通称として使用している。

追手門学院大学の地域連携活動として、「参加学生へのマネジメント学習機会の提供」「見山の郷の課題解決」を目的としている。

具体的には、2014年より**研究活動・商品開発**を中心に取り組んできた。

<2>

追手門学院大学

見山の郷の概要

組合名称

農事組合法人
見山の郷交流施設組合

（組合設立　平成13年11月8日）

施設名称(愛称)

“de愛・ほっこり”「見山の郷」

<3>

追手門学院大学

見山の郷の目的（1）

①都市と農村の**交流の場所**

山間部の農業振興と地域の活性化を目的とした、都市と農村との交流活動を推進するために作られた施設。

②**新鮮**な商品　野菜・加工品

直売所では、その日の朝に収穫した新鮮な野菜が販売されている。また、施設内で加工されたパンや豆腐なども販売されている。

<4>

追手門学院大学

見山の郷の目的（2）

③**安心**・**安全**・**地産地消**

農産物の栽培については、有機肥料を主体に低農薬栽培の推進に努めている。

さらに、都市近郊という好立地を活かし多様化するニーズに対応した店として農作物・農産加工品を提供している。見山の郷の野菜は生産者が見えるので、**安心**して口にすることができる、**安全**な商品の**地産地消**を実現している。

<5>

追手門学院大学

見山の郷が抱える課題（1）

高齢化

最も深刻な課題が、見山の郷地区全体の高齢化が進行しているということである。

まず、常連客の年齢層が**60歳代以上**と高齢化していること。次に、現在の組合員数は220名で、**平均年齢が60歳**と**高齢化**している。これにより生産力が低下していること。

グラフのような販売額の低下も、高齢化による生産力の低下が原因の1つと考えられる。

<6>

追手門学院大学

見山の郷　経営状況と組合員数

<7>

追手門学院大学

見山の郷が抱える課題(2)

競合の直売所の出現

ここ数年の間に、商圏内に競合の新しい直売所が設立された。それにより経営環境が厳しくなったことも、売上げ低下の原因の1つであると考えられる。

こういった競合に対して、どのような**差別化を図り**集客数を上げるのかも、今後の大きな課題である。

<8>

追手門学院大学

MSPの学習

課題解決型学習(PBL)プログラム

大学の講義で学んだことを**実践で活用し、様々な課題を解決**する。この取り組みにより、参加学生が学習に対する理解度を確認することができる。そして、**知識に対する理解をさらに深める**ことができるのである。

MSPは、2013年からPBLプログラムとして、見山の郷をフィールドに学習に取り組んできた。

<9>

追手門学院大学

MSPの活動 第1期(2013年度)

2013年7月にプロジェクト発足、当初からの商品開発は困難であったため、調査・研究を活動の中心とした。茨木市にある地域密着型洋菓子店「プチプランス」を見学しレクチャーを受けた。

- **研究成果の発表**

大学主催の**「北摂セミナー」**と**はなやか関西「関西の食文化」シンポジウム**に参加し、研究発表をおこなった。

<10>

追手門学院大学

MSPの活動 第2期(2014年度)

- 見山の郷の**六次産業化**

六次産業化の推進を図るために、見山の郷の**特産品**を使用した製品開発を開始。

学生が意見を出し合い、米粉・赤しそ・小豆を使用した**『おうてもん赤しそ塩あんぱん』**が誕生した。

【赤しそ塩あんぱん】

<11>

追手門学院大学

おうてもん赤しそ塩あんぱん(1)

- **追手門学院大学の地域連携事業**

地域連携という大学の活動をたくさんの高校生やその保護者に知ってもらうため、2014年度のオープンキャンパスにて『赤しそ塩あんぱん』の配布を実施した。2日間で合計200個を配布した。

<12>

追手門学院大学

おうてもん赤しそ塩あんぱん(2)

・赤しそ塩あんぱんの商品化

2015年7月、見山の郷**「赤しそまつり」**に出品。好評につき、現在では**季節の商品として販売**。

パンに追手門学院大学のマスコット**「おうてもん」君**の焼き印が入っていることで、パンそのものが大学の広報になる仕組みになっている。

＜13＞ 追手門学院大学

見山の郷イベント参加

2014年から、「収穫祭」での、子供向けクイズ大会を担当。見山の郷の特産品に関する食育クイズを考案し、地元野菜への興味関心の向上のために努めた。

『見山の郷 収穫祭』

このような活動を通じて地域との「架け橋」となり、「街づくり」や「製品開発」に挑戦している。

＜14＞ 追手門学院大学

MSPの活動 第3期(2015年度)

・野菜ジュレの商品開発

「おうてもん赤しそ塩あんぱん」が季節のパンとして販売されることになり、MSPの**商品企画能力が認められた。**

2015年度は、野菜ジュレの開発を企画し研究を開始。**茨木市産学連携スタートアップ支援事業**に採択され、本格的に商品開発を開始。

＜15＞ 追手門学院大学

野菜ジュレの商品化（1）

コンセプト

・若者・ファミリー層向けの商品の開発

顧客層が高齢者に偏っているため、都市部に住んでいる若者・ファミリー層に見山の郷を知ってもらう。そして、客層の拡大を見込んでいる。

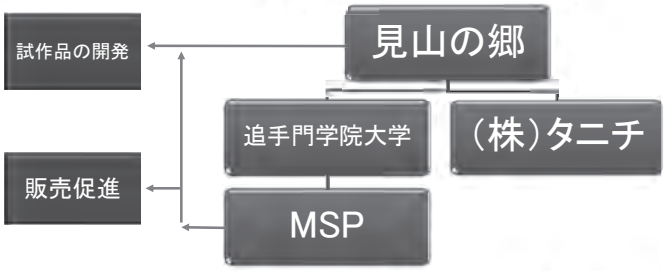
・学生コラボの六次産業化商品の開発

競合の直売所が取り組んでいないことをすることで、他の直売所との**差別化**を図る。

＜16＞ 追手門学院大学

野菜ジュレの商品化（2）

高齢化対策として、**OEM化**（委託生産）を選択。



＜17＞ 追手門学院大学

野菜ジュレの試作品

- 2015年9月22日(木)、見山の郷にて製品開発会議と試食会を実施。
- 試作品は、「ゆず味」と「赤しそ味」の2種類を準備。味や風味に関する意見交換と、パッケージのデザインについての方向性について検討した。

＜18＞ 追手門学院大学

野菜ジュレ試食アンケート

2015年度の追手門学院大学の大学祭である「将軍山祭」で、11月1日(日)、2日(月)の2日間試作品のジュレを2種類1セットで配布し、合計274人分のアンケートを収集した。

<19>

追手門学院大学

社会からの評価（新聞記事）

マスコミにも取り上げられ、社会からの注目も集めている。

①『朝日ファミリー』
2015年8月28日号
②茨木市JA広報誌
『Primmavera』
2015年10月号
③『日本経済新聞』
2015年10月8日号

<20>

追手門学院大学

MSPの今後の課題（1）

・新しい販路の開拓

①大学が主催・参加しているイベントでの販売。

②見山の郷以外の北摂地域にある他店での販売。

③インターネットを活用して、見山の郷に訪れることが困難な顧客への販売。

<21>

追手門学院大学

MSPの今後の課題（2）

・見山の郷ブランドの統一化

2015年11月現在、見山の郷の既存製品には、「ブランドの統一性」がない。

さらに、商品自体が売れたとしても「見山の郷」の知名度向上は、あまり期待できないネーミングのものが多い。

そこで、今後は「見山の郷」というブランドを確立し、知名度の向上を意識した商品の開発に努めていく必要がある。

<22>

追手門学院大学

まとめ

- MSPは、地域連携活動として見山の郷の六次産業化に寄与している。
- 学生が見山の郷が抱える課題の解決に、商品開発を通じて挑戦。
- 若者の考え方と活力を商品に取り込むことで、新しい年齢層の顧客を開発。
- MSPの活動は、参加学生にとってPBLによるマネジメント学習となっている。

<23>

追手門学院大学

プロジェクトメンバー

リーダー　：安井 佑佳

現場統括：田村 聡史

3年生：相曽 一貴 、入江 俊輔、落合 美樹、津田 奈津美

2年生：一円 遥加、伊藤 明日菜、小川 奈穂、杉坂 隼人
難波 大地、西岡 耀、濱田 真、人見 恭平、
宮脇 陽輔、森本 直人

担当教員：村上 喜郁

<24>

追手門学院大学

発表⑤

研究テーマ名	奈良県川上村の観光資源PR用ICTインフラ構築
大　学　名	大阪工業大学
担 当 教 員	情報科学部　教授　山内　雪路
連　携　先	奈良県川上村
活動の概要	大阪工大と奈良県川上村との地域連携協定に基づき、ICT応用のフィールドワークを複数ゼミ合同で展開している。同村との協議を経て、現在は次の3つの課題を進めている。 **1）桜の名所「あきつの小野公園」における桜ライブ中継サイトの構築** Webカメラで桜のインターネットライブ中継を行った。公園にはネットワーク環境がなく、近隣の国道沿い施設から長距離無線ネットワークを構築し、大学に設置したサーバー経由でライブ映像の公開を行った。その際、公園利用者のプライバシーに配慮した工夫を凝らしている。また年間を通じて桜の樹木を定点撮影し、小学校の理科教材として利用可能なデータの蓄積を継続している。 **2）廃校小学校および村内宿泊施設におけるフリーWi-Fiスポットの設置** 訪日外国人や国内ツーリストの利用を念頭に、村内の複数拠点でフリーWi-Fiスポットの設置を進めている。利用者の利便性を損なわず、かつ社会問題化しているWi-Fiスポットのセキュリティ問題に十分配慮したシステム構築を計画し、今年度中の運用開始を目指している。 **3）「御船の滝」で見られる氷瀑の遠隔観測システムの開発** 村内にある御船の滝は厳冬期に滝全体が凍る氷瀑が見られる。氷瀑はシーズン中の限られた期間のみ姿を見せ、また現地へのアクセスが容易ではないため、遠隔観測できるシステムが望まれている。現地は人里離れた山奥にあり、電源やネットワーク確保は不可能で、谷底状の地形からソーラーパネルによる発電も難しい。そこで数ヶ月間にわたって乾電池のみで動作する超省電力マルチホップ型中継ネットワークを開発し、現地の気象データやカメラ映像を伝送する計画を進めている。 これらの活動を通じてICT諸技術を地域振興に役立てると共に、学生が大学で学んだ技術をニーズに合わせて組み合わせ、実用に耐えるレベルで完成させる「システムデザイン能力」の涵養に取り組む。
これまでの活動実績	本学では従来から情報メディア学科が正課授業で川上村の観光資源PRを題材としたWebコンテンツの作成を行っており、その成果は同村公式ホームページで公開されている。 今般、新たに情報ネットワーク学科がICTインフラの構築を軸とした事業を進めることとした。その皮切りとして2014年度から村内の桜の名所「あきつの小野公園」をネットワークカメラで撮影してWeb上に公開するプロジェクト「桜ライブキャスト」を開始した。 この取り組みでは、学生が卒業研究の一環としてシステム開発を担当し、機材は大学が提供、機材の設置工事を川上村が担当するという分担で実施した。 カメラ設置工事は諸般の事情でシーズン直前となったが、4月1日より運用が開始できた。川上村および大学のホームページ告知以外にほぼ宣伝を行う時間がなかったが、GW明けにサイトを閉じるまでにユニークユーザー数で1500名を超えるアクセスを記録した。

	時　期	内　　容
年間活動計画	2014.3	教員が現地に赴き、ニーズ把握
	2014.4	「あきつの小野公園」における桜中継のニーズが具体的にまとまり、学生チームのメンバーが揃う。また他の２案件についても概略のニーズを把握。
	2014.9	学生６名、教員２名により現地合宿を行い、桜中継システムの予備調査・ネットワーク接続実験を実施。
	2014.10～12	据付機器調達、およびサーバー側ソフトウェアの開発と遠隔制御システムの開発を実施。
	2015.3	学生６名と教員２名が現地にて設置調整作業を実施。多数の技術的トラブルを経験したが３月下旬よりネット公開を開始できた。川上村HPおよび大学HPで告知。2015年度の計画３テーマに対する学生担当を決定。
	2015.5	５月20日でいったん桜ライブ中継を終了。ユニーク視聴者数1500を記録。テーマごとにシステム検討、要素技術開発、プログラミング開始。秋頃再開予定とし、ナビゲーションやカメラコントロールの工夫、アーカイブデータの提示方法などを検討。
	2015.6	進捗状況確認勉強会を学内で実施。
	2015.7	教員と川上村担当者が打ち合わせ、2015年度実施内容の詳細を決める。
	2015.9	学生15名程度と教員３名による合宿を予定、Wi-Fiスポット設置予定施設の詳細調査を実施し、必要となる機材の選択を行う。また、あきつの小野公園への気象観測装置の設置調査、御船の滝への沿道にて試作中の中継装置を持参し、電波伝搬状況の調査を行う。
	2015.10～12	Wi-Fiスポットの現地設置を予定。学生開発機器の設置を行うとともに、トラブル発生時にすべて遠隔操作でシステム切り離しができるシステム設計を行う。
	2015.12～	御船の滝設置予定の省電力データ中継装置をひとまず完成させ、安定性・耐候性・機能性・電池持続特性等の試験を学内グランドで３ヶ月間程度実施し、システムデザインにフィードバックする。
	2016.2	あきつの小野公園の桜ライブ中継を開始予定。
	2016.秋	御船の滝観測装置・データ中継装置を現地に設置し、運用を始める。

参加学生

関戸　孝平、秋山　祐樹、上野　洋太郎

活動の成果

大阪工業大学と奈良県川上村は平成22年度に連携・協力に関する協定書を交わし、環境教育を柱とする多様な取り組みを展開している。本学情報科学部では平成24年から同村のPR用Webコンテンツの制作を授業の一環として開始し、26年より同村「あきつの小野公園」のサクラ開花状況をネット上で公開するライブカメラ設置プロジェクトを開始した。

このライブカメラ設置プロジェクトでは遠隔操作可能なネットワークカメラを設置し、ネット環境が整っていない公園内から長距離Wi-Fiネットワーク装置を用いてネット接続し、大学内で情報を加工して一般にWeb公開するものである。Web閲覧者にカメラ操作を許可する一方、公園利用者のプライバシー保護に十分配慮した形で公開するためにカメラ制御機構に工夫を凝らしている。平成27年度のサクラ開花シーズンにおいては十分な広報ができなかったにもかかわらず、1500ユニークユーザーに閲覧いただくことができた。次のシーズンには5000ユーザーの閲覧を目指す。

平成27年度はこれらの活動を拡大し、年間を通じて公園の様子を定点撮影してタイムラプス動画にするほか、現地の気象情報などをWeb公開できるシステムに更新中である。またあわせて同村の観光資源PRを目的としたICTインフラ整備を新たに3カ所で進めている。うち2カ所は村内におけるWi-Fiスポット設営で、平成27年9月に現地調査を実施し、年度内に運用開始ができる見込みとなっている。これは訪日外国人をはじめとする観光客むけに各自治体が競って整備しているものと同等以上の機能を備え、セキュリティと利便性に十分配慮した構成としている。

また村内の山奥に位置し、厳冬期に氷結して氷瀑となる「御船の滝」を観光資源として活かすため、滝周辺の気象情報や定点観測写真をネット配信できるようにするシステムの構築に取り組んでいる。本件は電源も携帯電話アクセスもなく、自然環境も過酷な地点から無線ネットワークの多段中継で情報配信をしようと試みるもので、平成28年度に運用開始を目指して現地の電波伝搬状況調査を開始したところである。

今後、観光資源のPRのためのICTインフラ設営の観点から村と協議を重ねながら更にプロジェクトを推進する予定である。

研究事業に対する地域からの評価

大阪工業大学殿とは工学部建築学科の皆様が川上村木匠塾に参加されて以来、毎年新入生オリエンテーションで村内施設をご利用いただいたり、また連携協定締結後は旧川上東小学校のリノベーションプロジェクトや理科教室の開催、公園活性化など、多様な活動でご支援をいただいています。

今回のあきつの小野公園でのサクラ中継をはじめとして、情報科学部の皆様には村の自然や環境を全国に情報発信できる仕組みを計画、運用していただいています。あきつの小野公園のサクラも一躍有名になった感があり、今後の展開が楽しみになっています。地域のPRと学生さんの環境教育を両立させるこの取り組みがますます発展するよう願っています。

（奈良県川上村　地域振興課長　森内　太）

発表⑥

研究テーマ名	地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を間伐材と地場木材を活用した木の塀「スーパーフェンス」で代替するプロジェクト
大　学　名	関西大学
担 当 教 員	社会安全学部　教授　亀井　克之
連　携　先	高槻市　港製器工業株式会社
活動の概要	①　高度経済成長期に造られたブロック塀は老朽化しており，地震の際に倒壊する危険性がある。 ②　日本の森林では間伐材が有効に活用されていない。 ①防災と②地球環境問題の両方に有効な木の塀「スーパーフェンス」を高槻市の港製器工業株式会社が開発・普及に努めている。 防災や環境によい商品のマーケティングという観点から関西大学・社会安全学部の亀井克之ゼミナールでは，このプロジェクトに参画している。
これまでの活動実績	• 2013年，2014年，2015年 港製器工業株式会社の本社におけるにおけるミーティング （マーケティング戦略策定） • 2013年７月，11月，2014年５月 イベントにおける出展協力 • 2014年 各種マラソン大会にプロジェクト関連のＴシャツを着用して出走しPR • 2013年10月 ゼミ発表大会における報告 • 2012年～2015年 施工現場ミーティング

	時　期	内　　容
年間活動計画	2015年７月	港製器工業株式会社株式会社の本社工場でのミーティング
	2015年10月	研究報告会での報告
	2015年 11月～12月	施工現場ミーティング
	2015年12月	マーケティング策定
	2016年	高槻シティハーフマラソンでのPR

参加学生

安藤智之　松浦航　川場賢太郎　林青青　蔵雪

安全・安心　環境・アセットマネジメント

間伐材や地場の木材を使用した木の塀によるブロック塀代替プロジェクト

地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を間伐材や地場の木材を活用した木の塀で代替するための商品開発・普及についての産学連携。

実際に設置された木の塀（大阪市天王寺区）　「スーパーフェンス」Tシャツを着用した学生と港製器工業　岡室昇志社長

活動の概要

目　的	地震の際に倒壊する危険性のある老朽化して危険なブロック塀を間伐材・地場木材を活用した環境に優しい木の塀で代替し、防災・減災・環境に寄与すること。 着実に受注を受け、全国森林組合連合会から「間伐材マーク（※）」を取得し、東北各地で設置した「スーパーフェンス」を使った倉庫に対して自治体等から表彰状を受けるようになった現在、防災・環境問題に役立つ商品・技術として、さらなる認知度向上を図ること。
連携メンバーおよび役割	港製器工業株式会社･･･木の塀「スーパーフェンス」および関連製品の技術開発、普及、施工、展示・広報 全国森林組合連合会･･･「間伐材マーク（※）」の認証 関西大学社会安全学部　亀井克之ゼミ･･･木の塀「スーパーフェンス」を、広告・マーケティング面から支援、イベントでの展示・広報の支援
活動地域	大阪府高槻市／大阪府吹田市／関西大学高槻ミュースキャンパス／千里山キャンパス 岩手県上閉伊郡大槌町など全国のスーパーフェンス採用地
活動期間	2012年6月～（継続中）
費　用	各種補助金

※間伐材マーク･･･間伐や間伐材利用の重要性をPRし、間伐材を用いた製品を表示する間伐材マークの適切な使用を通じて、間伐推進の普及啓発 および間伐材の利用促進と消費者の製品選択に資するもの

連携の経緯

2011年6月、関西大学社会安全学部生が、関西の学校で余った机や椅子を綺麗に整備し、東日本大震災で被災した学校や仮設住宅に贈る「勉強机プロジェクト」に取り組んだ。その際、作業場を提供して下さったのが高槻市の港製器工業株式会社であった。これを契機に、地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を木の塀「スーパーフェンス」で代替する港製器工業株ロジェ式会社のプクトについて、主としてマーケティング面で協力することとなった。

日仏シンポジウム「中小企業経営者の健康」会場での展示
フランス中小企業学会理事長のオリビエ・トレス教授

解決すべき課題

（1）木製のため経年で反りやすいことなど、技術的課題の解決
（2）「間伐材マーク」取得にふさわしい認知度向上
（3）間伐材や地場木材の調達・流通
（4）コストの軽減
（5）学会や研究会の研究発表で取り上げた際に特定商品の宣伝と扱われることの払拭
（6）ブランドの案出
（7）学生による取り組みの洗練

2015年7月7日　港製器工業株式会社本社におけるミーティング　「関大防災Day2013」の様子

大学の役割

どんなに防災・減災や地球環境問題に役立つ製品であっても、①開発者が中小企業である、②大量生産できない、③価格が高めとなる、④認知度を向上するのが容易ではないというような現実的な課題がある。

そこで亀井克之ゼミでは、以下の活動を行っている。

(I)関西大学社会連携部が行うイベントでの展示・広報、(II)関西大学社会安全学部が行うイベントでの展示・広報、(III)木の塀についてのブランド策定、(IV)広告・マーケティングに活用するイラスト・デザイン作成や写真の撮影、(V)ポスティング、(VI)口コミ、(VII)採用地現場訪問、(VIII)展示会における出展の協力、(IX)研究報告会・学会・セミナーにおける報告の支援、(X)「間伐材マーク」を取得した商品にふさわしいマーケティング面での支援。

現場の声

・柴田文哉（社会安全学部・亀井ゼミ4年生）

（高槻シティハーフマラソンを完走して）
「スーパーフェンス」ランニング・チームのTシャツを着てアピールしながら走りました。

・竹馬流美（社会安全学部・亀井ゼミ3年生）

港製器工業の工場で金属の強度試験機による実演を見たとき、安全・安心に関して本当にしっかり取り組む企業なんだなと思いました。このプロジェクトでは実際に社長さんと交流しながら行える点がすごいです。

成果

（1）岩手県大槌町の復興作業員の宿泊施設「ホワイトベース大槌」（2014年4月完成）等、東日本大震災の被災地や、各地で受注・施工例が着実に増加。
（2）2014年10月に全国森林組合連合会から間伐材マークを取得
（3）東北に設置した「スーパーフェンス」を活用した倉庫に対して2015年1月に自治体等から表彰状
（4）2014年11月14日京都市国際交流会館での日仏シンポジウム「中小企業経営者の健康」など学会における展示
（5）マスコミ掲載（『朝日新聞』2014年5月24日朝刊に亀井教授のコメントと共に掲載）
（6）学生によるマーケティング面での協力・工場視察・現場訪問の継続
（7）「スーパーフェンス」ランニング・チームを結成し、作成したTシャツを着用して出走するマラソン大会（2014年大阪マラソン、2015年高槻ハーフマラソン等）などのスポーツイベントを通じてのPR
（8）港製器本社工場を見学した2014年度社会安全学部招へい研究者レオ・ポール・ダナ教授（ニュージーランド）や2014年11月日仏シンポジウムの際に展示を見学したトレス教授（フランス）による国際的PR
（9）2015年10月18日大学コンソーシアム大阪主催「地域連携学生フォーラム2015」で亀井ゼミ生による発表
（10）2015年11月13日「関大防災Day」における千里山キャンパス総合図書館前での展示

今後の展望

（1）各地の森林組合との連携による間伐材と地場木材活用の推進
（2）東日本大震災の被災地における採用の推進
（3）「間伐材マーク」取得商品にふさわしいブランド案出、ロゴ開発、コピー開発、パンフレット・ＤＶＤ改訂
（4）日本リスクマネジメント学会などの学会・研究会、関西大学イベント、地域社会のイベント、防災・減災イベント、展示会での展示。マラソン大会などスポーツイベントにおけるTシャツを用いたＰＲ
（5）防災・減災、地球環境問題貢献型商品のマーケティングの研究

研究者の紹介

社会安全学部　教授
亀井　克之
（かめい　かつゆき）

専門は経営学。リスクマネジメント論。
企業のリスクマネジメントのほか、さまざまな事象にリスクマネジメントのフレームワークを適用して研究している。2014年より日本リスクマネジメント学会理事長。

背景1
増加し続ける危険なブロック塀

- にわか職人が施工したブロック塀が多数存在する
- 耐久年数を超えたブロック塀の存在
- 年々経年劣化が進むブロック塀
- 地震の度に倒れ、死傷者がでる現状
- 何かがあるまで放置する人間の習性

(*ブロック塀自体が悪いのではありません)

背景2
痩せ細る日本の森林

輸入木材に圧倒される国産木材

間伐材が有効に使われていない現実

"危険なブロック塀""間伐材利用で環境貢献"がなぜ響かないのか

「住まう人」の発想

①「ブロック塀」は一見コンクリートであり「倒れて怖いもの」という認識が伝わっていない（鉄筋とか基礎とかという発想がない）

②そもそも「傾く」→「壊れる」→「倒れる」状況を自分の目で目の当たりにしていない

③「環境」「ECO」は「お金のメリット」がないとよっぽど意識の高い人でないと動かない（太陽光等の普及は「金銭的メリット」があればこそのこと）

「売れる」には「住まう人」の声と「住まう人」へのインフォームが必要

"危険なブロック塀"の実際の現場ってご存知ですか？？？

残念ですがこれが現場・住まう人の声なんです。

「土間コンクリートが打設されており基礎からのリフ[illegible]度があり、木や石積等があるため
ォームには重機を使用せずに撤去が必要　[illegible]後庭の復旧が必要

例えば一般的な境界部14m 9段のブロック[illegible]去には
（裏に幅1mの土間が打設されている場合）

ブロック撤去（2人で3日）→ 184,000円　ブロック処分[illegible]→89,000円）

土間コンクリート撤去（2人で2日）70,000円　土間コンクリート処分[illegible]48,000円

土間コンクリート復旧　7,300円×14㎡＝102,000円

ブロック塀解体・既存物復旧→スーパーフェンス又は安全なブロック塀施工以外に
→スーパーフェンス等のリフォームを[illegible]せると
100万円規模の工事

約53万円の費用が別に発生する

でも、三年間の努力で少しずつ施工実績が・・

これまでの施工事例　震災復興住宅での事例

では亀井ゼミに何ができるのか

- 関西大学　高槻ミューズキャンパス
- 社会安全学部　亀井ゼミによる参画・協力

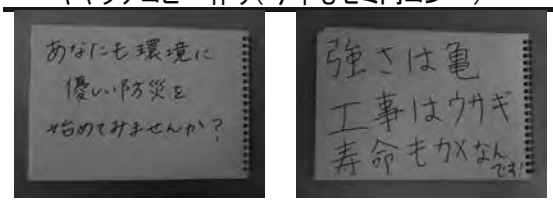
↓

- 高槻市　港製器工業株式会社　による
- 「地震で倒壊する危険性のある老朽化した
- ブロック塀を間伐材と地場木材を活用した木の塀「スーパーフェンス」で代替するプロジェクト

連携　千里山キャンパス　防災イベント

千里山キャンパス「防災DAY」出展（今年は11月13日）

キャッチコピー作り（今年もゼミ内コンペ）



教授のスーパーフェンス関連の講義・講演の支援

PR写真撮影 「安全な街づくり」の思い 天まで届け

PR写真撮影 ホームを守る！

防災の社会貢献のためなら手段を選ばぬ連携協力

高槻発→全国へ

防災＋環境問題

- 地元の森林で生産された間伐材を利用し、
- 高槻の大学（関西大学社会安全学部亀井研究室）で、安全と環境を科学し、
- 高槻の中小企業（港製器工業）が、実践し
  ビジネスモデルを構築し全国へ発信する

①地震から地域住民を守る事が、
②林業の活性化を生み、同時に、森林資源を保全し、
③日本を元気にすることができないか。

発表⑦

研究テーマ名	地域と子ども・大学生の繋がりを生身で感じる道草寺子屋
大　学　名	近畿大学
担 当 教 員	大学院総合理工学研究科　教授　久　隆浩
連　携　先	
活動の概要	（きっかけ） 「道草寺子屋」は代表自らが開設したものである。わたしは学部生の頃から地元である大阪市都島区で様々な地域活動に参加してきた。その理由として、大学で専攻していたまちづくりを実践的に勉強したいということであった。 初期はこれらの活動を通じて地元でやりたいことが見つかればな、と思いながら活動に参画していた。大学院に進学してもその思いは変わらなかったが、同時に、住民との交流を通じて地域の課題やニーズが明らかとなってきた。 そして自分自身が生まれ育った都島区に対して何か地域貢献をしたいと考えるようになった。こうして生まれたのが「道草寺子屋」である。 （事業内容） 道草寺子屋の事業は大きく分けて３にあります。１つ目は小学生対象の子どもの放課後事業、２つ目は中学生対象の学習支援事業、３つ目は地域活動支援です。小学生対象の放課後事業の先生は学生ボランティアスタッフが担っています。 また、都島校や放出校の道草寺子屋は商店街の空き店舗の活用により事業を展開している。 （立地） 2013年10月設立、開業。 現在は大阪市都島区・鶴見区を拠点に計３校で運営しています。３校とも市内でも比較的居住区であるため子どもの数や子育て層は全体的に高い割合を占めている。 （運営方法） 当初は実践を第一に活動をしていた。活動して始めの１年間は実質ボランティア活動であった。しかし、継続的な事業やこれを生業にしていこうという中で事業費や給与が必要と感じはじめ、現在は月謝制を取っている。

これまでの 活動実績	• 寺子屋に通わせている親へのヒアリング結果 1．多世代の交流の機会が人見知りを解消する 2．顔見知りができ子どもを叱ることができる 3．場の空気が子どもに安らぎを提供する 4．子どもや親のストレスの解消の場になる • 学内の論文発表会による校友会長賞受賞 博士課程前期の修士論文での発表会により上記の賞を受賞する。 • 産経新聞の取材掲載 2013年に５大新の１つである産経新聞に取材を受け夕方の社会欄に掲載される。またその他にも京橋経済新聞や週刊日々新聞に取材を受けネットで掲載。 • 様々な地域活動に参加 夏祭り・盆踊りなど自治会の地域活動に参加。ブースでは寺子屋独自のワークショップ開催。

	時　期	内　　容
年間活動計画	2013年８月	地元商店街にて商店街での調査
	９月	商店街のダンススクールの事務所の倉庫を間借り
	10月	大阪市都島区に道草寺子屋開設・HP 開設（フリー） 道草寺子屋として初の地域のイベント（ハロウィン）に参加
	11月	道草寺子屋初の主催イベント
	2014年２月	修士課程前期修了「寺子屋事業を活用した地域による子育て支援方策に関する研究」概要提出の後、論文発表
	３月	阪神南地域夢会議・さわやかフォーラム「つながろう地域のパワー！」 事例発表
	４月	情報交流会 わくわくが社会を変えるキラリ！NPO フォーラム事例発表 中学生対象の新事業、学習塾を開始 月謝制を取り入れる
	９月	学生ボランティアの募集
	10月	学生ボランティアの活動開始 道草寺子屋を新たに１校開設
	１月	公式 HP の開設：http://mitikusaterakoya.com/
	2015年４月	大阪市鶴見区放出駅に３校目を開設 キックオフイベントにて地元の子どもへの周知を目指す 自治会のお祭りにて「割り箸てっぽうづくり」出店
	５月	ふれあい祭りにて「エコバッグづくり」出店
	６月	鶴見緑地公園で開催されたアウトドアイベントにて「オリジナルパスポートづくり」出店
	７月	盆踊りにて「オリジナルマイチェキ」出店
	８月	学童保育の子どもに向けワークショップの依頼を受け開催

寺子屋事業を活用した地域による子育て支援方策に関する研究

社会環境システム研究室　12-3-335-0526　矢裂　淳

第１章　はじめに

１−１研究の背景と目的

今の日本の子どもに必要なものは何だろうか。平成 23 年に改訂された学習指導要領では「生きる力」が謳われている。文部科学省が言う「生きる力」は、「変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい［確かな学力］、［豊かな人間性］、「健康と体力」の３つの要素からなる力」とされている。「学力」は教科で学ぶことが多いが、「豊かな人間性」には教科以外の経験等が重要になる。

小さい頃の記憶に残っている想い出といえば、駄菓子屋での買い食い・秘密基地を作った事・道草をしたこと・そういった自分だけの時間、特別な出会いや体験というのが鮮明に残る記憶・今になって共有したい記憶である。こうした記憶に残る経験が、子どもの「豊かな人間性」や「社会性」を育む。しかし現代の子育て事情ではこうした経験をできる状況ではない。共働きの母親の増加や地域の見守る目の減少により子供の遊び方や普段の過ごし方に大きな変化が見られる。

そこで、本研究では、地域が子どもを育むという視点に立ち、子どもや親が置かれた地域の状況を分析するとともに、子育て環境としてどのようなしかけが準備できるかについて実践的に研究を行う。

１−２研究の構成と方法

研究の前半では、地域が子どもを育てるという観点から、子どもと地域の関係を文献調査により考察を行う。つづいて、研究の後半では、共働き等により子供の面倒をみることができない母親の支援という形で都島区・桜通商店街で開くこととなった「道草寺子屋」を事例として、地域における子育て環境の整備とその効果について分析を行う。

「道草寺子屋」は筆者自らが運営するものである。筆者は、学部生の頃から地元である大阪市都島区で様々な地域活動に参加してきた。その理由として、まちづくりを実践的に勉強したいということであった。初期はこれらの活動を通じて地元でやりたいことが見つかればな、と思いながら活動に参画していた。大学院に進学してもその思いは変わらなかったが、同時に、住民との交流を通じて地域の課題やニーズが明らかとなってきた。そして自分自身が生まれ育った都島区に対して何か地域貢献をしたいと考えるようになった。こうして生まれたのが「道草寺子屋」である。

第２章　地域が子どもを育てる

２−１「親はなくとも子は育つ」から「親が子を育てる」時代へ

松田道雄氏は『駄菓子屋楽校』で子ども教育の役割について以下のように述べている。

「「文久店」の繁盛ぶりは、駄菓子屋文化が子どもたちに広がっていたことを示していますが、それは裏を返せば、小銭を与えて子どもを外に追い出す親の無責任さを表しているという見方もできる。しかし、さらにその裏を返せば、それゆえ家庭の教育力を代行していた駄菓子屋にはアノニマスな（無名性の）教育力があったと言えます。（中略）では、現代の「教育家族」は、小銭で子どもを外に追い出したかつての「非教育家族」より、本当に「教育的」なのでしょうか？高い月謝を払って塾や習い事に行かせるのも「外」に追い出すことに変わりありません。」

駄菓子屋等の昭和時代の店舗と子ども社会との関係が、子どもの教育力を自然に担っていたのが、今やその関係が薄れ、「親はなくとも子は育つ」という時代ではなくなり、「親が子どもの家庭の教育をしないといけない」という親にとっての子育ての負担が増えている。

２−２「斜めの関係」が築く地域の教育力

久徳重和氏は、「斜めの関係」について次のように述べている。「集団生活環境の子育て機能を創り上げているものは「斜めの関係」である。家族（親子・兄弟）関係を縦の人間関係、同年代を横の人間関係とすれば、それ以外の異世代との関係が「斜めの関係」ということになる。この斜めの関係が保たれるために必要なものは、ご近所さん意識である。近所の大人同士が知り合いであれば（幼なじみであればさらによい）、お互いの子どもに対して身内意識を持って接してやることができるし、口をきいたことはなくても見知っていれ

ば、必要に応じ世話を焼いてやる事もできる。」地域の教育力を担っていた「斜めの関係」の主軸は、親でも学校の友達でもない、長くそこの町に住んでいる地域のおじちゃん・おばちゃん又はお兄さん・お姉さんである。

２−３学校教育について

こうした地域の教育に対して学校教育の役割とはどのようなものだろうか。近代の学校システムは、明治５年（1872 年）の学制発布に始まる。明治政府が欧米の強さの秘密を「教育」にあると考え、欧米に負けずに肩を並べるために、欧米製の「学校」一式を「工場」と同じようにそっくりそのまま日本各地に直輸入した。そもそも近代の「学校」は子どもを考えてつくられたのではなく、国家のためにつくられた。さらに社会学者の森重雄氏は「学校」とともに「教育」という言葉も、当時の日本人の言葉になかったと証明している。これより開始された「学校化」は子どもを隔離状態に追いやり、それは形が違えども現代でも続いている。

２−４淘汰された子どもの時間・居場所

子どもの道草を研究している水月昭道氏は、最近の子どもたちが下校時に道草をしなくなったことについて、次のように説明している。「近年の「安全・安心のまちづくり」の施策の広まりによって、子どもの安全を守るために親たちが通学路を熱心に監視するようになったため、子どもたちは下校時に道草をすることができなくなりその結果、子どもたちは放課後に学校外で友人関係を広げる機会を失い、自宅の部屋でゲームをするしかなくなってしまったのである。言い換えれば、子どもの時代から「道草」という「放浪の時間」も、そのための「放浪の空間」も、すでに失われてしまっているのである。」

そのことは同時に、「放浪の時間と空間」を過ごすための共同体（友人関係）と、それを可能にする共同体（友人をつくる能力を含めて）が失われていることを暗示している。

３章　寺子屋の実現過程

３−１商店街への思い

寺子屋を開設することとなった桜通商店街

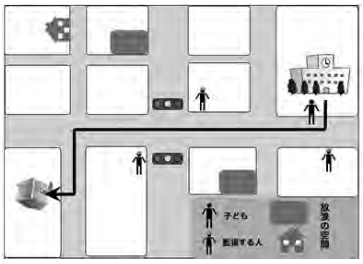


図１. 監視された子どもの登下校

は都島駅から徒歩５分もかからない場所に位置している。それにも関わらず桜通商店街は薄暗く活気がみられない、いわゆるシャッター商店街である。都島区役所の市民協働課の話によれば「ここの商店街の近くには元々都島区役所があり、そこには必然と人通りがあったが、区役所が移転しそこからここの商店街は徐々に寂れていった。」と言う。

図２. 桜通商店街・寺子屋の位置

筆者自身、桜通商店街は実家から一番近い商店街にも関わらず、知っている商店街の中で一番疎遠な商店街であった。その理由は買い物もしたことがなく、商店街と関わる機会が無かったからである。そのような商店街を活性化したいと思った要因は、まちづくりの実践への思いである。「まちの活性化」と口では言うものの、地元の商店街の現状に目を向けていない自分に何かできることはないだろうかという思い、そして、空店舗が多いということは裏を返すと若者が入るチャンスではないかという希望の思いがあった。

３−２思いを相談する

まず、桜通商店街のビフテキ屋「ファイヤープレート」に食事に出かけた。食事の際に「自分は生まれも育ちも都島で、ここの商店街の現状をみて何かできる事があるのならやってみたい」と相談したところ、「商店街のお魚屋さんで長い事お店をしている方を紹介してあげる」ということになった。

後日、魚屋「サーブコウダ」に伺い自分の想いを伝えた所、「私が何かしてあげる事はできないが、どこかに店を構えるのであれば、最近キッズダンススクールを始めた人がいるから話をしてみるといいよ」と紹介して下さった。

３−３母親のニーズ

そして、キッズダンススクール兼リサイクルショップの「なないろパレット」にこの話を持ちかけた所、「うちの事務所は子どものダンススクールをやっているからお母さんがよく来る。私たちも含めて最近は共働きの親が多くて子どもの面倒をみる時間がないので、そういった子どもの面倒をみてくれる場所を作ってくれるなら、うちの事務所の隣にある倉庫をただで貸してあげる」ということになった。こうした母親のニーズを受けて、寺子屋事業を活用した子育て支援を行おうと決意した。

３−４道草寺子屋の開設へ

８月から体験期間として寺子屋を開く事になると同時に、商店街のお祭りの手伝いをすることとなった。そのお祭りでキッズダンススクールの子どもと触れ合うことができ、寺子屋の宣伝にもなったという事もあり体験期間の１ヶ月の間徐々に子どもが寺子屋に来るようになり始めた。

体験期間はダンススクールの子どもを生徒に寺子屋をしていたが、９月から一般の子どもも対象とした。９月からはFacebookや地域活動で繋がりのある母親に声をかけ、１０月・１１月頃には徐々に寺子屋に来る子どもが増え始めた。さらにホームページやチラシの作成と告知の基盤を完成させた

表１. 寺子屋の開始から現在までの状況

月日	場所	子どもの対象	登録人数	繋がり
8月	貸し倉庫	限定	2名	ダンススクールの子ども
9月・10月		一般	3名	地域活動で知り合った親の子ども
			5名	
11月	空き店舗		8名	
12月			10名	子どもの友達

４章　寺子屋の実践

４章からは、寺子屋に来ている母親へのインタビューや子どもたちの観察調査によって、寺子屋の役割や効果について分析を行う。

４−１子どもの遊びについての親の声

現代の子どもの遊びといえばゲームである。見た目には子どもがゲームをしている姿は楽しそうだ。一方、いわゆる昔遊びといった遊びは現代の子どもにとっては魅力的ではなくなったのだろうか。

表２. ゲームについての親の声

Q.現代の子どもの遊び方と昔の遊び方はかなり違っていると思いますがそれについてどう思いますか？

「O：今の子どもはテレビゲーム。自分自身が子どもだった時の遊びはケンケンパーをやったりと外で遊べたりできた。今はなかなかできない。」

「K：ゴム跳びの全盛期だった。今考えればただのゴム１つであそこまで遊べたなというくらい。」

「Y：ゲーム…できるなら、早いウチから渡したくはないけれど、あれば、やっぱりさせてしまう。カードゲームやDSなどは楽しいけど、それに頼りすぎて、他の遊びを教えなくなったなぁ…家に居ると、その方が楽だし。でも、子どもは将棋やオセロ、トランプ、ボードゲーム、折り紙などを一緒にして欲しいと思っているんです。ただ、家事や仕事に追われて時間を取ってあげられない。

Q.今のこどもの遊びはお母さんからみて悪影響か好影響かというと？

「O：ゲームは悪影響だと思う。人とのコミュニケーションがとれない子どもが多いのもゲームが影響していると思う。」

インタビューをまとめると、母親の心理としては「自分たちが昔ゴム跳びや折り紙をしていたように子どもたちにも自由に遊ばせたいが、今は忙しくて子どもの面倒を見ることができないし、外で遊ぶと何の事件に巻き込まれるかわからない世の中だから外にだせない。だから家でできるゲームに頼るしかない。」といえる。社会的な問題が、子どもたちの遊び環境に影響を与えているといえる。

４−３寺子屋での遊び・過ごし方

では実際、普段の寺子屋で子どもたちがどのように過ごしているのかをみてみよう。学校の宿題・小テスト・トランプ・テーブルゲーム・バランスゲーム・推理ゲーム・おしゃべり・絵描き・折り紙など、子どもたちは様々

写真１. 寺子屋の遊び風景

なことをして過ごしている。そのほとんどが昭和時代に愛されていた遊びで、今もなお子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿が確認できた。また、違う学校の子どもたちで遊ぶ交流もある。さらに、下は幼稚園の年長児、上は中学２年生まで幅広い学年の子どもが寺子屋に来ているので､他学年の子どもと遊ぶ事も多い。

４−４元来の遊びの意味

元々「遊び」には相手が必要で、対人で「共遊」していた。ゲームが出現した始めの頃もゲーム機を人が囲んでいた。それがオンラインのテレビゲームが普及するにつれ時代とともにそのようなコミュニティが薄れていった。

表３は遊ぶ風景の変化とその年代に合わせた１９８０〜２０１０年代の子どもからみた社会関連年表である。ここ３０年の間に子どもの遊び方の変化が急速に変化している事がわかる。

表３.1980〜2010 年代の子どもの社会関連表

西暦		子どもに関わる出来事	西暦		子どもに関わる出来事
80		任天堂ゲーム&ウォッチ	2001		
81		レンタルビデオ普及始まる	2002		
82			2003		
83	対	東京ディズニーランド開園	2004		ニンテンドウDS
	人	任天堂ファミコン	2005		
84	共		2006		
85	遊		2007		
86			2008	対	iPhone
87			2009	電	
88		映画「となりのトトロ」	2010	孤	ニンテンドウ3DS
89		任天堂ゲームボーイ	2011	遊	LINE(アプリケーション)
90	対				
91	電				
92	共				
93	遊	ポケベル若者に流行			
94		ソニープレイステーション			
95					
96		プリクラ流行、たまごっち			
97		ポケモン大流行			
98					
99					
2000		ソニープレイステーション2			

４−５時代による遊び方の変容

対人関係によって遊び方を分類すると以下の３つの遊び方に分けることができる。

○対人共遊

人間同士で機械を使わず遊ぶ型。場所は主に外で、遊び方は「鬼ごっこ」「かくれんぼ」「だるまさんが転んだ」のように遊び道具を使わないで行う遊びや「ゴム跳び」「ドッヂボール」など物を使って行う遊びなどがある。どれも対人で遊んでいてお金の使う必要のない遊びが多い事が特徴である。４−３で道草寺子屋での遊び方を紹介したがそのほとんどが対人共遊であることがわかる。

○対電共遊

主に平成初期に育った子どもの遊び方でファミコン・スーパーファミコンで遊ぶ。風景としてはゲーム機を知り合いの子どもが囲んで遊ぶ事が多い。ゲームボーイでも遊ぶ世代ではあるが、その際は近くの公園やマンションの下に集まり、ゲームボーイを各々持ち寄り遊ぶ。ゲームボーイのゲーム性は案外シンプルであり飽きがすぐ来るというのが特徴である。

○対電孤遊

2010 年前後の子どもの世代であり、オンラインゲームなどの高度なゲーム機を用いる。3DS や親のスマートフォンを借りて１人(又はオンライン)でゲームをする事が多い。集合住宅の多い都島区ではマンションの下で友達とゲームをする機会も多くみられる。

子どもの多くは親が共働きのため留守をする時間をゲームで潰す。対電共遊の世代に比べると 3D 化しているように格段にリアルかつやりこみ度を追い求めている。さらに年々に子どものゲームをする事によって得られる刺激も強くなっている。

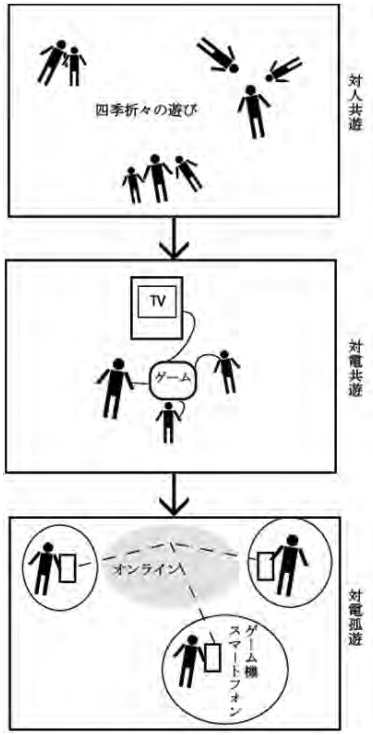


図３.子どもの遊び風景の変化

５章　寺子屋の効果

５−１子どもや親の子育てへの直接効果

インタビューの内容から、子どもの教育に対する寺子屋の効果として、以下の効果があることがわかった。

・多世代の交流の機会が人見知りを解消する

人見知りの子を持つ母親は、小学生が大学生や大人と関わるいい機会になっていると述べている。普段大人や男性としゃべる事が苦手な子どもが、寺子屋ではお兄さんと楽しく遊びをしている事に良い変化と寺子屋の効果を感じている。

・顔見知りができ子どもを叱ることができる

寺子屋に来る母親同士は初見が５割くらいである。その方たちが毎週のように子どもの送り迎えなどで会う事により、新たなご近所付き合いが生まれている。そこでのおしゃべりが子育てなどの情報交換の場ともなっている。子どもにとっては、知らないお母さん（おばちゃん）が増えることになり「斜めの関係」が築かれる。母親にとっては、ご近所の奥さんの子どもと認知する事によって、地域の子どもを叱ることができるようになる。近所に叱ってくれる大人がいることで子どもの社会性が伸びるのである。

表４．多世代の関わりについての親の声

Q.道草寺子屋についてこのような場所があることについてどう思われますか？
「K：良いと思う。まず小学生が大学生のお兄さんと関わる機会がないから子どもからもおもしろいし、親と違う大人と接する良い機会だと思う。子どもはずっとおもしろいと言ってみます。」
「O：うちの子どもは人見知りで、友達になるまでに時間がかかる子やから寺子屋で友達ができたというのは良かったと思う。
「Y：寺子屋、私は良かったです。親が子に勉強を教えるには限界が有ります。お互いに私情が入るからです。親は必要以上に厳しくなり、子どもは甘えが出る。」

・場の空気が子どもに安らぎを提供する

前述した人見知りの子どもは、まだ普段の生活では人見知りは完全に解消されていないという。つまり、この寺子屋という場の空気が、大人と話しやすくさせているといえる。インタビューで母親が「安らぎとか遊べる場所」「ガス抜きできる場所」と表現しているが、学校や習い事のように決められた事をやらされるのではなく、自分自身でやる事を選択できる自由さがこのような場の空気をつくり出しているといえる。

表５．寺子屋という場についての親の声

Q：子どもにとって寺子屋の役目というのはどういったものですか？
「O：安らぎとか遊べる場所です。習い事が多い分よその子と遊べない分ここで遊んでいる。勉強も教えてくれるし、習い事をするのと別にリフレッシュできる場所。寺子屋は自分のしたいことを選んでできるしやめたければやめれるし。」
「Y：こどもがガス抜きをできる場であり、こども心をのびのび解放できるスペースです。子どもなりにいろいろためて帰ってくるのですが、寺子屋に通ってから家で爆発することが激減しました。」

・子どもや親のストレスの解消の場になる

近年の子どもは学校や習い事で忙しいが、これらはインプットすることばかりで、発散の場や機会が欠乏している。寺子屋に来ている年長の子どもを持つ母親の Facebook には、「寺子屋に通ってから家で爆発することが激減した」という書き込みがあった。この母親は、まだ１歳にも満たない乳児を抱える２児の母親である。最近は下の子の子育てで忙しく、母親にストレスが溜まっている。上の子は、母親に構ってもらえないこともあって、寺子屋に来た際は協調性があまりなくわがままであった。しかし、寺子屋に通いだして、小学生のお兄ちゃん・お姉ちゃんに面倒みてもらうようになり、時には叱ってくれるおばちゃんに世話をされるようになってから、わがままなことをして小学生のお兄ちゃん・お姉ちゃんに相手にされなくなるのが嫌ということからか協調して遊ぶようになった。

５−２商店街活性化の副次効果

寺子屋が近隣商店街で行われていることが、商店街の活性化にもつながっている。

寺子屋のある桜通商店街はシャッター商店街ではあるが、豆腐屋・肉屋・漬け物屋・魚屋・たこやきなど家庭の食卓を支える店舗が営業している。寺子屋は母親が送迎をすることがほとんどで、その際、食材の買い物やたこやきを買って寺子屋で一緒に食べる風景も度々ある。インタビューでも「一緒に子どもと商店街で買い物をする機会がないので、買い出しに行かせられるしスーパーに比べてゆっくり買い物ができる」と述べている。

５−３寺子屋への期待

インタビューで聞かれた今後の寺子屋への期待や子どもの将来に望むことを分析すると、以下のようなことが言える。

表６. 子どもの将来についての親の声

Q.子どもの将来について何か考えていますか？
「Y：友人の奥さんに誘われてマネーセミナー（フィナンシャルプランナー付き座談会）に行ってきたのですが、それから子どもに小さい頃からお金の事や仕事の事を考えさせるように子育てしようと思っている。

Q.寺子屋でもっとこのような事をしてほしいなどありますか？
「O：ものを作る機会が少ないので、たぶんやらせたら喜ぶと思う。勉強をさせてほしい。編み物のような家庭的な事。」

子どものときからお金や仕事のことを考えられるように、という期待があるが、商店街はこの期待に応えることができる絶好の場所である。今後は商店主の協力を得ながら、商店街自体を教育の場とするプログラムを開発したいと考えている。

またもの作りに関しての期待があるが、寺子屋ではすでに積極的に取り組んでおり、WS（ワークショップ）を 12 月に行った。これは子どもがもの作りをできる機会になっただけではなく、参加者同士の交流を図ると共に、講師になってもらった地域の方との新たなネットワークを築く事ができた。幼稚園児から町会長まで幅広い層があつまり、老若男女大好評であった。

写真２. 多世代が集まってのバスボム作り

６章　結論

６−１地域の教育力の可能性

現代社会は子どもにも親にも生きづらいものになっている。親は子育てに割く時間が持てず、ついついゲームを買い与えるなど消費によって子どもの満足感を満たそうとする。また、学力偏重の傾向が塾通いを助長し、子どもたちも遊ぶ余裕がなくなっている。こうした状況を改善するには、子育てを家庭に閉じ込めるのではなく、地域ぐるみで子育てを担う状態をつくる必要がある。地域が子育てに取り組むようになれば「斜めの関係」が生まれ、子どもたちの社会性も育まれていく。寺子屋の試みは、そうしたきっかけを提起できたのではないかと考える。寺子屋という場をつくることで､そこにさまざまな人が集い、そこで築かれる人間関係によって子育てが行われていく。寺子屋は、地域の「子育てプラットフォーム」として機能しているといえる。

６−２地域での寺子屋実施のための条件整理

じつは、寺子屋を実現させる過程にもネットワークが重要であることが指摘できる。

・人的ネットワーク

筆者が寺子屋を開こうと思ったきっかけは母親からの声、要するに地域ニーズである。子育てで困っている母親がいるというのは推測でなく確かなるニーズである。これは普段の地域活動で繋がりができたことによってできた人的ネットワークのおかげである。

・想いの共感

寺子屋は桜通商店街の協力なしではなし得なかった挑戦であり、それは同時に私の想いが商店街の方に共感してもらえた証拠でもある。商店街は緩やかではあるが各々商店が繋がりを持っており、想いの共有のためには最初誰に話を持ちかけるかは重要ではないと感じた。まずは誰かに話してみる、すると適切な人を紹介してくれる、そうした糸のつながりが寺子屋実現の鍵であったと思う。

参考文献

1) 松田道雄，輪読会版駄菓子屋楽校，新評論，2008
2) リンダ・グラットン，ワークシフト，プレジデント社, 2012
3) 村澤和多里・山尾貫則・村澤真保呂，ポストモラトリアム時代の若者たち，世界思想社, 2012
4) 久徳重和，人間形成障害，祥伝社新書，2012
5) 高橋敏，江戸の教育力，ちくま新書, 2007
6) 内田樹，昭和のエートス，文春文庫, 2012

発表⑧

研究テーマ名	e-yan プロジェクト　～産学連携による大阪のまち活性化活動～
大　学　名	近畿大学
担 当 教 員	総合社会学部　講師　大野　司郎
連　携　先	東大阪の中小企業、大阪の中小企業、東大阪市、有田市、他 小規模なプロスポーツチーム（フットサル・ビーチサッカー・野球）
活動の概要	2009年に近畿大学のまちづくりに関わる研究グループの学生達と教員の有志、その活動に賛同する社会人で、東大阪・大阪のまち活性化活動を行うことを目的に、本団体は発足しました。「e-yan（いーやん）」とは文字通り、大阪弁の「いいね」を意図するもので、大阪の「いーやん」な企業、「いーやん」な人を紹介し、ボランティア協力を行う団体です。「いーやん」な企業・人をインターネット配信するための記事や動画を学生が取材・制作し、技術情報や経営者の逸話などの取材を通じて、産・学の相互交流を育み、様々なイベント活動の際にはボランティア協力し、ひいてはまちの活性化につなげようとするものです。 主な活動は、次の３つです。 ■１．インターネットラジオ配信（２番組） １つは、技術情報や経営者の逸話などの取材を行い、起業家と学生との対談番組を配信しています。 もう１つは、学生への就職活動支援の一環で、現在社会で活躍されている方々と学生との対談番組です。社会人ゲストの仕事内容ややりがい、業界の実情などをインタビューしています。 ■２．e-yan 通信部@東大阪バーチャルシティによる配信記事 東大阪のインターネット情報配信会社「東大阪バーチャルシティ」と連携して、東大阪の中小企業を取材し、その企業活動を記事としてネット配信しています。取材する学生達やサイトの利用者が、身近な東大阪地域の産業や企業活動への理解を深め、就業意識を高める活動を目的としています。 ■３．不定期の取材活動とイベント活動のボランティア支援 各方面から依頼や学生からの取材の申し出があった場合に出張取材を行っています。また、各方面のイベント活動への支援依頼があった場合にはボランティア支援も行っています。
これまでの活動実績	活動実績は、できるだけ配信記事や動画としてネット上に掲載するようにしている。 http://project-e-yan.com/index.html ■１．インターネットラジオの配信は、２番組を月に２回配信し、企業紹介配信は70回を超え、職種の配信は85種を超えている。 ■２．東大阪の中小企業の配信記事は、毎月１回25日に配信されており、22回を超えている。 ■３．不定期な活動としては、東大阪市の条例広報パンフレットの作成、小規模な社会的イベント企画のボランティア支援、中小のプロスポーツの活動支援などを行っている。

	時　期	内　　容
年間活動計画	■月に１回 ↓ 月に２回	インターネットラジオ収録 ２つの対談番組の配信
	■月に１回 ↓ 毎月25日	東大阪の中小企業の取材と記事づくり 取材記事の配信
	■不定期	地域の自治体活動への参加 イベント活動へのボランティア支援
	■年二回	異業種交流会・産学交歓会
	■毎月	定例の e-yan 会議 など

地域連携　学生フォーラム　in 大阪 2015
2015年10月18日

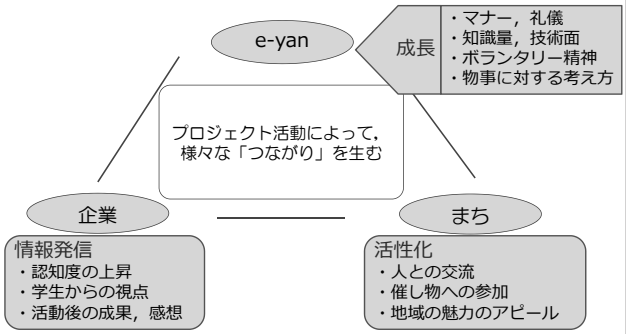
e-yan プロジェクト

～産学連携による大阪のまち活性化活動～

近畿大学総合社会学部

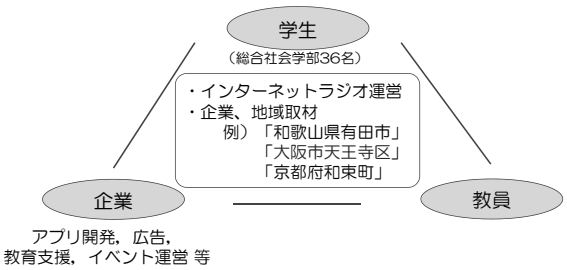
坂本琴美（4年）　中　千春（3年）
丸田邦英（3年）　山口智子（3年）

活動目的



e-yanプロジェクト

「いーやん」な企業,「いーやん」な人を紹介



インターネットラジオ

インターネットラジオ

- ２番組を月に２回配信
- 「e-yanラジオ」　（企業紹介）：配信数７
  企業の社長や取締役にインタビュー！
- 「ハローワールド」（職業紹介）：紹介職種８５種以上
  各業界で活躍している人にインタビュー！
  ラジオはゲストと学生の対談形式、１つの番組は３０分
- ラジオMC、ミキサーともに学生が担当

ゲスト累計 100人以上

ラジオ収録風景

打ち合わせ

収録

ミキサー

記念撮影

今まで紹介した職業（1）

1：モデル
2：建築家
3：ネイリスト
4：司法書士
5：報道記者
6：人事
7：マナー講師
8：新聞記者
9：社会保険労務士
10：広告企画ディレクター
11：柔道整復師
12：税理士
13：雑誌編集/雑誌企画
14：ディレクター
15：弁護士
16：大学教授/客員教授
17：元プロサッカー選手
18：気象予報士
19：食品卸
20：エステティシャン
21：茨木市市議
22：システムエンジニア
23：外資系レストラン店長
24：Webデザイナー
25：行政書士
26：TVプロデューサー
27：ジャーナリスト
28：呼吸器外科医師
29：農家
30：広告代理店営業
31：エステティシャン
32：金融システム
33： プログラマー
34：社会保険労務士
35：医療事務・介護事務
36：サービスエンジニア
37：弁理士

今まで紹介した職業（2）

38：流通加工業
39：ピアニスト
40：建設コンサルタント
41：行政書士
42：DJ
43：中小企業診断士
44：貿易商
45：美容鍼灸師
46：システムエンジニア
47：薬剤師
48：国際物流
49：公認会計士
50 ：ライフプランナー
51：マーケティングプランナー
52：電気工事士
53：広告代理店
54：ミュージシャン
55：不動産業
56：アナウンサー
57：アロマテラピスト
58：美容コンサルティング
59：営業
60：介護士
61：広告企画、製作
62：塾講師
63：魚屋
64：電報事業
65：図書館司書
66：清掃業
67：食品製造・販売
68：美容系営業
69：ラジオプロデューサー
70：ビル運営マネージャー
71：農家
72：音楽アーティスト
73：司法書士
74：スポーツトレーナー

など

インターネットサイト「ピテラジ」にて放送

収録したラジオは「ピテラジ」にて
隔週配信http://www.pithecan.com/

e-yanのホームページでも公開

http://project-e-yan.com/

通信部@東大阪バーチャルシティ

e-yan通信部@東大阪バーチャルシティ

- 学生自ら、地元（東大阪市）を取材
- 東大阪の地域密着情報配サイト「東大阪バーチャ
  との連携

現在の記事数
26

学生が取材に出向き、記事を作成・配信

これまでの取材先

●一般企業
- ドッグカフェPU
- 東大阪カレーパン会
- 成平工業
- 栗林書房
- 小川善
- 上野米穀店
- 岡本歯科医院
- 川浦農園
- 高山捻子製作所
- 有限会社　淡光
- パソコンサル『フォルトゥナ』
- Webサイト制作事務所

●行政
- 東大阪市　環境部　美化推進課

●イベント
- 京都府和束町
- 近畿大学総合社会学部
- 枚岡神社
- 近畿大学入学式
- 恋の長瀬川（ご当地ソング）
- 布施商店街、布施えびすバル
- 東大阪まちづくり意見交換会
- 東大阪音楽フェスティバル
- ラグビーパブリックビューイング
- HWJ東大阪

通信部のwebサイトにて公開

http://www.h-osaka.com/e-yan

その他の活動

交流会の開催

●ラジオゲストを中心に社会人を招く

学生と社会人、さらに社会人同士の交流

●半年に１回、e-yan主催で開催

学生が中心となり準備・企画・運営を実施

イベント・ボランティア活動等

- 和歌山県有田市での**みかん狩り取材、地の島の清掃活動**
- 京都府和束町での**茶摘み取材、キャンドルナイトボランティア**
- 天王寺区**「真田幸村博」でのスタッフボランティア**
- 東大阪市の**環境条例広報パンフレットの作成**
- MBS茶屋町プラザ**「森パーティ」でのボランティアスタッフ**
- 東大阪市の**布施えびすバルでのボランティアスタッフ**
- **大阪国際マンガグランプリでのボランティアスタッフ**
- シュライカー大阪やビーチサッカー等の**プロスポーツの活動支援**
- テレビ埼玉「たまたま」の**番組スタッフボランティア**

和歌山県有田市での取材，及び清掃活動

有田市 記事の作成・公開

清掃活動の様子

京都府和束町「和束未来づくり工房チーム」との連携

- キャンドル・イベントでのボランティア
- 廃油と茶葉を活用したエコキャンドル制作
- 地域取材（動画制作）

キャンドル・イベントの様子

和束での取材

youtubeで動画公開

「天王寺×真田幸村 観光ガイドアプリ」制作協力

東大阪市の環境条例広報 パンフレットの作成

「東大阪市みんなで美しく住みよいまちをつくる条例」が
2014年10 月1 日から施行され、近鉄河内小阪駅周辺で、
野田市長や天野議長によって，作成リーフレットが配布

年間スケジュール

①活動打ち合わせ
- 全体（学生＋社会人）：月１回
- 学生のみ：月１回

②ラジオ
- 収録：月１回（５本程度）
- 配信：２番組を月に２回配信

③記事（通信部）
- 会議：月１回
- 配信：月１回（２５日）

④交流会：年２回（夏季／冬季）

⑤イベント・ボランティア活動等
- 不定期実施

おわりに

ICT（情報通信技術）を活用した産学連携プロジェクト

- 身近な地域の理解
  ⇒地域課題の発見，共有 ⇒ 学生自らが考え、解決策の提案
- 企業活動の理解，「学生・社会人」との交流
  ⇒キャリア・デザイン，就業意識の向上，
  ⇒企画力やイベント運営能力（コミュニケーション力）を向上

今後の改善・目標
- Ustreamによる動画配信，プチ記事の作成
- 活動の継続、更なる向上を目指す

ご清聴ありがとうございました。

発表⑨

研究テーマ名	地元食材を観光客向けの名物料理に仕立てることによるブランド化への挑戦 「料理を作り、料理で創る立山ブランド」
大　学　名	近畿大学
担 当 教 員	経営学部　教授　高橋　一夫
連　携　先	富山県立山町
活動の概要	富山県立山町主催の地域活性化策を提案する2014年度インターカレッジコンペティションに向け、同年６月から活動を開始した。資料やデータから町の現状と課題を調査した。町の人口減少や高齢化など、いくつかの課題の中から、立山町総合計画と照らし合わせ、課題解決に向け企画を構想する。 立山町は、黒部ダムやアルペンルートなどの一大観光地を抱えながらも、町の特産物をアピールできる機会が少ないため、立山という知名度に見合う経済的価値を得ることができていない。一方で、町民も「町に誇れるものがない」と考えていた。そこで、町の特産物を使った新たな名物料理を町民自らが創りだすことによって、観光客と町民の双方から町の新ブランドを展開する企画を打ち出した。料理をテーマとした企画で、2014年８月の立山町フィールドワークの際には、農畜産物の生産者や加工業者を中心にヒアリング調査と企画への協力を依頼した。また、立山町の町民300人を対象にアンケート調査を実施し、町民の特産品や料理企画に関する意識を確認した。 ヒアリング調査の情報から、得られる経済的効果を試算し、また、日本の他の地域で取り組まれている地域活性案や町のブランド化の事例研究から、成功要因と失敗要因を調べた。この調査で得られた情報も組みこみ、より現実的で実現性の高い企画に仕上げた。町民が地元食材の魅力に気付くこと、自信を持ち外部へアピールすること、立山ブランドが全国的な地位を確立すること、以上の三点を一連の流れとしてつなげ好循環を生み出すことで町の経済活性を狙いとした。2014年11月末日に行われた予選では、立山町町長をはじめ、有識者からなる審査員にプレゼンテーションを行い、９大学12チーム中準優勝の企画となった。
これまでの 活動実績	2014年６月から文献調査を行い、企画をいくつかあげはじめた。その中で実現可能性と地域活性効果の高いものに絞り、関係者にヒアリング調査のアポイントをとりつける。立山町町長へのヒアリングに始まり、立山畜産株式会社、JAアルプス、黒部ダムなど、企画に関係する場所を訪問した。 【ヒアリング結果】 ① 高い潜在能力を持つ食材でも特産物としての認知度は低い。 ② 料理大会に使う食材は地元農家の協力により安価で譲っていただける。 ③ ダムレストハウスは観光客に対し、立山の名物料理をアピールしたいと考えていた。 これに、他の地域での活性化案の情報も併せ、具体的な企画構想に入る。11月中旬に企画レポートを提出し書類選考の後、11月末日、立山町で開催されたコンペティションの予選および翌日の決勝へ出場した。後日、立山町民に配布される広報誌へ掲載する総括レポートを提出し、その後、立山町を中心に提案企画の実現に取り組まれている。

	時　期	内　　容
年間活動計画	2014年６月	文献調査から活動開始
	７月下旬	関係者へヒアリング調査のアポイント取りつけ
	８月27日	富山県立山町にて３泊４日のフィールドワーク開始
	９月22日	担当教授への中間報告
	11月14日	企画レポート提出
	11月30日	立山町で開催の予選コンペ出場
	12月１日	決勝コンペ出場
	12月中旬	総括レポート提出、その後立山町を中心に企画実施に向けて取り組みを進めている

参加学生

大島　諒子、門　真希、芥子　知里、西本　一貴、宮瀧　稀子

活動の成果

2014年６月から文献調査を行い、企画をいくつかあげはじめた。その中で実現可能性と地域活性効果の高いものに絞り、関係者にヒアリング調査のアポイントをとりつける。立山町町長へのヒアリングに始まり、立山畜産株式会社、ＪＡアルプス、黒部ダムなど、企画に関係する場所を訪問した。

【ヒアリング結果】

④　高い潜在能力を持つ食材でも特産物としての認知度は低い。

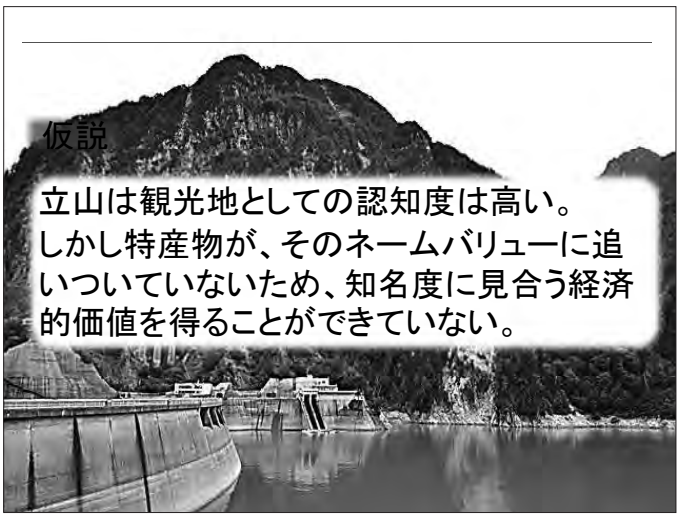
⑤　料理大会に使う食材は地元農家の協力により安価で譲っていただける。

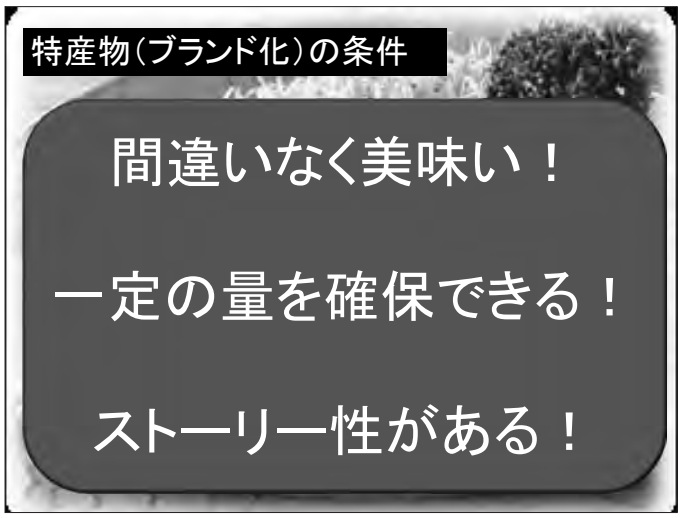
⑥　ダムレストハウスは観光客に対し、立山の名物料理をアピールしたいと考えていた。

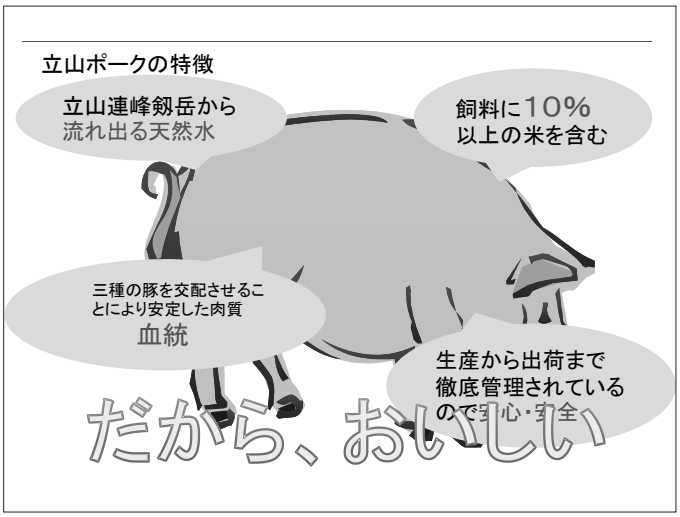
これに、他の地域での活性化案の情報も併せ、具体的な企画構想に入る。11月中旬に企画レポートを提出し書類選考の後、11月末日、立山町で開催されたコンペティションの予選および翌日の決勝へ出場した。後日、立山町民に配布される広報誌へ掲載する総括レポートを提出し、その後、立山町を中心に提案企画の実現に取り組まれている。

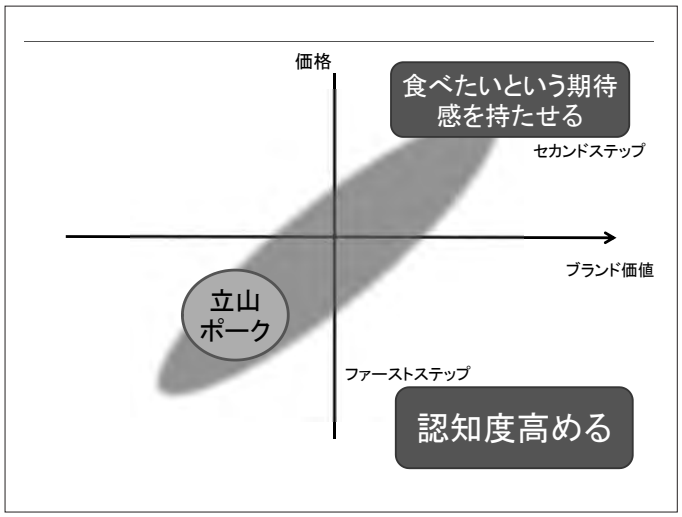
地域からの評価

立山町の食に関する商品は多く存在するが、本企画によってまだ開発の余地があると思えた。人々の生活に身近な、食という分野から町の活性化を考えることは、地産地消の推進にもつながる。（立山町　舟橋町長より）


仮説
立山は観光地としての認知度は高い。
しかし特産物が、そのネームバリューに追いついていないため、知名度に見合う経済的価値を得ることができていない。


特産物（ブランド化）の条件
間違いなく美味い！
一定の量を確保できる！
ストーリー性がある！


立山ポークの特徴
立山連峰剱岳から流れ出る天然水
飼料に10%以上の米を含む
三種の豚を交配させることにより安定した肉質
血統
生産から出荷まで徹底管理されているので安心・安全
だから、おいしい


価格
食べたいという期待感を持たせる
セカンドステップ
ブランド価値
立山ポーク
ファーストステップ
認知度高める

認知度を上げるためには……

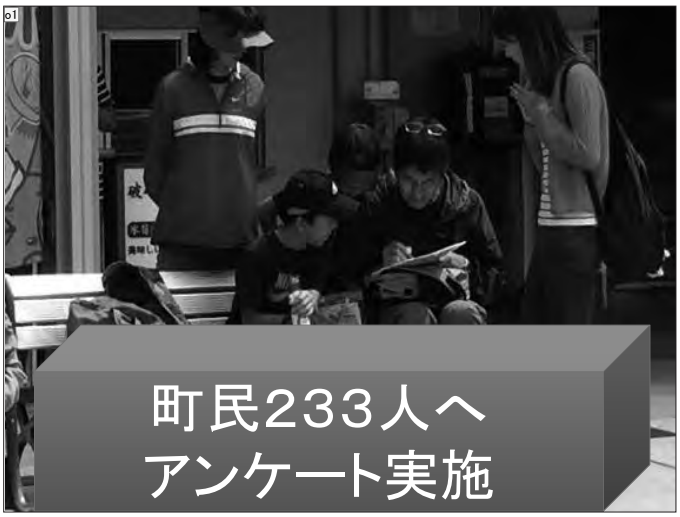
パクパクポーク
料理大会
開　催

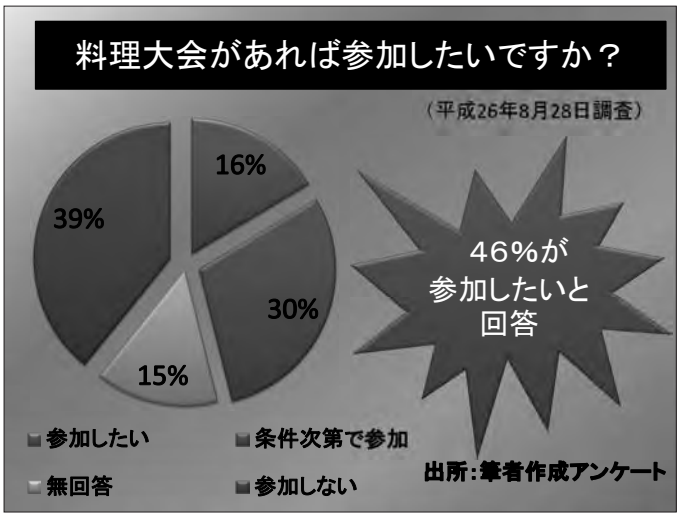
ブランド化へのステップアップ

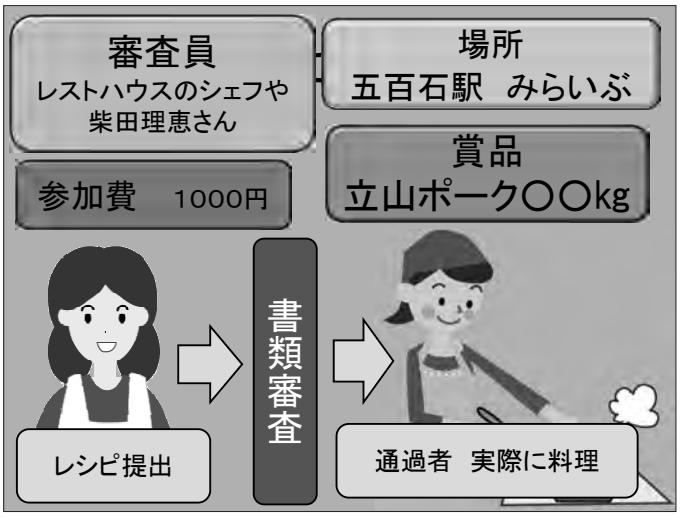
地域ブランド構築の最初の一歩は、住民も知らないお宝探しとその魅力の魅せ方、付加価値の付け方にある

したがって、当初のターゲットを町民とその周辺住民にする。66.1%の町民が立山に魅力がないと思っており、町民のシビックプライドの醸成も含めて始めたい

特産品によって地域経済を潤すには、域内消費を活性化させることが順当である。そして地元の盛り上がりをつくってから、首都圏・関西圏にプロモーションをおこなう







開催場所：五百石駅（元気交流ステーション未来部）
参加資格：立山名物を創りたい人
参加費：500円
募集期間：平成27年7月1日（水）～8月31日（月）
賞品：立山ポーク〇〇kg
お問い合わせ先：立山ポーク料理大会実行委員　担当者〇〇
TEL 0120******　Email xxx@～～.jp　ホームページ http://～～

収支計画

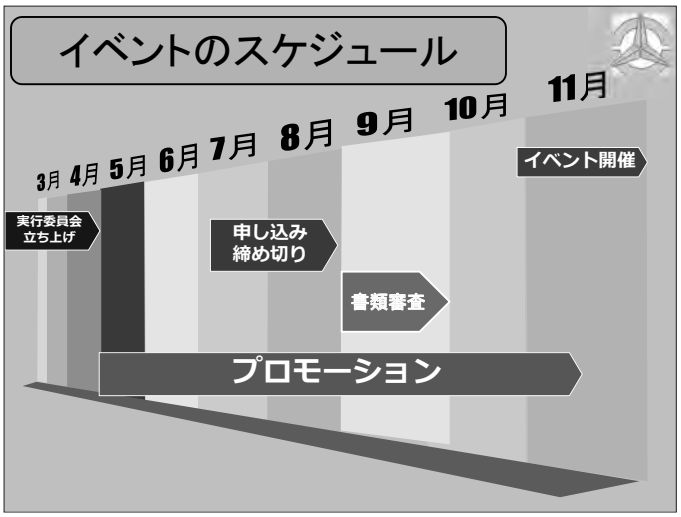
収入		支出	
参加料（¥1,000×35）	¥35,000	会場費（みらいふ金日）	¥35,000
クラウドファンディング	¥1,660,000	ポスター制作費(500部)	¥162,000
		出演料（柴田理恵）	¥600,000
		人件費（3か月）	¥900,000
		賞品・賞状	協賛・無料オンライン
総計	¥1,695,000		¥1,695,000

＊クラウドファンディング：不特定多数の人がインターネット経由で、NPO法人や行政などの組織に財源の提供や協力などをおこなうことをいう。
日本ではその報酬は商品・サービス提供型に限られるが、金融庁では株式型の議論も始まっている

行政によるクラウドファンディングの事例

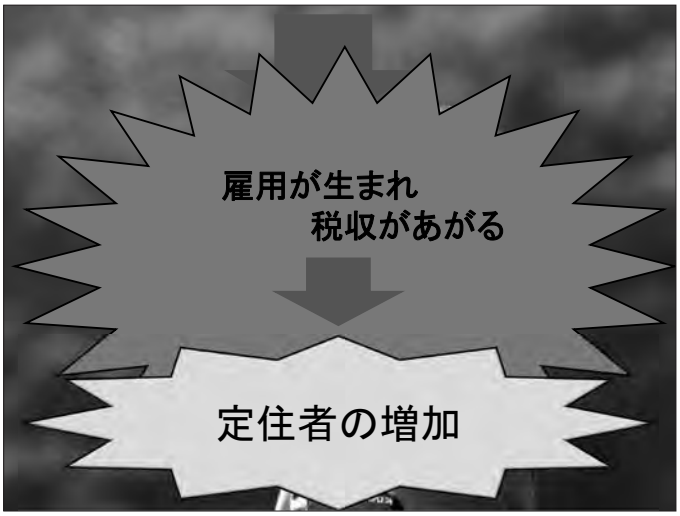
ご当地キャラ『おおつ光(ひか)ルくん』を新しくしてあげたい！

- 大津市のキャラクターの新調にふるさと納税付きでクラウドファンディングを実施中
- 106万円の募集で、現在708,600円の寄付が集まる
- お礼は市長からの感謝状とゆるキャラグッズ



黒部ダムレストハウスおすすめ
立山ポークをパクパクッ！
販売
パクパク立山ポーク生姜焼き定食　￥1080
立山町民による立山ポーク料理大会で優勝した商品です。
立山連峰剱岳から流れ出る天然水で手塩にかけて育てた
立山ポークをお楽しみください。

イベントの効果
販路拡大
生産拡大


雇用が生まれ
税収があがる
定住者の増加

利益はどうなるのか？？

収入（1080円/食）
支出
原価
売上
￥200
480（円）×19,737（食）
利益
￥9,473,760
出所：中小企業庁のデータより算出

おわりに
町に関心を持たせる
町に人が来る第一歩
START

参考文献

- 第9次立山町総合計画
- 立山畜産株式会社：http://www.tateyama-chikusan.jp/tateyamapork.html
- 「立山町のすがた　インターカレッジコンペを通じた地域活性化実証事業資料」
- 中小企業庁実態基本調査：http://www.chusho.meti.go.jp/koukai/chousa/kihon/index.htm
- 有限会社三峰プロジェクトホームページ飲食店の係数モデル：http://www.food-biz.jp/13/11-1/

大学コンソーシアム　大阪

～立山町活性案～

近畿大学　経営学部

高橋ゼミ
大島諒子　西本一貴

立山町について

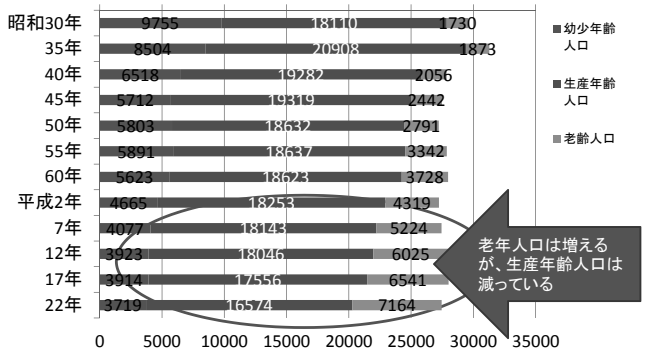
立山町について

- 人口：27.466人（2010年）
- 面積：307.31Km（2010年）

ただし、面積の約70%は標高400m以上のため、
人は住んでいない。人口密度はグアム島と同じくらい

立山町民の住んでいるところ

立山町の人口構成比



出典：総務省統計局 国勢調査

立山の問題点

① 立山町の生産年齢人口が減少傾向
② 町民のあきらめ意識
③ 交流機会の減少
④ 食の魅力不足

66.1%

Teach

食育

立山の
ブランド力強化

人と人との
つながり

Action

立山の特産物
×
立山町民

町民に特産物への関心を持たせる

注意喚起（外部）

↓

理解・認識（内部）

料理大会
in
たてやま

料理大会

立山町民

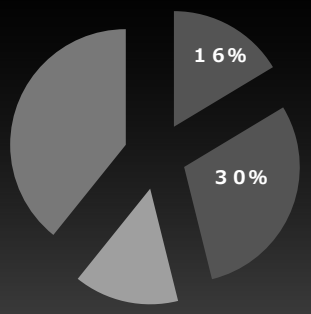
↓

レシピ考案・審査

↓

実際に調理

料理大会参加希望者（町民）n＝233



46%

- 参加したい
- 条件次第では参加
- 無回答
- 参加しない

血統

水

一貫

立山ポーク

安心

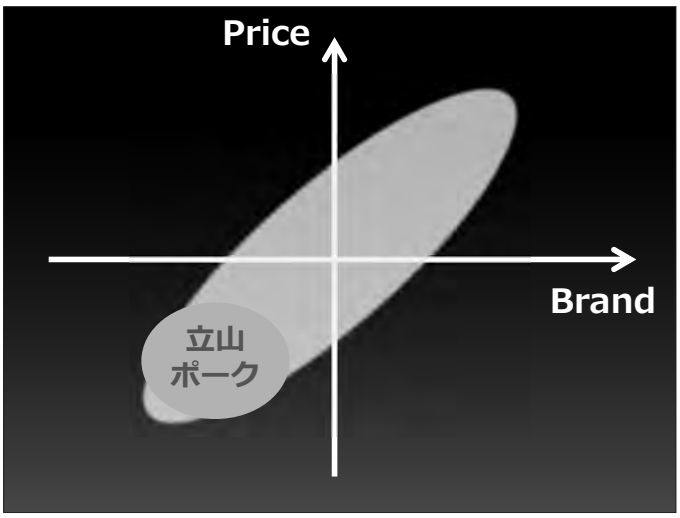
米

260 t

立山産の飼料米

豚×米

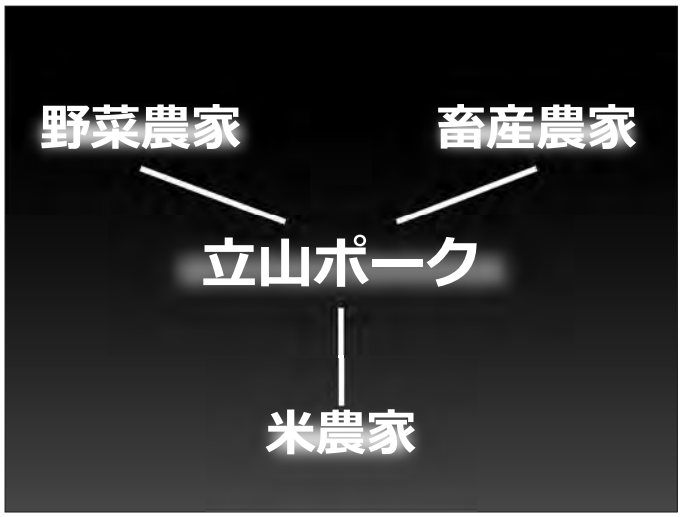
肉は旨く
脂身は甘く



ブランド化　3つの条件

- まちがいなく美味しい
- 一定の量が確保できる
- 独自のストーリー性がある

Together



生産拡大

雇用の創出

定住者の増加

税収増加

立山の特産物
×
立山町民

町民に特産物への関心を持たせる

Enjoy
Your life

And

Market

立山黒部アルペンルート
黒部ダム

100万人

黒部ダムレストハウス

・料理大会の審査員
・立山産農産物の仕入れ
・販売
・目玉商品としての売り出し

すべて承諾済み

観光客に販売

立山の特産物を知るきっかけ

高い経済効果

19,737食（黒部ダムカレー）

Advance

町の課題解決

観光経済による町の活性化

住民と行政の協働

産 × 官 × 民

＝理想の立山

「挑戦するものが成功する」

Teach
Action
Together
Enjoy
Your life
And
Market
Advance

参考文献

第9次立山町総合計画

立山畜産株式会社HP
http://www.tateyama-chikusan.jp/tateyamapork.html

日本経済新聞電子版　2013/11/16
http://www.nikkei.com/news/print-articl/R-FLG=0&ng=DGXNASFB1206R_T11C13A1000000&uah=DF110720133985

黒部ダムレストハウス

立山町のすがた
インターカレッジコンペを通じた地域活性化実証事業資料

発表⑩

研究テーマ名	大阪おみやげ「かるた」のデザイン、パッケージデザイン
大　学　名	大阪成蹊大学
担 当 教 員	芸術学部　教授　門脇　英純
連　携　先	株式会社せのや、株式会社カワキタ
活動の概要	東大阪市の中小企業がギャルママと呼ばれる若い世代の母親とタッグを組み、ママ目線で商品開発する「ギャルママ商品開発部」（株式会社カワキタ　河北一朗代表）が、大阪市の土産専門店「いちびり庵」などを展開する株式会社せのや（福岡武志専務取締役）とコラボして、新たな“大阪お土産モン”の誕生に向けたプロジェクトに大阪成蹊大学芸術学部情報デザイン学科ビジュアルデザインコースのインハウス・デザインチーム（東淀川アート＆デザインを運営しているSocial Design Projectグループ）を担当させ、製品コンセプト、ターゲット層等の分析からふみ札、カルタイラスト、商品パッケージの製作を行った。
これまでの活動実績	発表学生のこれまでの活動実績 （芸術学部情報デザイン学科ビジュアルデザインコース） ○東淀川区：東淀川アートレンタル・プロジェクト 平成26年6月～平成27年9月　【産学連携プロジェクト】 ○大阪土産「わいわいカルタ」【産学連携プロジェクト】 ○「広報いけだ」の取材、デザイン ○大阪市東淀区地域連携PBL「大阪市東淀川区の社会的課題を考える」 ○企業連携PBL（タビオ株式会社、株式会社せのや、株式会社カワキタ）

	時　期	内　　容
年間活動計画	平成27年11月	連携依頼
	平成27年12月	制作イメージ提案
	平成27年１月19日	企画会議
	平成27年３月18日	デザイン提案
	平成27年４月３日	取材・撮影
	平成27年４月24日	制作プレゼンテーション・打ち合わせ
	平成27年５月29日	制作プレゼンテーション・打ち合わせ
	平成27年６月12日	制作プレゼンテーション・打ち合わせ
	平成27年６月～７月	デザイン、読み札コピー確認・修正
	平成27年７月	データ入稿
	平成27年８月１日	大阪土産物「いちびり庵」にて販売開始

大阪わいわいカルタ

大阪成蹊大学 芸術学部 ビジュアルデザインコース
VDART Project

大阪成蹊大学
芸術学部

VDART PROJECT

大阪市東淀川区
アートレンタルプロジェクト

学生作品を3ヶ月周期で
貸し出し、展示を行った企画

アートフェスタ出展

「祝」をテーマにした展覧会

大阪土産「カルタ」
商品開発プロジェクト

いちびり庵、株式会社カワキタ
ギャルママ商品開発部との
コラボ企画

大阪成蹊大学
芸術学部

大阪わいわいカルタ

大阪成蹊大学
芸術学部

はじめに → 制作過程 → 学び → まとめ

大阪成蹊大学
芸術学部

大阪みやげ卸売

いちびり庵
創業天正年間

商品開発・製造・販売

KAWAKITA
ギャルママ商品開発部

大阪成蹊大学
芸術学部
VDART PROJECT
デザイン

大阪成蹊大学
芸術学部

開発の流れ

2015年 1月下旬 → 2月 → 3月上旬 → 3月下旬 → 7月 → 8月

- 販売会社せのや：キーワード・場所の設定
- 大阪成蹊大学：カルタのデザイン・文章作成
- 企画会議
- カルタ・パッケージデザイン文章案調整
- 製品の素材・印刷仕様形式の決定
- プレゼンテーション
- カルタデザイン修正
- カルタデザイン・パッケージデザイン完成
- 入稿データ作成
- プレス発売

読み札の制作　2015年2月

大阪成蹊大学 芸術学部

大阪キーワード

- 中之島公会堂
- 天保山
- インスタントラーメン
- 天神橋筋商店街
- かすうどん

せのや

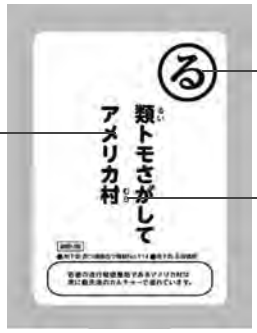
カルタの文章

- あ　兄貴は東京 俺中之島
- い　いってきます！低さ二番目 天保山
- う　美味さは３分 インスタントラーメン
- え　ええもん揃った 商店街
- お　お出汁が おいしい 油かす かすうどん

VD ART Project

読み札の制作

大阪成蹊大学 芸術学部



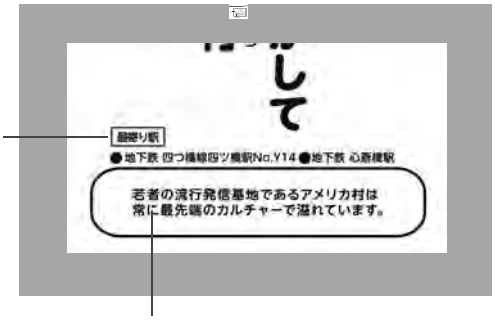
わかりやすいように
大きな文字

真っ黒ではなく
紺色を使用

誰でも読めるよう
ふりがな

読み札の制作

大阪成蹊大学 芸術学部



観光名所の
最寄駅

観光名所の説明を
わかりやすく表記

絵札の制作　2015年3月

大阪成蹊大学 芸術学部

デフォルメ　派手　リアルタッチ

コラージュ　モノクロ　手描き調

会議風景

大阪成蹊大学 芸術学部

著作権問題

大阪成蹊大学 芸術学部

絵札の制作

大阪成蹊大学 芸術学部

あべのべあ　太陽の塔　ユニバーサル スタジオジャパン　グリコ・フグ

絵札の制作

大阪成蹊大学 芸術学部

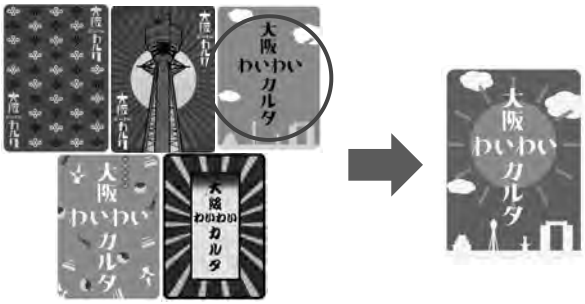
一般向け　江戸　大正

絵札の制作

大阪成蹊大学 芸術学部

表札の制作　2015年3月

大阪成蹊大学 芸術学部



パッケージの制作2015年3月

大阪成蹊大学 芸術学部

大阪
わいわい
カルタ

パッケージの制作

大阪成蹊大学 芸術学部

完成　2015年7月

大阪成蹊大学 芸術学部

商品PR

大阪成蹊大学 芸術学部

FM　OSAKA「大人の文化村」

大阪みやげに大阪カルタ
若いアイ 学生の間で

朝日新聞

毎日新聞
毎日放送「ちちんぷいぷい」

大阪成蹊大学 芸術学部

大阪わいわいカルタの開発を通しての学び

開発を通しての学び

大阪成蹊大学 芸術学部

大阪わいわいカルタの開発を通しての学び

前に踏み出す力
- 自発的に自分たちの役割をさがしていく
- 積極的に意見交換を行った
- 売れるためにどうすればいいか考え、行動した

考え抜く力
- 著作権問題を表現の工夫によりクリア
- 発売日に向けてスケジュールを組み、納期を守って行動
- カルタと大阪みやげを両立させ、今までにない大阪みやげを作った

プロジェクトで働く力
- 企業様に対してわかりやすくプレゼンテーション
- 企業様の要望を理解する
- デザインに対しての変更点など、臨機応変に対応
- 全員で協力し、互いに思いやりながら取り組んだ

発表⑪

研究テーマ名	官学連携次世代環境教育教材開発プロジェクト
大　学　名	大阪成蹊大学
担 当 教 員	芸術学部　教授　門脇　英純
連　携　先	京都府長岡京市
活動の概要	先進的な授業「課題解決型デザイン学習（PBL：Project-Based Learning）」で、環境教育教材「デジタル紙芝居」開発 「デジタル紙芝居」を紙の絵本にするためにインターネットで資金を募る「クラウドファンディング」に挑戦 芸術学部ビジュアルデザインコース２年 美しい環境を次世代に引き継ぐため、保育所や幼稚園、小学校などで環境学習が行われています。誰もが手軽に使用することができる環境教育教材の必要性が教育現場から出ていました。ネット環境を使った環境教育教材の製作、そしてモノを大切にすることや、街を美しくすることをテーマに、大阪成蹊大学芸術学部が京都府長岡京市（京都府）と連携協定を結び、全国で使える子ども向けの環境学習教材「デジタル紙芝居」５作品を製作しました。 保育園や小学校の出前教室で「どうして大人は地球を汚すのだろう？」と子ども達から教えられました。世界には本を手にする機会が限られた子どもたちがいる。絵本は言葉の壁を越え、世界中の子どもたちを笑顔にすることができると考え、長岡京市に協力してインターネットで資金を募る「クラウドファンディングのカウントダウン・チャレンジ」へ挑戦しました。デジタル紙芝居をもとに、日本語と英語で二段表記した絵本を制作し、完成した絵本は長岡京市内だけでなく、ラオスやミャンマーなど紛争や貧困などで本を手にする機会のないアジアの子どもたちに届けます。「カウントダウン・チャレンジ」は、全国のサポーターより支援いただき目標達成できました。今回の取り組みは、授業が終了してからも継続してプログラムが進行し、行政との連携に留まらず、学校現場、子どもたち、全国のサポーターから支援を頂き、創造以上に授業が発展していきました。次年度もこのプロジェクトは継続し、次世代環境教育教材のスタンダードを目指します。
これまでの活動実績	発表学生のこれまでの活動実績 （芸術学部情報デザイン学科ビジュアルデザインコース） ○大阪卸市場JA大浜、JA熊本：トマト酢、飲むトマト酢のボトル瓶ラベルデザイン 平成25年４月～10月 ○大阪市東淀川区：街頭犯罪防止ポスターデザイン（防犯） 平成25年７月～平成26年３月 ○大阪府都市未来創造局：「Loving OSAKA納税」の知名度の向上のため、 広報に用いるPRチラシデザイン　平成25年11月～平成26年１月末 ○東淀川区：東淀川アートレンタル・プロジェクト 平成26年６月～平成27年９月　【産学連携プロジェクト】 ○大阪土産「わいわいカルタ」【産学連携プロジェクト】 ○「広報いけだ」の取材、デザイン ○大阪市東淀区地域連携PBL「大阪市東淀川区の社会的課題を考える」 ○企業連携PBL（タビオ株式会社、株式会社せのや、株式会社カワキタ）

	時　期	内　　容
年間活動計画	平成26年９月23日	課題テーマの発表
	平成26年９月30日	長岡京市長表敬訪問
	平成26年10月７日	コンセプトワーク
	平成26年10月14日	各グループ　コンセプトの発表
	平成26年10月21日	紙芝居デザイン試作
	平成26年10月28日	紙芝居デザイン試作
	平成26年11月４日	紙芝居デザイン試作
	平成26年11月11日	学内中間プレゼンテーション振返り
	平成26年11月18日	紙芝居デザイン試作、広報キャンペーン計画立案
	平成26年11月25日	長岡京市へ第１回プレゼンテーション
	平成26年12月２日	デザイン書体セミナー
	平成26年12月９日	紙芝居デザイン、動画修正 長岡京市、環境団体に第２回目プレゼンテーション＆最終選考会
	平成26年12月16日	選考作品デザイン修正及び校正
	平成27年１月６日	選考作品デザイン修正及び校正
	平成27年１月13日	最終データ完成
	平成27年１月27日	京都府長岡京市開田保育所でテスト上映
	平成27年２月９日	アレックス株式会社関西支社へクラウドファンディング、カウントダウン・チャレンジプログラムに応募
	平成27年２月12日	カウントダウン・チャレンジプログラム審査通過
	平成27年４月15日	カウントダウン・チャレンジスタート
	平成27年４月17日	カウントダウン・チャレンジ目標金額達成
	平成27年６月12日	カウントダウン・チャレンジ終了
	平成27年７月22日	絵本製作委員会（仕様等の協議）
	平成27年９月	長岡京市予算措置９月補正に計上
	平成27年９月	絵本製作委員会で仕様等の決定
	平成27年10月	長岡京議会終了後、入札事務
	平成27年12月	絵本完成
	平成28年３月	国際ソロプチミスト京都などを経由し、海外、国内に絵本を送る
	平成28年３月	出資者へリターン実施

産官学連携
次世代環境教育教材
制作プロジェクト

デジタル紙芝居と その絵本化について

大阪成蹊大学芸術学部ビジュアルデザインコース3年
大谷・他谷・中渡瀬・安里

デジタル紙芝居とは

全国で使える環境教育教材を！

京都府
長岡京市

大阪成蹊大学
ビジュアル
デザインコース

↓

デジタル紙芝居の開発

長岡京市からのミッション

**多くの子供たちに
ゴミ問題について知ってもらい、
これからの地球環境について
考えてもらう**

→市内保育所対象の出前授業での教材になる

デジタル紙芝居とは

1班「ごみばこくんとリサイクル」

3班「びかびかごちゃごちゃふたご村」

4班「リサイクルのすすめ」

2班「けいたくんとボールくん」

5班「みんなごみってどうしてる？」

デジタル紙芝居とは

既存のデジタル紙芝居

・イラストやデザインの視覚効果が薄い
→内容がわかりにくい
・効果音や音声などの音質があまりよくない
→内容が聴き取りづらい

デジタル紙芝居とは

デジタル紙芝居の課題

**視覚効果が高く、音声の質も良い、
内容が伝わりやすい
デジタル紙芝居を制作する！**

→ビジュアルデザインを専門に学んでいる
私たちであれば視覚効果の高く、
内容の伝わりやすいデジタル紙芝居が制作可能

デジタル紙芝居　制作目的

ただの環境教育教材として
制作するだけでなく、
子供達が楽しんで
学んでもらえる動画にしたい！

デジタル紙芝居について

コンセプト：「このデジタル紙芝居をきっかけに、
対象者である子どもとその親が一緒に
ゴミ問題について話し合い、考えてもらえるもの」

コラージュ技法

参照・引用 http://www.ehonnavi.net/ehon/23/ はらぺこあおむし /

デジタル紙芝居　内容について

「ぴかぴかごちゃごちゃふたご村」

ごみの分別について考え、ごみを捨てていかないと
いつか自分自身、故郷が困るときがくる

デジタル紙芝居　内容について

ツツジ

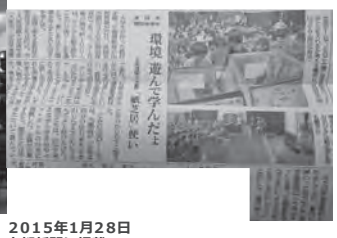
タンポポ

デジタル紙芝居　内容について

それぞれ5つの動画は贈呈式を経て長岡京市に帰属
→YouTube にて誰でも視聴可能

デジタル紙芝居　内容について

2015年1月26日
開田保育所へ出前授業



2015年1月28日
京都新聞に掲載

長岡京市民からの意見

・子どもたちや先生から、
「手にとって絵本として読みたい」
「絵本としてほしい」という声が

子どもたちのもとへ絵本として届けたい
絵本は言葉の壁を越え、
世界中の子どもたちを
笑顔にすることができるのでは？

絵本化への挑戦

デジタル紙芝居を絵本化するプロジェクトを始動

絵本化への挑戦

絵本化への挑戦

長岡京市職員　木本氏

環境絵本、ネット資金で
長岡京市
目標120万円、賛同募る
デジタル紙芝居を製本

2015年5月10日
京都新聞

絵本化への挑戦

目標の120万を上回る
資金目標到達

日本語と英語で二段表記された絵本を制作

ハードカバー…国内教材、400冊
ソフトカバー…貧困で絵本が手に入らない
アジアの子どもたちへ、600冊

長岡京からの評価

・保育所や小学校で行う環境教育において、
地域の特性や諸問題を取り込んだ学習を
行うことが可能に

・身近な学生がつくった教材は、
子どもたちが親近感を持ち、地域の愛着にも繋がる

教材開発についてのまとめ

・世界にはまだ数多くの環境問題が存在する
　→違った問題でもまだまだ需要があるのではないか

・対象のことを考え制作された教材からは
　より良い学びが得られるはずである。
　デザインも内容も両方を最大級にまで研磨する必要がある

・教材開発に携わるためには、
　現状把握や問題についての綿密な調査が重要

・デザインだけを勉強していれば良いというわけではない、
　デザインを制作するためにはそれぞれミッションへの
　調査・研究が必要不可欠である

学習についてのまとめ

・学生でも資金調達ができるということが
　身をもって実感でき、またその資金を使って
　実際に絵本として制作するという、
　通常の授業ではない展開までできたのは
　良いキャリアになった

・今回の京都府長岡京市との産官学連携授業は、
　全体を通して優れた連携をとることができた。
　制作方法や、スムーズなグループ活動の仕方など、
　私たち自身のスキルアップにも繋がった

発表⑫

研究テーマ名	河内木綿プロジェクト
大　学　名	大阪経済法科大学
担当教員	教養部　教授　呉　志賢
連　携　先	株式会社アイズ、NPO法人河内木綿藍染保存会、NPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会
活動の概要	本学の教育の１つプログラムである、BLP（ビジネスリーダープログラム）において、河内木綿プロジェクトを実施している。BLPは、PBL（Project Based Learning）を通じてビジネス現場で求められる知識や実践力を身につけるプログラムである。河内木綿プロジェクトでは、大学が位置する八尾市の伝統文化である河内木綿文化を新しい発想で現代に復活させ、世界に発信し、八尾市の活性化に貢献していく事を目標に活動を行っている。 現在、河内木綿文化の普及と発展、継承のために、河内木綿の栽培、加工、販売という、河内木綿製品生産の６次産業化を目指した活動を中心に取組を行っている。河内木綿栽培では、大学の敷地内にある畑で河内木綿を有機栽培し、周辺地域の自然環境保護も見据えて、河内木綿の栽培をNPO法人ニッポンバラタナゴ高安研究会と合同で取り組んでいる。河内木綿の加工においては、大学で収穫した河内木綿から糸を紡ぎ、紡いだ糸で機を織り、藍染を施す作業を、NPO法人河内木綿藍染保存会の協力のもとで行っている。 販売では、河内木綿やオリジナル河内木綿藍染紋様を使用した商品を開発し、新しい発想を取り入れた製品の販売を目指している。昨年度は、いくつかの製品を製作し、試験的に販売を行った。 また、河内木綿文化の情報発信活動として、Facebookページを開設するとともに、本学で開催しているシンポジウムや学園祭、オープンキャンパスで、取組の展示や糸紡ぎ・藍染体験等を行っている。 これらの活動を学生が主体となって、地域や企業と連携して取り組んでいくことで、地域活性化につながると考える。
これまでの活動実績	2014年度は、５月～７月にかけ河内木綿藍染紋様を使用した新たなデザインを検討し、本学オリジナルの紋様デザインを作成した。10月からは、河内木綿プロジェクトFacebookページを開設し、河内木綿文化やプロジェクトについての発信を行っている。11月に学園祭で河内木綿藍染体験企画の実施や、河内木綿オリジナル製品の販売を行った。２月は、本学で開催された企業経営に関するシンポジウムで河内木綿製品の展示を行い、地域の企業経営者に河内木綿文化について発信をした。 2015年度は、４月から、毎月１回以上、河内木綿や伝統品に関わる企業や団体を取材し、毎週Facebookページで情報発信を行っている。５月から、本学の敷地内で河内木綿の有機栽培を行っている。６月から、大学で栽培した河内木綿を使用した製品を作成するために、河内木綿の生地化に向けた活動を行っている。

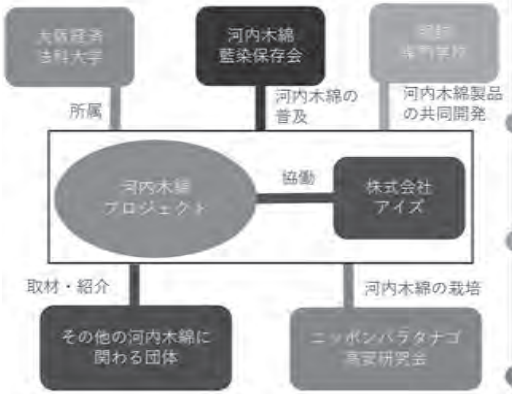
	時　期	内　　容
年間活動計画	2014年４月	• 八尾市立歴史民俗資料館に取材 河内木綿文化についての体験をした。 • 旧川澄家鯉のぼりイベントに取材 地域の人々とともに河内木綿を使用した生地で鯉のぼりを作成した。 • 英語版 Facebook 開始（日本語版は昨年度から） 世界の方々に知ってもらうために、英語で河内木綿文化等の発信を行っている。
	５月～10月	• 河内木綿の有機栽培開始
	６月～11月	• 河内木綿生地作り 大学で栽培した河内木綿を使用した製品を製作するために、糸紡ぎ・機織り・藍染の作業を行っている。
	６月	• Enactus 関西プレ大会参加 Enactus（学生・大学・ビジネスリーダーが協力し合い、起業的アクションで人々の生活を変化させ、より良い持続的可能な世界を創るためのコミュニティ）の関西での発表大会に参加した。 • 高校生を対象に糸紡ぎ体験企画実施 オープンキャンパスで高校生を対象とした企画を実施した。
	７月	• Enactus Japan 本大会参加 Enactus 世界大会の日本代表を決めるための大会に参加した。 • JICA 海外研究員との交流プログラム参加 JICA 海外研究員に河内木綿プロジェクトの紹介し、糸紡ぎ体験を実施した。
	８月	• 河内木綿はたおり工房に取材 河内木綿の種から油を抽出する体験を行った。
	11月	• 大学産河内木綿オリジナル製品作成 • 学園祭で河内木綿伝統文化体験を実施 • いきいき八尾環境フェスティバル部参加 • 河内木綿に関するアンケート調査実施
	２月	• 八尾シンポジウム参加 企業経営に関するシンポジウムで活動の展示を行う。 • BLP 河内木綿プロジェクトホームページ開設

河内木綿とは？

河内地方（現在の大阪府八尾市周辺）で栽培された木綿のこと。
江戸時代～明治時代にかけて盛んに栽培されていた歴史があり、
かつては耕地の7割が綿畑になっていたそうです。
糸が短くて太く、これを使用して作った製品は丈夫で長持ちする
ことが特徴と言われ、洗うごとに布地が滑らかになるため、
使えば使うほどに味がでてくる製品です。
昔の人々の仕事着や暖簾に使用され、重宝されていました。

河内木綿プロジェクトとは？

私たちの通う大阪経済法科大学がある地元八尾市の伝統品、
河内木綿とその藍染紋様に惹かれ、学生ならではの新しい発想
で現代に復活させるべく活動しています。
河内木綿発祥の地である八尾市の住民の中にも、その存在を
知らない人が多く居るのが現状です。そのことに危機感を覚えた
私たちは、地元に向けた情報発信は勿論のこと、世界に対しても
「日本の伝統文化」と「河内木綿の良さ」を発信し、地域に貢献
していくことを目的としています。



連携先の方々

村西 徳子

NPO法人 河内木綿藍染保存会 代表

2009年　八尾市文化賞 受賞

河内木綿藍染紋様の美しさに惹かれ、
40年間河内木綿藍染文様の復刻のために
活動を行う。

加納 義彦

NPO法人 ニッポンバラタナゴ高安研究会 代表理事

河内木綿の有機栽培を通して、
絶滅危惧であるニッポンバラタナゴの保護を
行うべく、学生と共に河内木綿の栽培、
生地化から製品化に意欲的に取り組む。

河内木綿 オリジナル紋様 共同考案

NPO法人 河内木綿藍染保存会と、新しい紋様の開発に取り組みました。
古くから使用されていた鶴亀や華花の紋様とは少し違う水玉模様を
取り入れ、若者でも思わず「いい！」と思えるようなものを目指して
作成しました。

オリジナル紋様の意味

私たちが作成した揚羽蝶紋様には、**『明るい場所へ丈夫に真っ直ぐ進んでいく』**という意味があります。
昔、蝶は蛾の一種であると考えられていました。蛾は暗い場所を好みますが、この中で太陽光を必要としたものが蝶として進化したのだと言われていたのです。それにより、明るい場所へ向かうものの象徴となっていました。
また、麻の葉紋様は、子供の産着やお宮参りの襦袢などに使われており、丈夫にすくすく真っ直ぐ育つ柄という意味を持っています。
この紋様を使用して染められた製品を利用する方が、『明るい場所へ向かって真っ直ぐ進んでけるように』という意味を込めてこの二つを選び、現代でよく使用されている水玉模様と組み合わせて新たな紋様としました。

河内木綿製品の開発

考案した紋様使用し、専門服飾学校と共同で様々な製品の開発を行いました。
製品は、現代の生活に合った伝統品を目指し、ハンチング帽やクラッチバッグ、
ネクタイ等の現代でもよく使用されるものをメインに作成し八尾の中小企業が
多く集まる八尾シンポジウムというイベントで展示を行いました。

経法祭（藍染体験・販売・アンケート調査）

本学で毎年秋に行われている一大イベント『経法祭』で、地元の方々に河内木綿について
もっと知ってもらうために、イベントを開催しました。

- **河内木綿オリジナルコースターを作成する藍染体験**
  有料で昔ながらの藍染を体験してもらい、伝統文化に触れていただきました。
  作ったオリジナルコースターは、良い思い出として持ち帰ってもらいました。
- **服飾専門学校との共同開発で作成した製品の展示・販売**
  共同開発で作成した製品を展示・販売し、多くの方に河内木綿製品に触れてもらいました。
  また、八尾市長もお越しになり、商品を購入していただきました。
- **河内木綿と開発した製品に関するアンケート調査**
  河内木綿の認知度や、製品のデザイン等についてアンケート調査を行いました。

関連団体への取材

河内木綿を復活させるためには私たちだけでなく、地域と連携することが重要だと考え、河内木綿
を始めとする、伝統文化に携わる企業・団体やイベントの取材を始めました。
月に一回は、必ずイベント参加や取材を行っています。

SNSで情報発信

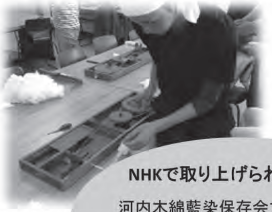
河内木綿の認知度を向上すると共に、将来のEC販売等の土台作りに向けての情報発信をSNSで
行っています。
河内木綿や日本の伝統文化に関わる地域や団体の方々から聞いたお話や、河内木綿プロジェ
クトの活動を紹介しており、日本語版・英語版FacebookとTwitterで紹介しています。

有機栽培

2015年5月本学の敷地内で河内木綿の有機栽培を始めました。
大学の敷地以内にある土地を耕すところから始め、耕した場所の土をクワで盛って形を整え、
畝を作った後、河内木綿の種を開けた穴に植えました。
現在は順調に成長しており、間引きや支柱立てなどを行い定期的に様子を見ながら育ててい
ます。収穫は2015年9月を予定しています。

生地作り

昨年度に採れた綿を使用して河内木綿の生地化も行っています。
生地化には、専門的な知識や膨大な練習量が必要で、技術の担い
手が少ないのが現状です。そこで、私たちは河内木綿藍染保存会
とニッポンバラタナゴ高安研究会の方々からご指導いただき、講義
の合間を縫って、日々練習に励んでいます。

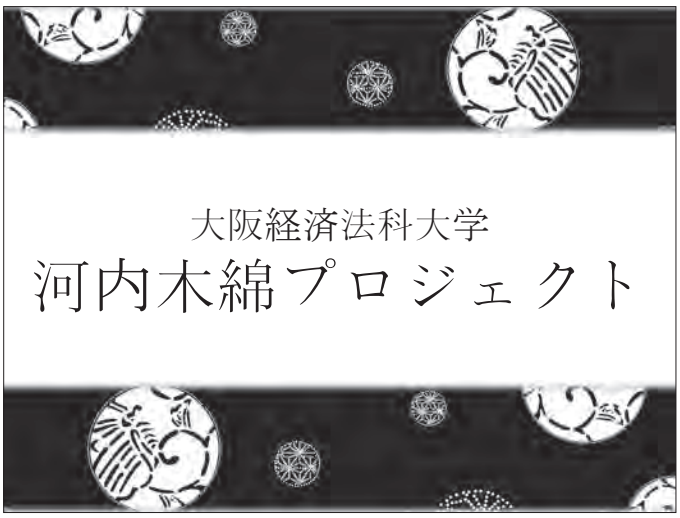


オープンキャンパスで糸紡ぎ体験

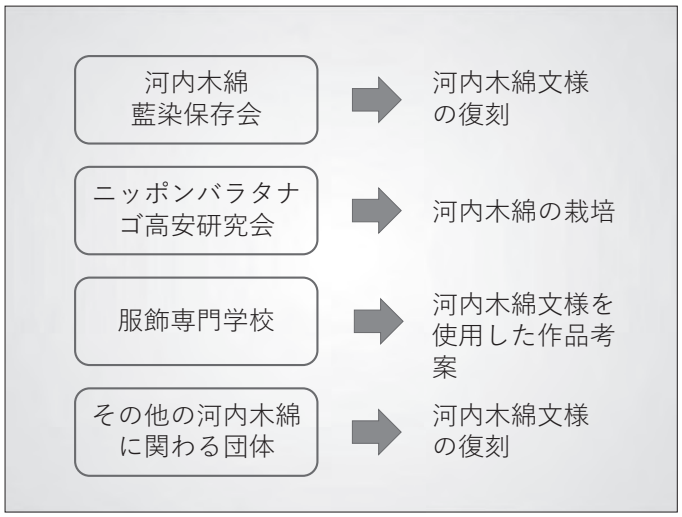
本学のオープンキャンパスで、高校生に向けて綿繰りと糸紡ぎ体験を行いました。
河内木綿に直に触れてもらうことで、河内木綿の認知度向上に貢献すると共に、
八尾市の文化や伝統技術を広めることができました。
また、プロジェクトの紹介も行い、高校生の関心をより多く得ることができました。

NHKで取り上げられました！

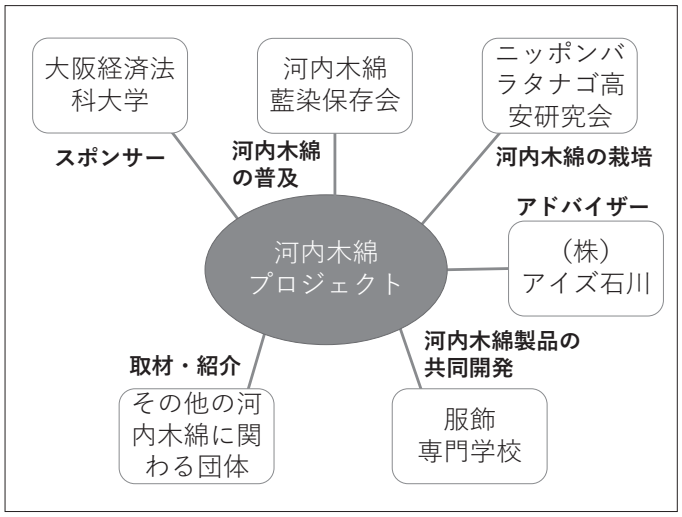
河内木綿藍染保存会で撮影した
藍染体験動画が2015年4月22日
NHKの番組内で取り上げられました。

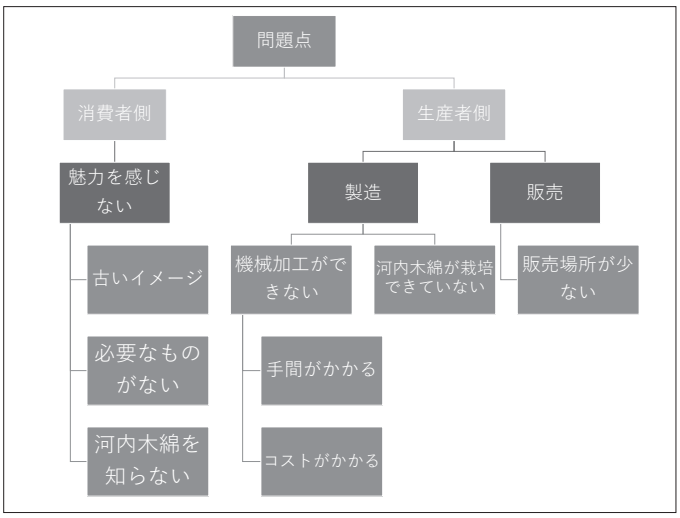

大阪経済法科大学
河内木綿プロジェクト

河内木綿と河内木綿文様

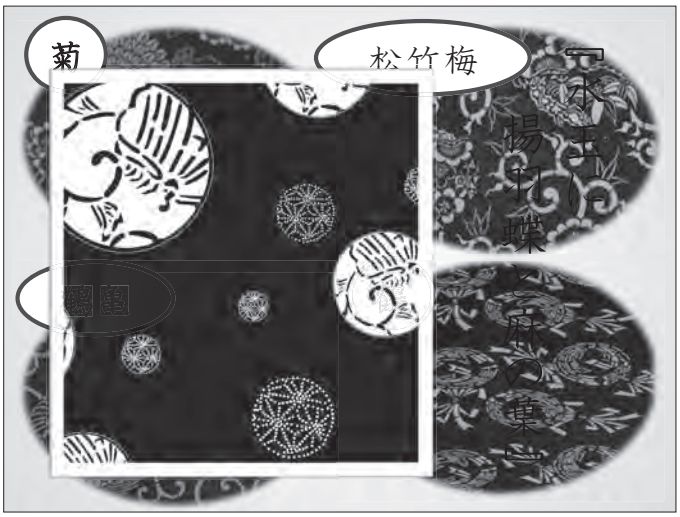

河内木綿
藍染保存会
河内木綿文様
の復刻
ニッポンバラタナ
ゴ高安研究会
河内木綿の栽培
服飾専門学校
河内木綿文様を
使用した作品考
案
その他の河内木綿
に関わる団体
河内木綿文様
の復刻

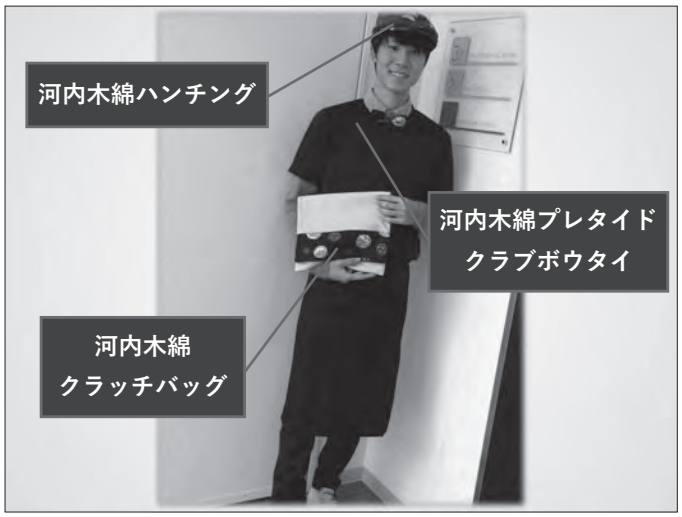
2014年4月
河内木綿プロジェクト発足

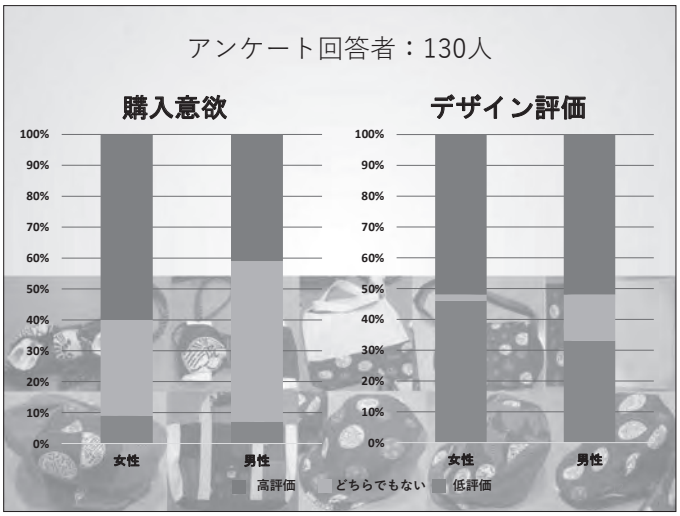

大阪経済法
科大学
スポンサー
河内木綿
藍染保存会
河内木綿
の普及
ニッポンバ
ラタナゴ高
安研究会
河内木綿の栽培
アドバイザー
（株）
アイズ石川
河内木綿
プロジェクト
河内木綿製品の
共同開発
服飾
専門学校
取材・紹介
その他の河
内木綿に関
わる団体


問題点
消費者側
生産者側
魅力を感じない
製造
販売
古いイメージ
必要なものがない
河内木綿を知らない
機械加工ができない
河内木綿が栽培できていない
販売場所が少ない
手間がかかる
コストがかかる

文様の考案


菊
松竹梅
蝶


河内木綿ハンチング
河内木綿プレタイド
クラブボウタイ
河内木綿
クラッチバッグ


アンケート回答者：130人
購入意欲
デザイン評価
100%
90%
80%
70%
60%
50%
40%
30%
20%
10%
0%
女性
男性
高評価
どちらでもない
低評価

藍染体験

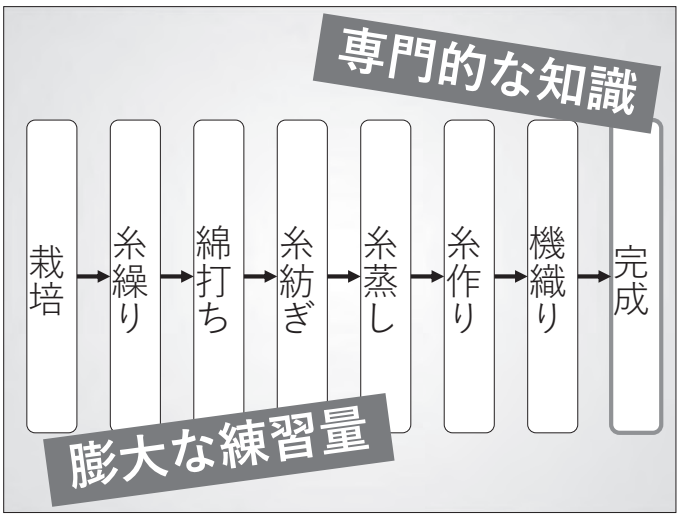
取材

河内木綿プロジェクト
河内木綿プロジェクト ホーム
Facebookページ
メッセージ
お知らせ
インサイト
投稿ツール
河内木綿プロジェクト
衣料品
コールトゥアクションを作成
シェア
タイムライン
基本データ
写真
いいね！
もっと見る
近況
写真・動画
クーポン、イベントなど
最近どんなことがあった？
河内木綿プロジェクト

有機栽培

①
②
③
④

生地化



河内木綿プロジェクトのオリジナル紋様を使用した製品の開発

現代風河内木綿

経法大産河内木綿を100%使用したオリジナル製品の開発

復刻版河内木綿

地元八尾市の小学生向け自由研究企画の実施

河内木綿研究

伝統文化を守りながら、
人と人との和を大切にする。

社会

自然との調和

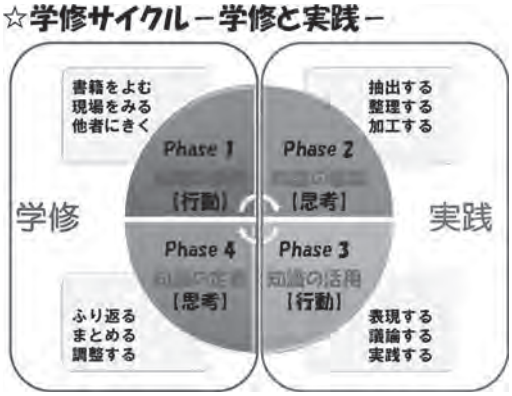
環境

地域の和で生み出す特産品

経済

河内木綿
藍染保存会
八尾市民
服飾専門
学校
河内木綿
プロジェクト
ケーキ屋
NPO法人
八尾市

発表⑬

研究テーマ名	実践のなかで組織行動・人的資源管理を学修する
大　学　名	大阪経済法科大学
担 当 教 員	経済学部　講師　山路　崇正
連　携　先	「大阪市天王寺区」、「玉造 幸村ロード」（JR・地下鉄玉造駅すぐの商店街）
活動の概要	山路ゼミナール（以下、山路ゼミ）では「実践から組織行動・人的資源管理を学修する」をテーマに「学修サイクル」（下図参照(注)）をまわすことで学生の成長過程を可視化している。2015年度は「大阪市天王寺区」のイベント「天王寺 真田幸村博」（2015.5.1-10、2015.10.31予定）におけるフィールド調査、イベント企画の提案、および「玉造 幸村ロード」における商店街活性化イベントの企画・運営（第１弾2015.8.2、以降継続的にイベント企画を計画中）を実践する。 山路ゼミでは、ゼミ内で擬似的に会社組織を設立し学生リーダー「社長」、サブリーダー「副社長」、各イベント企画の内容ごとに「部長」を選出し、それぞれの役職に応じた役割を担当する（指導教員は「顧問・相談役」）。 学修の流れは次のとおりである。(1)実践前に事前学修・準備の大切さ（Phase1）について講義する。ただし、その重要性を理解するまでにはいたらない。(2)そのため自分たちなりに思考し行動するが、なかなか想定どおりにすすまない（Phase2＆3）。(3)実践の結果を内省（Phase4）することで自分たちの知識不足を痛感する。(4)そこで「知識の獲得」の重要性を自覚する。そして次の実践をおこなうにあたり主体的に知識の獲得に取り組み（Phase1）、より高次の実践につなげる。  （注）学修サイクル 学修サイクルとは、Phase1「知識の獲得」（行動）→Phase2「知識の編集」（思考）→Phase3「知識の活用」（行動）→Phase4「知識の定着」（思考）の４つのフェイズからなる学生の成長段階をイメージしたサイクルである。人的資源管理論、組織学習論、知識創造理論等をもとに山路作成。
これまでの活動実績	【2014年度】（2013年度以前は割愛、2015年度は年間活動結果を参照） ① 「天王寺 真田幸村博（真田丸の陣）」受付＆会場整理（2014.11.1）：イベント会場の受付、交通整理、広報活動等のボランティア ② 「第１回ワークショップマルシェ」受付（2014.12.14）：天王寺区委託事業（女性の新たな就労支援）における受付ボランティア ③ 「天王寺区寺ハッカソン」受付＆出場（2015.2.11・14・15）：天王寺区委託事業（ビジネスプランコンテスト開催等）において受付および出場。「IOT部門」、「歴史文化部門」の両部門で入賞 ④ 「第２回ワークショップマルシェ」受付＆出展（2015.3.1）：受付および「紅型うまむい（沖縄県で一般的なお守り）」ワークショップの実践 ⑤ 「天王寺区ビジネスプランコンテスト」受付＆イベント企画運営補助（2015.3.8）：天王寺区委託事業（ビジネスプランコンテスト開催等）における受付ボランティアおよび上場企業経営者の講演会運営補助、「天王寺幸村バーガー」の配膳補助

	時　期	内　　容
年間活動計画	2015年４月	「実践」するための心構え、経営学・マーケティングにおけるフレームワーク、フィールド調査の技法についての講義（「知識の獲得」Phase1）
	2015年５月	「天王寺 真田幸村博」フィールド調査（2015.5.7・10）：イベント・コンサルティングの視点から資料収集・現地調査をおこない、SOWT 分析、AsIs/ToBe 分析、改善 Point の可視化、などを実施（「知識の編集・活用」Phase2＆3）
	2015年６-7月	フィールド調査で得た知見からイベント企画をおこなうために必要となる要因について学修（「知識の定着・獲得」Phase4→1）
	2015年７-8月	「玉造 幸村ロード」における商店街活性化イベント（2015.8.2）：真田幸村ギャラリー写真展企画、幸村にちなんだアクセサリー製作販売、かき氷の販売（「知識の編集・活用」Phase2＆3）
	2015年８－９月	商店街活性化イベントの内省（「知識の定着」Phase4）
	2015年10月	「天王寺 真田幸村博」イベント企画（2015.10.31予定）：ステージ企画、ブース企画の実践（「知識の編集・活用」Phase2＆3）
	2015年11月	イベント企画の内省（「知識の定着」Phase4）
	2015年12月	「玉造 幸村ロード」における商店街活性化イベント（「知識の編集・活用」Phase2＆3）：クリスマス・イベント（仮）の実践
	2015年12月 -2016年１月	商店街活性化イベントの内省・2016年度実施計画の共有（「知識の定着・獲得」Phase4→1） 上記以外にも、状況に応じて学外イベントに参加して、「実践」→「学修」→「実践」→「学修」→…の学修サイクルを数多くまわすことで学生の成長（Level UP）を図る

参加学生

石倉　那樹、大城　奈実、西郷　修司、清水　千春、髙木　渉、武弘　美憂季、唐　衡、當真　彩香、冨永　彩華、仲嶺　眞太、中村　龍嗣、廣瀬　恵、松永　晃治、湊　琴美、宮口　俊樹、毛　澤健、八木　卓、山腰　ゆかり、山入端　泉花、吉脇　滉大

活動の成果

山路ゼミ2015年度の取り組みは、『儲ける仕組みをつくるフレームワークの教科書』（川上昌直著）をテキストとして「イベント企画」の基本的知識を学修した（Phase1.「知識の獲得」）。そして「天王寺 真田幸村博」（2015年５月１日-10日）のイベント・コンサルティング（フィールド調査）を実施することで幸村博の「現状・課題・あるべき姿」の要因分析をおこない「学生が考えるイベント企画の課題点」を抽出した（Phase2.「知識の編集」）。

次なるステップとして、学生自らがイベント企画を実践するために「玉造幸村ロード」の地域活性化イベントを計画した。山路ゼミは学生リーダー（社長）、サブリーダー（副社長）のもとイベント企画部門のリーダー（部長）と部門メンバーで擬似的な会社組織を形成しており、社長を中心に３部門（幸村ギャラリー部門、幸村ミサンガ部門、幸村かき氷部門）がそれぞれ、企画立案、企画書作成、地域との交渉、イベント当日（2015年８月２日）の運営を実践した（Phase3.「知識の活用」）。実践結果のふり返り（2015年９月５日）から、「出来たこと・出来なかったこと・要改善点」を内省することで知識の定着を図った（Phase4.「知識の定着」）。そこから「リーダーシップ」、「コミュニケーション」（LINE 等のツール活用含む）、「報連相」、「準備の大切さ」、「ビジネス書類の書き方」など組織行動論的およびプロジェクトマネジメントとしての実践的課題が多数抽出された。

10月に入り、半年間の学修と実践の成果を踏まえ、レベルアップして二回り目の学修サイクルを回すべく知識の獲得フェーズ（テキスト『戦略は「１杯のコーヒー」から学べ!』永井孝尚著）をおこない翌月以降の実践フェーズにつなげていく予定である。

研究事業に対する地域からの評価

山路ゼミは天王寺真田幸村博への企画提案・実践や幸村ロードや下寺町といった地域との連携など、この２年間で数多くの実績を残してきました。学生たちが主体的に企画を考え、能動的に地域・行政に飛び込んでいく姿勢は表敬に値します。学生の考える力、行動する力を引き出すことに真摯な山路先生の指導のもと、ゼミ生の皆さんが天王寺区を「第二の故郷」と呼べるほど好きになり、皆で一緒に地域活性化の喜びを分かち合っていけることを期待しております。

大阪市天王寺区長　水谷　翔太

幸村ロードを玉造地域の活性化の為結成しまして丁度丸二年が経ちます。元々個人商店主の集まりで地域のイベントの経験も無くイベントの企画立案には困っておりました。そんな中大阪経済法科大学の山路先生と知り合う事が出来学生さん達に地域の街興しを御協力いただける事になりました。頭の硬いおっさん達に比べ存在だけでも元気で明るい振る舞いをされている学生さん達には大変感謝しております。これからも共に宜しく御願いします。

幸村ロード代表　雑穀屋やま元　店主　山元　茂弘

地域連携 学生フォーラムin大阪2015

真田幸村から学ぶ組織論

組織行動・人的資源管理を実践のなかで学修する

大阪経済法科大学　山路 崇正 ゼミナール
【発表】大城 奈実、西郷 修司、髙木 渉、當真 彩香、宮口 俊樹

1

2

1. コンセプト（理念・ビジョン）
2. 取り組みの心構え
   （1）学修サイクル
   （2）学修内容
3. 2015年度のテーマ
   （1）実施計画
   （2）組織図
4. 活動内容
5. 学修したこと
6. 今後の予定

3

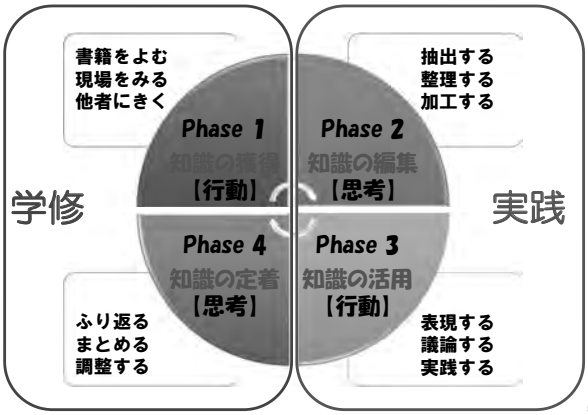
1. コンセプト（理念・ビジョン）

温故創新

―故（ふる）きを温（たず）ね、新しきを創る―

4

2. （1）学修サイクル－学修と実践－



5

2. （2）学修内容－組織行動と人的資源管理－

組織行動

- 個人の行動様式
  - ◇コンピテンシー
  - ◇モチベーション
  - ◇意思決定
- 集団の行動様式
  - ◇リーダーシップ
  - ◇コミュニケーション
  - ◇グループダイナミクス
- 組織の行動様式
  - ◇コンフリクト・交渉
  - ◇パワー・政治
  - ◇キャリア・組織文化

人的資源管理

- 雇用管理
  - ◇採用、配置、異動、教育訓練、退職
- 就業条件の管理
  - ◇場所、労働時間
- 報酬管理
  - ◇評価、賃金、昇進
  - ◇福利厚生
- 労使関係
  - ◇労働組合
  - ◇ワークライフバランス

6

3.（1）実施計画

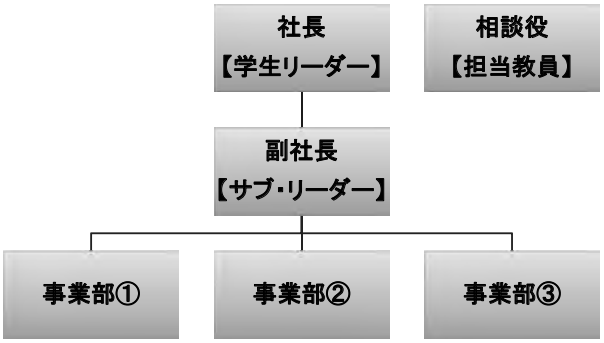
大坂夏の陣400周年記念イベント
「**天王寺 真田幸村博**」(主催:大阪市天王寺区)
を舞台に、

(a)学生企画の立案・運営
(b)イベント運営の学生実行委員

の実践を通じて、
組織行動・人的資源管理
を学修する。

7

3.（2）組織図



8

4. 活動内容－全体像－

「知識の獲得」－Phase1－2015年1月～4月
書籍「儲ける仕組みをつくるフレームワークの教科書」

「知識の編集」－Phase2－2015年5月
「天王寺真田幸村博」フィールド調査(5/7、5/10)

「知識の活用」－Phase3－2015年5－8月
「玉造 幸村ロード」商店街活性化企画の実践(8/2)

「知識の定着」－Phase4－2015年9月
同企画の内省・ふり返り

「知識の獲得」－Phase1－2015年10月
書籍「戦略は「1杯のコーヒー」から学べ！」

4. 活動内容－知識の獲得－

☆. 顧客価値を重視
「誰に」「何を」「どのように」を考え抜く！

☆.「ふとればかち」の視点
「不満」「不便」「不具合」など、
「不○○」を取り除けば「価値」

「不取れば『価値』」

	Who（誰に）	What（何を）	How（どのように）
顧客価値	どんな用事を持った「人」か？	解決策として「何を」提供するか？	代替策との違いを「どのように」表現するか？
		最重要Point	
利益	「誰」から儲けるか？	「何」で儲けるか？	「どのような」時間軸で儲けるか？
プロセス	「誰」を引き込むか？	強みは「何」か？	「どのような」手順でやるか？
		説得力向上Point	

10

4. 活動内容－知識の編集－

11

4. 活動内容－知識の活用－

12

4. 活動内容-知識の定着-

13

5. 学修したこと　～組織～

顧客視点　　チームワーク

他のチームとの協力　　行動意識

14

5. 学修したこと　～組織～

使えない！

15

5. 学修したこと　～組織～

skype™

16

5. 学修したこと　～商品企画～

数量　　価格

備品リスト

17

6. 今後の予定

「天王寺 真田幸村博　決戦！天ノ陣」

ステージ企画＆イベントスタッフ 10月31日(土)

商店街「玉造 幸村ロード」企画-第二弾-

イベント企画 2016年1-2月(予定)

18

ご清聴ありがとうございました

19

当日の風景

広報用チラシ（参考）

地域連携　学生フォーラム in 大阪 2015

～地域と共に学ぶ連携の道標（みちしるべ）～

【趣旨】大学コンソーシアム大阪では、会員校の地域での課題解決に取り組む学生の研究活動等の発表交流会を開催します。
学生の地域連携に取り組む意識の高揚と地域連携活動の情報を会員大学や自治体関係者等と共有・発信する機会とし、地域連携の活発化を目指します。

参加費：無料！

対象：どなたでも
事前申込制
（定員 100 名）

『チイキとの関わり事業』って何！？

学生の発表を聞きにきませんか？
他大学・他分野の学生との交流は
きっと刺激的☆

日時：2015 年 10 月 18 日（日）

・フォーラム　10:00～16:30
・交流会　16:30～17:30

会場：難波御堂筋ホール　9A

地下鉄御堂筋線「なんば」駅 13 号出口すぐ
（大阪市中央区難波 4-2-1　難波御堂筋ビルディング）

★参加ご希望の方はメールでお申込ください（申込締切：10/16（金）17:00）★

・メールアドレス：　chiren@consortium-osaka.gr.jp
・件名には「地域連携 学生フォーラム in 大阪 2015 参加申込」と記載してください。
・本文には下記の内容を記載してください。
　① 氏名（フリガナ含む）
　② 郵便番号　③住所　④メールアドレス
　⑤ 所属先・職名（学生の場合は大学名・学部・専攻・学年）

※申し込みの際にお送りいただきました個人情報は、本件に関するご連絡以外では使用しません。
※3 日以内（土日祝は除く）に大学コンソーシアム大阪から返信メールが無い場合はお問合せください。

【問合せ先】　特定非営利活動法人　大学コンソーシアム大阪（事務局）
ＴＥＬ：06-6344-9560（※平日（月～金）9：30～17：30）

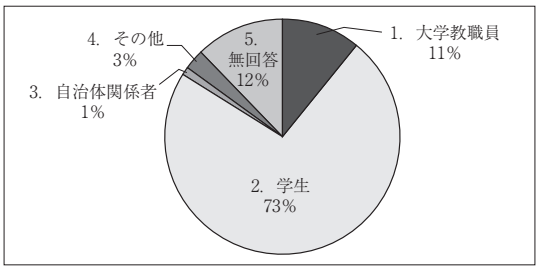
発表内容 ※発表は20分

10：10～	すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト 担当教員：浅野　英一 （摂南大学 外国語学部　教授）	少子高齢化と過疎化について、学生自身が過疎地域で活動し課題を発見し、大学生らしい発想と行動力で取り組んでいる。農業・ふるさと創生・観光の3つを柱にし「よそ者、若者、大学生」という立場でプロジェクトを展開している。
10：30～	地域の自然と地元住民との繋がり 担当教員：前迫　ゆり （大阪産業大学 人間環境学部 教授）	私たちのプロジェクトでは、川や山での生態系調査や田畑の維持・保全を目的として、人と自然の共生をキーワードとして、活動している。また、地域のイベントにも参加し、地元住民との交流や情報発信を行っている。
10：50～	・熊野本宮子どもエコ☆ツアー ・楽しいんやさかい大和川水辺の楽校 担当教員：安田　忠典 （関西大学 人間健康学部　准教授）	2010年、堺市に人間健康学部を設置する際、環境モデル都市堺が誇る市民向け環境教育機関である堺エコロジー大学に若者向けのコンテンツが少ないという課題があったのに対して、体験学習法を専攻する安田ゼミの学生が堺市の小学生を世界遺産の地熊野本宮へ3泊4日のエコツアーへ誘うというプログラムを開発した。
11：10～	見山の郷　商品開発プロジェクト 担当教員：村上　薫郎 （追手門学院大学 経営学部　准教授）	「見山の郷 商品開発プロジェクト」は、追手門学院大学ミが地域に興味を持ち、マネジメントのPBL活動を通じて、その人々・自治体・企業などをつなぐ「懸け橋」となり、地域の問題の解決を試みるものである。
11：40～	奈良県川上村の観光資源PR用ICTインフラ構築 担当教員：山内　雪路 （大阪工業大学 情報科学部　教授）	奈良県川上村の観光資源PRを担うシステム制作を行っている。村内の桜の名所にライブ中継カメラを設置しているほか、セミナーハウス等へのフリーWiFiスポット設営、山奥にある氷瀑の観測ネットワーク設営などに挑戦中である。
12：00～	地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を間伐材と地場木材を活動した木の塀「スーパーフェンス」で代替するプロジェクト 担当教員：亀井　克之 （関西大学　社会安全学部　教授）	防災と地球環境問題の両方に役立つプロジェクトに、マーケティングという観点から、参画、協力し、その試みについてプレゼンする。
13：20～	地域と子ども・大学生の繋がりを生身で感じる道草寺子屋 担当教員：久　隆浩 （近畿大学 総合社会学部　教授）	本研究事業は地元で運営している道草寺子屋の事業を基にしている。それは学校放課後事業や学習塾事業または地域活動への参加が主である。それらの実践から子ども教育・地域との繋がりの在り方を分析した内容を発表する。
13：40～	e-yanプロジェクト ～産学連携による大阪のまち活性化活動～ 担当教員：大野　司郎 （近畿大学　総合社会学部　講師）	本プロジェクトは、大阪の「いーやん」な企業・人・イベントをラジオや記事などの情報配信を通じて、産業の交流を育み，まちの活性化につなげることを目的としている。これまでに実施してきた活動について発表する。
14：00～	地元食材を観光客向けの名物料理に仕立てることによるブランド化への挑戦 「料理を作り、料理で創る立山ブランド」 担当教員：高橋　一夫 （近畿大学　経営学部　教授）	富山県立山町主催の地域活性化策を提案するコンペティションに参加し、町の特産物を使った名物料理を町民が創りだすことによって、町の新ブランドを展開する企画を、立山町町長をはじめとする審査員にプレゼンテーションを行った。
14：20～	大阪おみやげ「かるた」のデザイン、パッケージデザイン 担当教員：門脇　英純 （大阪成蹊大学　芸術学部　教授）	株式会社カワキタと株式会社せのやとコラボし、新たな“大阪お土産モン”の誕生に向けたプロジェクトを発足。製品コンセプト、ターゲット層等の分析からよみ札、カルタイラスト・デザイン、商品パッケージの製作を行った。
14：50～	官学連携次世代環境教育教材開発プロジェクト 担当教員：門脇　英純 （大阪成蹊大学　芸術学部　教授）	長岡京市(京都府)と連携し、全国で使える子ども向けの環境学習教材「デジタル紙芝居」5作品を制作。また、クラウドファンディングを活用し、デジタル紙芝居をもとにした絵本を製作するプロジェクトを進行している。平成28年度には、京都府を中心に学校、図書館等に配布する計画。
15：10～	河内木綿プロジェクト 担当教員：呉　志賢 （大阪経済法科大学　教養部　教授）	大阪経済法科大学BLP呉ゼミ「河内木綿プロジェクト」が、地元八尾市の伝統文化である河内木綿文化を学生の新しい発想で現代に復活させ、世界に発信することで、地域に貢献していく活動をしている。
15：30～	実践のなかで組織行動・人的資源管理を学修する 担当教員：山路　崇正 （大阪経済法科大学　経済学部　講師）	山路ゼミナールでは、擬似的に会社組織を設立し社長（学生リーダー）が中心となり「天王寺　真田幸村博」でのイベント企画、「玉造 幸村ロード」の商店街活性化プロジェクトを通じて実践のなかで組織行動・人的資源管理を学修している。

地域連携　学生フォーラム　in 大阪　2015
参加者アンケート集計結果（78回答）

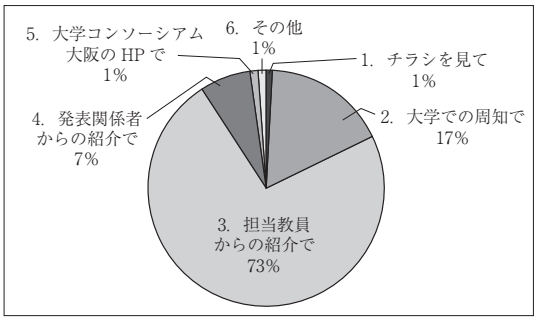
1．所属先について

1．大学教職員	9
2．学生	57
3．自治体関係者	1
4．その他	2
5．無回答	9
合計	78



2．このイベントを知ったきっかけ

1．チラシを見て	1
2．大学での周知で	13
3．担当教員からの紹介で	57
4．発表関係者からの紹介で	5
5．大学コンソーシアム大阪のHPで	1
6．その他	1
7．無回答	0
合計	78

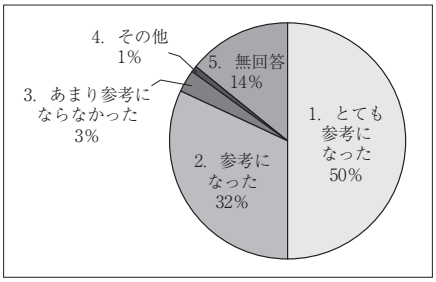


3．特に関心をもった内容（3つまで選択）

①すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト（摂南大学）	14
②地域の自然と地元住民mの繋がり（大阪産業大学）	2
③熊野本宮子どもエコ☆ツアー	5
楽しぃんやさかい大和川水辺の楽校（関西大学）	6
④見山の郷　商品開発プロジェクト（追手門学院大学）	7
⑤奈良県川上村の観光資源PR用ICTインフラ構築（大阪工業大学）	23
⑥地震で倒壊する危険性のある老朽化したブロック塀を間伐材と地場木材を活用した木の塀「スーパーフェンス」で代替するプロジェクト（関西大学）	23
⑦地域と子ども・大学生の繋がりを生身で感じる道草寺子屋（近畿大学）	13
⑧e-yanプロジェクト～産学連携による大阪のまち活性化活動～（近畿大学）	8
⑨地元食材を観光客向けの名物料理に仕立てることによるブランド化への挑戦「料理を作り、料理で創る立山ブランド」（近畿大学）	27
⑩大阪おみやげ「かるた」のデザイン、パッケージデザイン（大阪成蹊大学）	36
⑪官学連携次世代環境教育教材開発プロジェクト（大阪成蹊大学）	14
⑫河内木綿プロジェクト（大阪経済法科大学）	9
⑬実践のなかで組織行動・人的資源管理を学修する（大阪経済法科大学）	0

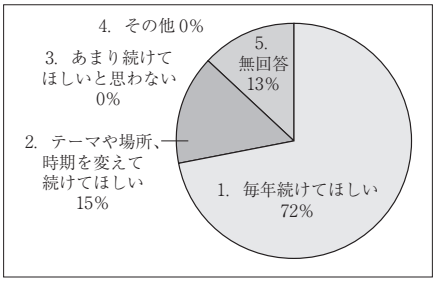
4．今後の研究や地域連携の取り組みの参考になったか

1．とても参考になった	39
2．参考になった	25
3．あまり参考にならなかった	2
4．その他	1
5．無回答	11
合計	78



5．イベントの継続について

1．毎年続けてほしい	56
2．テーマや場所、時期を変えて続けてほしい	12
3．あまり続けてほしいと思わない	0
4．その他	0
5．無回答	10
合計	78



フォーラムの感想や意見

○感想

始めて参加したが、すごく良い経験となった。
他校の取り組みが分かり大変勉強になりました。
自分が学んでいる分野と全く違う分野の見解、考えが今日１日でたくさん学べてとてもためになりました。
知らなかった事、このイベントをきっかけに知れた事が多く、参加して大変良かったと思いました。
今回「地域連携 学生フォーラム in 大阪」に参加させていただき、他の大学の活動を聴くことで新たな発見がありました。さらに私達が行っているプロジェクトの新たな課題も理解することができました。
様々な大学の方々の発表を聞くことにより刺激を受けました。いつかその他の学校と同じプロジェクトをやってみたいです。
初めて外部で他大学合同発表会に参加させていただきました。私達が行っている活動や、他大学で行っている活動を知ることができ、自分たちのモチベーションや考えを改めて考えられる良い機会でした。
自分たちの活動を広く他の大学や企業の人達に知ってもらえたと同時に自分たちの活動を見直し、これからの活動を考える良い機会になったので今後も続けてほしいです。
自分たちのプロジェクト以外に色々なアイデアのもと、たくさんの面白い事の発表を見てすごく参考になった。またこのイベントに参加したいと思いました。
自身のプロジェクトだけでは狭まる視野が広くなりました。また、同じ大学生が様々なことをチャレンジしているという事実により挑戦への意欲が湧きました。
自分たちの活動だけでなく、多くの学生が地域と関わって学校外での活動を大切にしていることが分かり、刺激を受けた。また発表の事前準備をすることで自分たちは何を目的とし、改善点や振り返りをする場ができ、活動が明確になった。
学内では様々な活動をしているプロジェクトの発表会はあるが、大学外の様々な発表が見れたのはとても新鮮で勉強になった。
普段私達のゼミではジャージやスポーティな服装で屋外での活動が多いです。なので今日はスーツを着て改まった発表会ということで新鮮でした。他大学の様々な活動を知れて視野が広がりました。こういう交流会をきっかけに生まれるプログラム、プロジェクトもあると思います。非常に良い機会だと思いました。
学生が主体となって司会、発表を行っており良い場であると思う。他の大学との交流の場が少ないため、この場は大切にしたいと感じました。
他大学との交流の場がなかったのでこういう機会があり良かったと思う。
普段、他の大学生と触れ合う機会はあっても何を学んで何を研究しているのかまでは話す機会がなかったので、とてもよい経験になりました。同時に他大学ではこんなこともしているんだと知ることができ、刺激になり、私達もまだまだ負けてられないと意識が高まりました。このような企画に参加することができ、本当にうれしく思います。
各々の発表やその活動が非常に魅力があり、発表後にある質疑応答でも新しい提案やさらに詳細な説明があったりととても勉強になりました。またこの様な活動は学生は勿論ですが何より地域の方々の協力が必要不可欠であると発表を見て改めて思うことが出来ました。
自分達だけが特別な活動をしているわけではないということを知った。他大学の方たちの地域連携活動もおもしろいことばかりでぜひ一緒に取り組みたいと思った。とてもためになった。
地域連携ということで様々な発表があって自分達のやっている事の他にも色々な形の地域連携があることがこのフォーラムを通して分かり、中には自分達と同じような分野でもやっていることや、やっていないことが多々あり勉強になった。今回指摘してもらった内容を今後につなげていきたいと思いました。
私は現在大学４回生ですが、大学２回、３回生から参加する方はプレゼンテーションのやり方や伝え方についても勉強できる場になるとても良い機会になるのではないかと感じ、良い勉強になりました。
こういった発表の場に立つのは初めてで緊張もありましたが、他大学生の発表はプレゼンの仕方やPPTの作成方法等学ぶところが多くありました。また他大学の取り組んでいるプロジェクトが何を学び、何を目的としているのかということを学べ、また自分達と似たようなプロジェクトを行う大学もあり、様々な形でつながりを持てたら良いと感じました。
• このような発表の場を設けて頂きありがとうございました。 • 自分自身も何もかもが初めての試みだったのでとても勉強になりました。 • またこのような機会があれば、今回の反省を活かし、自分の力に変えたいと思います。
私自身、ゼミ活動に関しては胸を張って言える事だと思っていましたが、上手く発表する事ができなく残念に思う反面、他の学生は活動内容を様々な場で発表されていてとても上手で圧巻されました。とてもいい勉強の機会になりました。
各大学で学生が地域と連携しながらどういった取り組みがなされているのか、様々な話を聞くことができ、大変参考になりました。

他大学とあまり関わる機会がなかったので、とても勉強になりました。考え方の違いに気づき面白く感じた。
パワーポイントの使い方や、他の大学の方々との交流の良い機会となりました。
更なるレベルアップを目指し、これからに役立てていきたい。
プロジェクトの後輩が出ているということで見に来ましたが自分たちがやってきた活動を色んな人に知ってもらえて良かったです。また他の団体の発表も色々と勉強になりました。
学生のレベルが高く（活動内容、プレゼンテーション力など）、本学学生と教員にとってもよい勉強となりました。プログラム作成は今後集約、編集して本にもできるように思いました。
学生の目線での発想と行動が企業として参考になりました。

○意見等

学校毎ではなく、テーマ毎にまとめて発表順を決めてほしい（教育、ビジネスなど）。
各大学により発表する内容がバラバラなので興味がある発表と興味のない発表があった。
テーマをもっと絞ってより専門的な領域に踏み込む土台となるようなイベントとなれば良いなと思いました。
初めての参加でしたが有意義でした。せっかくなので関係者だけでなく、行政、企業の方々も参加していただくことでこのフォーラムの理解と発展につながることと感じました。時間がかなり過ぎて進行してたので、タイムスケジュールの見直し及び発表交代のスムーズな運営、進行をお願いしたい。
• 全体としてプロジェクトの内容紹介に力点が置かれており、活動をしている目的や目標が何なのか活動を通してどのような気づきや成長があったのかが明確でない発表があった。 • 司会を学生が担当するのは良いが、一人で良いように思う。 • プロジェクトを経験しての新たな課題や、失敗から得た気づき等を聴きたかった。
今回、地域との連携に視点を置いていたが、もう少し地域と環境という視点のテーマがもう少しあった方が良かったと思った。
日時、プログラム、全てGOOD!レジュメに代表者の連絡先を記入してみても良いのでは？
今回３部構成となっていましたが、午後からの２部構成で良い気がします。昼食等で時間を気にしなければならなかったのが残念です。
発表希望校が増えてきたがなんとか続けていただきたい。例えば複数日程やテーマ毎の複数会場等。
今回は先生の協力によってプロジェクトが可能、実現できたようであることが多かったが、今後は学生自らが地域課題を発見し解決していく事例を中心にご発表していただければと存じます。
地域連携であるのに連携する視点が少なすぎると思います。大学教員には学生に“やらされている感”があり、これをコマーシャルするものではないという自覚も必要かと思います。

特定非営利活動法人　大学コンソーシアム大阪
〒530-0001 大阪市北区梅田 1-2-2-400　大阪駅前第 2 ビル 4 階
TEL：06-6344-9560　FAX：06-6344-9561
MAIL：chiren@consortium-osaka.gr.jp（事務局　地域連携担当）
URL：http://www.consortium-osaka.gr.jp/